大雪山から育まれる文献書誌集

～豊かな自然・さまざまな生命・歴史文化の記録～

北海道
東川町
－写真の町－
写真文化首都

北海道・東川町

ふるさとの山、大雪山の文献書誌

東川町のエリアに大雪山国立公園の主峰・旭岳がすっぽり入っています。ふるさとの山、大雪山は、アイヌの人々がカムイミンタラ（神々の遊ぶ庭の意味）と呼んでいた特別な山です。豊かな自然はさまざまな野生の命を育み、町から眺める姿は雄大で美しく、日本を代表する名山のひとつです。

自然が豊かな山であると同時に、さまざまな人がかかわり、多くの本や研究が残されてきた大雪山です。人とのかかわりを視点にすると、日本一の「文化の宝庫」ともいえます。北海道が蝦夷地と呼ばれていたころから多くの探検家が歴史的な紀行文を残し、明治時代の文士が名文を残して、大雪山は徐々に全国に知られていきました。

高山植物、動物、昆虫、地質、火山、気象、雪の結晶などそれぞれの分野の研究者が登り、研究成果を発表しています。登山、縦走、冬山、スキーなど登山記やガイドブックは古典的な名著が多く、そして最新版としてこれからも発行され続けていくことでしょう。優れた写真家たちが心血を注いだ素晴らしい写真集にも恵まれています。そして、これからも写真家たちは大雪山を撮り続けることでしょう。

大雪山の文献書誌を東川に集め、多くの人に読み、親しんでいただき、「文化の宝庫」を全国に発信していきたい。そのような目的で、どのような本が東川にはあるのか、「目録」を作りました。ふるさとの山への知識を深めていくきっかけになることを願っています。

目　次

文献書誌集に寄せて

『大雪に魅せられて ～父、戸川幸夫に流れていたもの』 … 戸川久美 …… 1
『「われらの大雪山」（愛山渓新聞社々歌）の誕生まで』 … 大須賀羊一 …… 2
『大雪山スキー滑降、気圧計で命拾い』…… 前田光彦 …… 4
『ヒマラヤと大雪山』…… 梅沢　俊 …… 5
『美しい雪の結晶が降る大雪山の麓』…… 神田健三 …… 6
『血縁の山　小泉岳』…… 小泉雅彦 …… 7
『北の山にあこがれて』…… 嶋田　健 …… 8
『「東川町民」を自称する初代レンジャー』 … 二橋愛次郎 …… 9
『永年にわたる大雪山への思い』…… 渡辺康之 ……10
『大雪山に関わる歴史・人文の足跡を追い求める』… 武田　泉 ……11

大雪山文献目録 ……13

インデックス ……41

書籍紹介

小泉秀雄の貴重な手書き資料集 ……48
天人閣支配人40年、大門金光の幻の原稿 ……51
受け継がれて41年 カレンダー「大雪山の四季」
　営林支局、高橋秀雄さんから写真家、後藤昌美さんへ ……56
半世紀を超える研究、学習の歴史
　北海道教育大学大雪山自然教育研究施設 ……57
宮部金吾博士の大雪山高山植物園構想
　俵浩三さん　90余年ぶりに偶然発見 ……63
一の弟子・舘脇操と大雪山　宮部博士の歴史的資料発見に寄せて ……73

大雪に魅せられて　～父、戸川幸夫に流れていたもの

戸 川 久 美

経歴

認定 NPO 法人トラ・ゾウ保護基金（JTEF）理事長。http://www.jtef.jp/
イリオモテヤマネコを発見した動物作家、戸川幸夫の次女。父の動物文学を児童書へリライ ト､解説などを行う。1997 年にトラ保護基金を設立。2009 年トラ・ゾウ保護基金として新たに NPO 法 人を取得し、絶滅に瀕するトラ、ゾウ、イリオモテヤマネコの保全活動を行う。インドやケニアに出向き、現地の協働パートナーと共に現地の 保全対策、違法取引防止、国内での普及活動に尽力。西表島でも交通事故からヤマネコを守るために「やまねこパトロール」、島の全小中学校 で「ヤマネコのいるくらし授業」 を行っている。
青山学院大学文学部英文科卒。YMCA 東京日本語学校講師。

あっという間の出来事だった。父が家で指圧治療を受けていた時、飼っている日本犬のコマが庭から指圧師さんに向かって飛びかかったのだ。咬む犬ではなかったのだが、正面から飛びかかられた指圧師さんはよろけて腰を抜かした。私が子どもの頃のことだ。

父、戸川幸夫の愛する犬は日本犬であった。土佐犬のような大きい犬ではなく、柴犬より少し大きい中型の四国の猟犬で２m位の柵も身軽にらくらくと飛び越えていた。家族には甘えるが外の人には決して心を許すことのない日本犬が父の大のお気に入りで、私が生まれてから父が病気で倒れるまで、ずっと家には四国犬や北海道犬などが何頭もいた。

普段、父は２階の父の部屋で指圧を受けるのだが、その日は春の初め、やわらかい風が心地よかったので１階の部屋で窓を開け放ち庭を眺めながら治療をして頂いていたのだ。コマにしたら、見知らぬ男が大切なご主人さまの体に乗って襲いかかろうとしている一大事だったのだろう。父はコマを叱り部屋から追い出し指圧師さんに謝っていたが、内心は嬉しかったにちがいない。

父の作品には犬がよく出てくるが、大雪山を自由自在に走り回る「牙王物語」の主人公、オオカミとの混血の「キバ」のように野生の匂いをぷんぷんさせる犬で、ペットの犬ではない。家で飼っていた犬たちにも父は決して「お手」や「お座り」など覚えさせたことはなかった。東京で飼うにしても、野生の世界で闘うような日本犬の本能を失わせては犬たちに失礼だと思ったのだろう。

北海道から西表島まで父は日本の秘境を訪ね歩いた。子どものころから動物好きではあったが、父の関心は動物１頭１頭の個体ではなくその種が生き続ける世界にあった。生きものたちの住処が狭められる開発や、周囲の人たちの心なき振舞には生きものたちの気持ちになって怒り、哀しんだ。人の手でオオカミを北海道から葬り去った歴史には心を痛め、作品の中でオオカミに詫びた。

そんな父の思いを私が受け継ぐと決めたのは、父が脳梗塞で 10 年間車椅子生活になってからだ。父が作品を通して訴えたかったこと、それは私たち人間にも大いに関係のある自然環境を守ることである。自然は穏やかな美しい時ばかりではない。時には厳しく人間を試すときもあり、私たちは人間の小ささを思い知らされる。人間は大自然を作れない。だからこそ、今、残存する大自然には、お邪魔させていただくという謙虚な気持ちで向かいたいと思っている。

「われらの大雪山（だいせつざん）」（愛山渓新聞社々歌）の誕生まで

大須賀羊一

経歴

1931 年、野付牛町（現・北見市）生まれ。1954 年、北海道学芸大学旭川校（現・教育大学）卒。遠軽・紋別・旭川にて高校在職 43 年（音楽担当）。その間、山岳部顧問、高体連山岳部専門委員として生徒を指導。登山を始めたのは1952 年。愛山渓新聞には1958 年より学芸部長として参加、第 3 代社長を務める。「大雪山山の村」に改組後は 1972 年より議長を 23 年間、1994 年より第 9 代村長として 13 年間在職。2007 年、村民高齢化により「山の村」は愛山渓新聞から通算 50 周年にて閉村。

その昔、国道から 20㌔、大雪山の山懐に抱かれた冬の愛山渓は陸の孤島であった。その愛山渓での年越しを目指して冬山の重装備で深雪を踏み分ける山男たちがいた。1957 年、重装備の中に中古の謄写印刷機一式、インク・ザラ紙まで忍ばせて現れたのが、後に「重い神々の下僕」で直木賞の有力候補となった三好文夫だった。本邦初の山岳新聞を発刊しようと言うのである。居合わせた山男たちも忍（たちま）ちこれに同調し、1957 年 12 月 29 日「愛山渓新聞」第 1 号の発刊となった。発行母体名は「愛山渓新聞社」。印刷機一式所有の資本家：三好文夫が当然のように初代社長となった。

社歌「われらの大雪山」は、詩人小野寺与吉（第 2 代社長）が書き下ろし、1961 年発行の第 23 号に掲載された。初めてガリ版で描いたと言う坂本直行画伯の「雲井が原から」が紙面の上半分を飾った。第 1 節「愛山渓」、第 2 節「旭岳」、第 3 節「トムラウシ」、第 4 節「大雪山」と主題別に描かれた「われらの大雪山」は、集う社員・山男一同の共感を呼ぶ詩であった。

- 第 1 節　“オブジェの谷”は、後の名誉村民根守悦夫画伯が既に紙面を飾っており、“粉雪ふんでラッセル”はスキーを履いていても胸まで埋まる軽い雪に悩まされたラッセル。“雪煙なびく頂き”愛別岳は愛山渓のシンボル。（“粉雪ふんで”は後に“木洩れ日受けて”に改変）
- 第 2 節　“噴煙白い姿見池”で旭岳の頂きに谺（こだま）を響かせたいと思わない山男はいるだろうか？
- 第 3 節　銀杏が原の岩銀杏の白い花、音をたてて流れる清冽な雪水、昏（く）れゆくオプタテシケ～十勝岳のやまなみ…は正に大雪山の白眉。
- 第 4 節　狭い深い碧空（あおぞら）、一面の紅葉と新雪の峰々の対比は、沢のぼりの醍醐味。

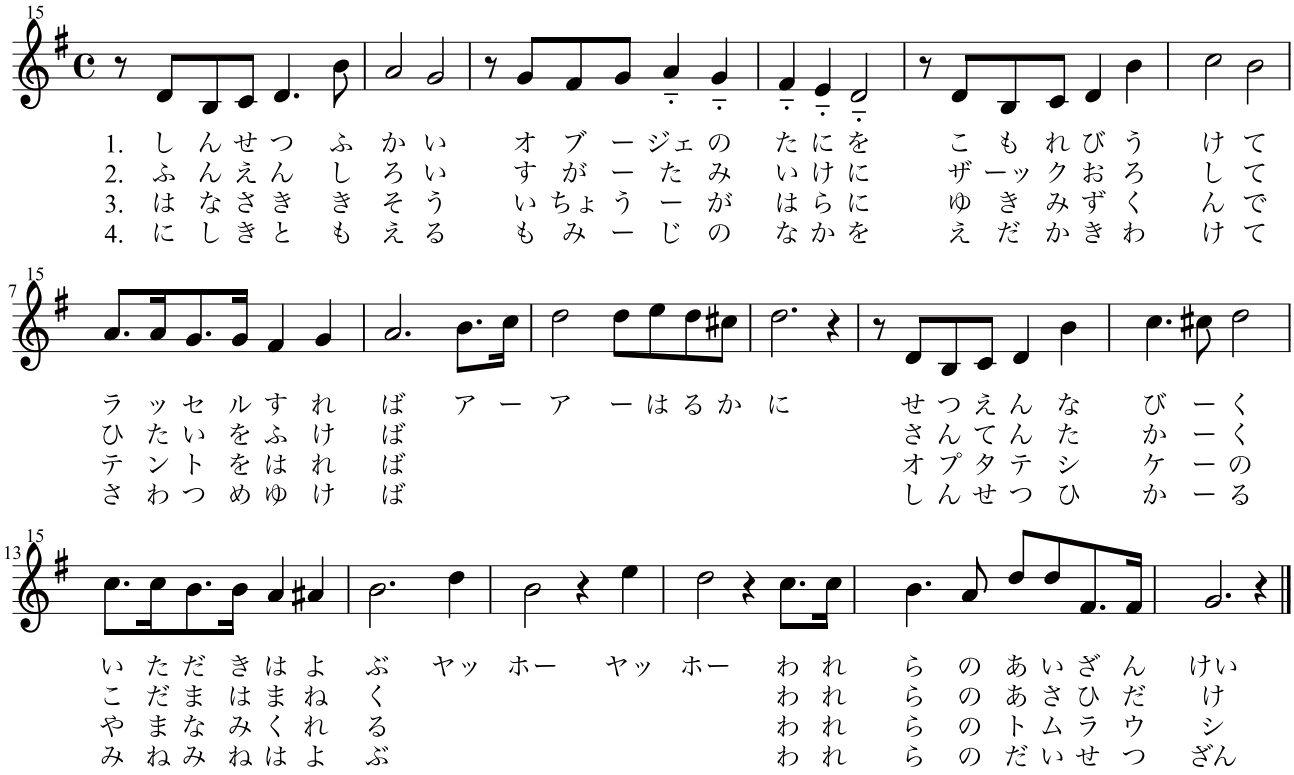
さて、新聞第 25 号発刊数日前の新年大宴会中、当時学芸部長だった私は「社歌を作曲せよ」との至上命令により、通称社屋と呼ばれていた新聞制作所（10 号室）に軟禁された。廊下を隔てた食堂からの放歌高声に「出来た！」…「歌ってみろ！」…。歌謡曲「新雪」のメロディで「新雪深―い…」と歌い始めると「駄目だ！戻れ！出来るまでは飲ませない！食わせない！」と再び社屋に監禁され、何とか書き上げた曲が承認され、宴会に戻ることが許されたのだった。

社歌として楽譜付きで紹介されたのは 1962 年 1 月 5 日第 25 号であった。何故か発想標語「明るく活き活きと」の後に続けた「鶺鴒（せきれい）が飛ぶように」はカットされた。なお「大雪山」は、その雄大さを思わせるためにも、必ず「だいせつざん」と歌うことが作詞者小野寺与吉のこだわりである。

昭和 36 年 8 月 1 日発行の「愛山渓新聞」№23。農民画家、坂本直行が『ガリ版で絵を描いたのは初めて』と言った「雲井が原から」が紙面の半分を占めた。「われらの大雪山」の歌はこの絵の下に掲載、お披露目された。

われらの大雪山（愛山渓新聞社歌）

作詞　小野寺　与吉
作曲　大須賀　羊一



1、
新雪深い　オブジェの谷を
木洩れ日受けて　ラッセルすれば
ああ　遙かに
雪煙なびく頂きは呼ぶ
ヤッホー　我等の愛山渓

2、
噴煙白い　姿見池に
ザック降ろして　額をふけば
ああ　遙かに
山巓高く　谺は招く
ヤッホー　我等の旭岳

3、
花咲き競う　銀杏が原に
雪水汲んで　テントを張れば
ああ　遙かに
オプタテシケの　山脈昏れる
ヤッホー　我等のトムラウシ

4、
錦と燃える　紅葉の中を
枝掻き分けて　沢つめゆけば
ああ　遙かに
新雪光る峰々は呼ぶ
ヤッホー　我等の大雪山

「愛山渓新聞社・大雪山　山の村通算40周年記念誌」から

大雪山スキー滑降、気圧計で命拾い

前田光彦

経歴

カムイスキーリンクス支配人。
1940 年、函館生まれ。函館西高で山岳部。三年先輩に歌手、北島三郎がいた。1967 年、全日本スキー連盟公認指導員、1968 年、公益社団法人日本職業スキー教師協会設立発起人、山岳スキーのガイドを始める。1979 年、富良野プリンスホテルスキースクール、1981 年から神居山一帯の調査を始め 1984 年 12 月、カムイスキーリンクスオープン、35 年目となる。

大雪山に初めて登ったのは函館西高一年生の夏休みでした。十勝岳から旭岳まで行くつもりでしたがオプタテシケの下で三日間、強い雨と風が続き、やむなく白銀温泉へ下山することになりました。それから約六十年が過ぎた昨年、私と妻を息子の岳哉がガイドしてくれて、大雪山の縦走を決行しました。六月末から七月初めにかけてオプタテシケ、コスマヌプリ、三川台を経由してトムラウシ、白雲岳を最後の泊りとして六泊七日、年齢的にも良い山行となりました。

若い頃の夏山登山は、大雪山の峰々のてっぺんからスキー滑降するための綿密な事前調査が目的のことが多く、残雪を滑りながら冬本番のコースを確認していったものです。

冬の大雪山はすごく厳しいのですが晴れた時の美しさは格別です。十勝岳はスキーに最適の斜面もあり、写真に撮るとまさに「絵になるところ」が多いのです。私は、多くの山々の山頂から滑りました。アイゼン、ピッケルで登ってくる登山者の横をカリカリと音をたてて滑って、その時泊まっていた十勝岳温泉の凌雲閣で「あんなところをスキーで滑っちゃだめだ！」と怒られてしまいました。それ以来、気をつけていることとして、登山者の登るところ、特に人のいるところは滑らないようにしております。

冬の大雪山でスキー滑降のとき、カメラマンと晴天を待つために、雪の降っているうちに山に入り、テントで何泊かしたことがあります。特に思い出してしみじみ良かったと思うことがあります。それは、ピウケナイ沢の最上流部にテントを張り、泊まっていた時のことです。持っていた気圧計が急に下がり出したので、これは危ないと思い、すぐにテントをたたんで樹林帯まで下り、雪洞を掘って、そこで強風をしのぎました。晴れてからテントを張っていた辺りに行ってみて、あまりの様変わりにびっくりしました。雪はすっかり吹き飛ばされて無くなり、岩がむき出しになっていました。この時の風は旭岳ロープウエーの屋根さえ吹き飛ばしてしまったのです。当時としては気圧計が頼りの時代で本当に助かったと思い、今でも自分の部屋に大切にしてあります。

旭岳山頂より

これからはもう十勝岳や大雪山へ登ってスキーをすることはないかもしれませんが、スキーの思い出を本当にたくさん作っていただいた十勝岳連峰、大雪山には感謝の気持ちでいっぱいです。

ヒマラヤと大雪山

梅沢　俊

経歴

1945年、札幌市生まれ。北海道大学農学部農業生物学科卒業。登山を続けながら大雪山のお花畑など北海道の野生植物の写真を撮影。著書は「花の散歩道　正・続」（北海タイムス社）、「花の山旅①　大雪山」（山と渓谷社）、「北海道のシダ入門図鑑」（北海道大学出版会）、「新版　北海道の高山植物」（北海道新聞社）など花や樹、登山ガイド関係が多く、「北海道夏山ガイド」（北海道新聞社）など共著も多数。最近はヒマラヤの山と花の撮影など海外での取材活動を続けている。

ずいぶん通ったと思う。大雪山とのお付き合いは大学生時代からだから、もう50年になろうか。年に2～3回登った年もあるので通算150回は超えていることだろう。私の登山の主目的は写真撮影であり、四季を通じて訪れているが、カメラを携行してもほとんど撮影しないで下山することもしばしばあるので、大雪山の魅力は被写体としてばかりではないような気がする。夏が近づくと毎年大雪山にやって来て滞在を決め込む道外の友人がいる。どうやら大雪山に接していないと落ち着かないようなのである。私も含めて“大雪中毒患者”といってよいかもしれない。

M.grandis subsp.olientalis
（青いケシ）

かように魅力的な大雪山ではあるけれど、ここ数年足が遠のいている。それは毎年夏の声が聞こえ始めると私はノコノコとヒマラヤに出かけてしまうからである。ヒマラヤ、そこは大雪山よりはるかにスケールが大きく、山体の成因も異なるこれも魅力的な地域である。旅の目的はもちろん写真撮影であるが、ヒマラヤといっても山岳写真ではなく花の写真である。夏は毎日のように雨が降り山はその姿を見せることはめったにないのであり、対称的に山腹は花々で彩られるのである。私はその中でほとんど人目に触れたことのない“幻”的な青いケシの仲間を探し出して写真に記録することを主眼に雨の中を歩き回っている。

セイタカダイオウ

ワタゲトウヒレン

青いケシも然ることながら出会う花々の多様なこと。大雪山では見られない姿で厳しい高山環境に対応すべく生存戦略をとっているのである。セイタカダイオウに見られる温室植物、ワタゲトウヒレンのようなセーター植物、ナデシコ科がつくるクッション植物などに接するとつくづく花たちは知恵ものだと思う。ヒマラヤは私にとっては玉手箱のような存在であるが、ただ難点がひとつ。そのお花畑のほとんどが家畜の放牧地となっていることである。つまり、ヒマラヤのお花畑は彼らが食べ残した種によって構成されているお花畑なのだ。

その点大雪山は、近年エゾシカの食害が問題視されているものの、基本的には生まれたままの姿である。これは世界に誇ってもいいことだと思う。

だから大雪再登山はひそかに“老後”の楽しみとして残してあるのである（笑）。

美しい雪の結晶が降る大雪山の麓

神田健三

経歴

1948年、福島県喜多方市生まれ。高校生の時、中谷宇吉郎や雪に関心を持つ。信州大学理学部物理学科の学生の時から北アルプス穂高岳の雪渓を研究。高校教師を経て、1994年から20年間「中谷宇吉郎雪の科学館」の開設準備、学芸員、館長を務め、現在同館友の会会長。『天から送られた手紙[写真集 雪の結晶]』を編集・執筆。『雪と氷の大研究』を監修。雪や氷の実験普及で小柴昌俊科学教育賞奨励賞を受賞。

冬の大雪山旭岳温泉へは7回出かけた。大雪山や十勝岳に降る雪はまことに美しい。思い出すのは、旭川からバスで旭岳温泉へ向かう途中、層雲峡での時間調整の時だった。薄暗がりの中に降り出した雪は、結晶が一つ一つ独立し、透明で美しい六角形が肉眼でよく見えた。美しい雪の世界に今から分け入るのだという期待感に、同行の皆は顔を見合わせてうなずきあった。

「馬橇(ばそり)にて深山(みやま)の林進む時透明な雪にしばし息のむ」（関戸弥太郎）

これは、中谷宇吉郎が雪の研究のため十勝岳の白銀荘へ向かう途中、同行した門下生の関戸が作った短歌だが、大雪山麓へ向かう私たちも、関戸と同じような感覚だったと思う。

戦前、宇吉郎は白銀荘を雪の研究の拠点にして約3,000枚の結晶写真を撮り、雪結晶の分類を行った。次に、北大の常時低温研究室で世界初の人工雪作りに成功した。80年前（1936）の3月12日のことである。

戦後は、宇吉郎は大雪山へよく出かけた。忠別川流域に一冬に降る雪の量を約2億トンと算出し、又、雪の核を電子顕微鏡で調べるため旭岳温泉で結晶を採集した。宇吉郎が監修した「雪の結晶」（岩波映画）のロケも旭岳温泉の仰岳荘で行われた。その撮影を担当した吉田六郎は、旭岳温泉で独自の方法によるブルーを背景にした美しい雪の写真を撮った。その後も、雪を撮影する人の多くが旭岳温泉を拠点にしている。

私が旭岳温泉へ7回行ったうち、最初の2回（1994, 95）は映画やテレビの撮影現場の視察で、次の2回（2001, 02）は教材用雪のレプリカ作りや顕微鏡撮影が目的だった。そして、その後の3回（2004, 05, 10）は加賀市から親子を募集・引率し、「子ども雪博士教室」の雪の観察・体験ツアーとして出かけた。冬休みに入ってすぐの3泊4日、白樺荘に泊り、降る雪の観察、雪洞の中での顕微鏡観察、やわらかい雪での雪遊び、雪中キャンドルなどを楽しんだ。東川町の親子が日帰りで合流・参加することもあった。

雪洞の中で顕微鏡観察をする少女

美しい雪の結晶が降る大雪山の麓で、その観察や体験の機会は今後も求められるに違いない。宇吉郎は、「不思議さと美しさとにおどろく心は、単に科学の芽生えばかりではなく、又人間性の芽生えでもある」（「自然の恵み」）と述べたが、美しい雪の結晶を体験する企画が、新しい形で生み出されることを期待したい。

血縁の山　小泉岳

小泉雅彦

経歴

1954 年、兵庫県神戸市生まれ。同市在住。公務員在職中からマイカー登山と写真撮影を趣味とし、50 代前半で日本百名山登頂を達成。百名山の内、北海道にある九山には、岳友と共に延べ 30 回余り登っている。2014 年の定年退職後は厳冬期の北海道を含めマイカーによる 5,000km を超える撮影旅行を楽しんでいる。

私の祖父、小泉秀雄（1885-1945）は「大雪山の父」と呼ばれている。寡黙な明治の男であった祖父は、山の命名など大雪山との深い関わりを家族に語らなかった。そのため、小泉岳を孫の私が知ったのは 2002 年、神戸から車を走らせ家族 4 人でその山頂に立ったのはその翌年だった。８月の初旬、銀泉台から残雪を越えて赤岳に達した。小泉岳に続く緩やかな稜線は終始深いガスと風の中だったが、大正時代にこの山域でパイオニアワークを成した祖父を偲ぶ忘れ難い山行となった。

私は 30 歳頃から登山に情熱を傾注してきた。ある日、母から祖父の名を冠した山があるらしいと聞き、登る人も稀な山だろうと思いつつ山名辞典を繰った。予想に反し、大雪山系の 2158m 峰と知った時は驚いた。この山に関する情報収集を経て、多年の取材に基づき祖父の人生を記した山岳史家、清水敏一さんに出会った。そして、祖父の生い立ちや植物学者として牧野富太郎に次ぐ膨大な標本を採集した業績を知った。さらに、祖父の教え子で、植物図集の出版に全面的に尽力された北海道女性薬剤師会会長（当時）の矢武三知さんとも知己を得た。

祖父の兄、源一は研究者の王道を邁進し、京都大学の植物学講座初代教授の名誉を得た。退職後は生家のある山形県米沢市に戻り、1953 年長泉寺に葬られた。今年の 10 月、墓参のため同寺を訪れたところ、応対いただいた住職夫人の仲介により、生家を守っている純子さんと思いがけず会うことが出来た。祖父が大雪山の一山に名を残した縁で、没後 70 年を経て、源一・秀雄兄弟の末裔が邂逅した訳だ。小泉岳はまさしく血縁の山だった。

祖父は 1945 年に病に倒れ、トラック 3 台分という膨大な植物標本が残った。標本はミサオ祖母と祖父の理解者の尽力により、戦後の混乱の中、散逸を免れ国立科学博物館に収容された。標本は同館の近田先生らにより長年をかけ学術資料に整理され、検索に不可欠なデータベース化も成されている。

このように祖父は大雪山に名を残す栄誉を得たのみならず、その標本は学術資料として保存・活用され、情熱的な人生を伝える伝記と、優れた観察眼と描写力を示す植物図集も出版された。多くの方々のご尽力により祖父の人生と業績が評価され結実していることに深く感謝を捧げたい。

北の山にあこがれて

嶋田　健

経歴

1950年、埼玉県生まれ。75年、北海道新聞社入社、2011年の退職まで主に記者職に従事。11年、テレビ北海道に移り、報道制作を担当、15年退職。海外登山の経験はないが、中国チベット自治区、新疆ウイグル自治区のほかブータン、ネパール、インド、パキスタンなどの山岳地帯でふもと歩きを楽しんできた。写真撮影も趣味。13年1月に東川町文化ギャラリーで開催されたグループ写真展『写真交響楽』に参加した。札幌市在住。

石狩岳の山頂で。右端が筆者。横長のザックやニッカーボッカー姿が懐かしい＝1978年8月

都会の喧騒から離れたい、南の沖縄か北の北海道で暮らしたい。41年前、迷った末に私は「北」を選びました。その選択の大きなきっかけは山だったと思っています。

都立高校では山岳部に所属していました。北アルプスや南アルプスの天幕のなかでは、しばしば北大の山岳部歌『山の四季』を歌っていました。顧問の先生が北大出身だったのです。ニセイカウシュッペ、トムラウシ、ペテガリ。なんと魅惑的な山名でしょう。山好き少年の心ははるか北の空に飛んでいました。

高校山岳部ではよく山関係の本を読み、大いに刺激を受けました。なかでも、大島亮吉の『石狩岳より石狩川に沿うて』を読んだときの感動、とくに山中でアイヌ民族と出会う場面の清明な描写は忘れられません。私のなかで北の山の存在が確実に大きく育っていました。

北海道の新聞社に職を得た私は休日を使って山を歩きました。初任地が旭川だったことは幸運でした。東川町とのお付き合いの始まりです。職場の仲間との山行では沢登りとスキーの多用に驚きました。ときには東京から山仲間が遠征に来ました。強く印象に残るのは石狩岳からトムラウシへの縦走です。強烈な藪漕ぎと大きなお花畑、そしてトムラウシの雄大な山容に圧倒されました。入山口の十勝三股駅で友人たちが乗り越し料金を払おうとしたところ、「釣銭がない」と駅員さんにいわれて一同絶句しました。友人たちは証明書を書いてもらい、新得駅で釣銭を受け取りました。いまはなき秘境駅の懐かしい思い出です。

新聞記者として山関係の記事を書く機会にも恵まれました。古くは速水潔さん、吉田友吉さん、その後は高澤光雄さん、清水敏一さんはじめ多くの皆さんから貴重なお話をうかがいました。この大雪山文献書誌集に名を連ねる尊敬する大先輩たちです。清水さんの助言をいただきながら小泉秀雄の事績を取材した折には、もちろん小泉岳に登りました。小柄な小泉が求道者のように大雪を踏破したであろう姿に思いをはせながらの山行は趣深いものとなりました。

最近の新聞を読みながら、東川町が写真の町として一段と存在感を高めつつ、移住者をひきつける地域振興に積極的に取り組んでいることに目を見張っています。そしていま、東川にとってすべての基盤となる大雪山を主役に文献書誌集作りという独創的な事業を推進していることにも心より敬意を表するしだいです。

「東川町民」を自称する初代レンジャー

二橋愛次郎

経歴
昭和 19 年、長野県飯田市生まれ。昭和 42 年、厚生省国立公園局入省（箱根、利尻礼文、大雪山、中部山岳、瀬戸内海、足摺宇和海、支笏洞爺、釧路湿原、阿寒、知床の国立公園管理等に従事）。平成 7 年、東北海道地区自然保護事務所長退官。平成 21 年、北電総合設計株式会社退職。札幌市在住。自然公園指導員。

一昨年（2014 年）は大雪山が国立公園に指定されて 80 周年の年でした。

私が大雪山国立公園の管理員＝レンジャー（現・自然保護官）として東川町に駐在していたのは、昭和 47 年から 52 年のちょうど国立公園指定 40 年前後のことでした。

大雪山国立公園には昭和 28 年から層雲峡に 1 名の管理員が配置されていただけであったため、当時の町長（故・中川音治氏）は東川町管内の勇駒別集団施設地区への管理員駐在を永らく働きかけていました。

中川音治氏は、昭和42年から平成３年まで６期24年の永きにわたり東川町長を務め、その間「北海道自然公園協会長」として、北海道の自然公園の施設整備や管理体制の充実について多大な尽力をされた方でした。

ウスバキチョウ（食草：コマクサ）

昭和 47 年 8 月、町長室で両手を広げ満面の笑顔で迎えてくれた中川町長の姿が今でも鮮明に想い出されます。国立公園管理員が赴任した喜びを「国道も国鉄も無い町に初めて国の機関が出来た」と表現したことを記憶しています。

当時のレンジャーは、事務所も官舎も何も無く、辞令 1 枚で任地に赴く状況でした。事務所は旧公民館の一室にあった教育委員会事務局の一隅をお借りし、手作りの事務所看板の掲出が仕事始めでした。

住宅は町営住宅に入れて頂きましたが、古い棟割り長屋で、台所の流しに「手こぎポンプ」が付いていて愕然としたことや、もちろん風呂は無く銭湯通いで、氷点下 20℃を超える真冬には、洗髪がアッと言う間にバリバリに凍ってしまったことなど、今でも懐かしく想い出します。

クモイリンドウ

4 年 8 ケ月の東川生活で、沢山の人々に随分とお世話になりました。東川の人々は人情豊かなおおらかな気風で、山好き、鳥好き、酒好きの仲間たちが集い、楽しく付き合って頂きました。

あれから 40 余年が過ぎましたが、今でも東川を訪れると旭岳の秀麗な山容と古い友人・知人が温かい笑顔で迎えてくれます。

自称「東川町民」として度々機会を得て、楽しい一刻を過ごしにかの地を訪れたいものと願っています。

永年にわたる大雪山への思い

渡 辺 康 之

経歴
1951 年、岡山県吉備郡大和村に生まれる。兵庫県尼崎市で育ち、1970 年に北海道大学へ入学。同工学部大学院修士課程を修了。学生時代より大雪山へ登り、ウスバキチョウなどの生態を調査した。1984 ～ 86 年、二度にわたり白雲岳避難小屋で越冬し、初代の白雲小屋管理人。著書に「大雪山越冬記」、「ウスバキチョウ」等がある。日本鱗翅学会理事。

大雪山に登り始めてから半世紀近くが経過した。ここ 10 年は毎年延べ 50 日間ほど山上でウスバキチョウなどの高山蝶の生態を調べ、保田信紀氏（大雪山自然史研究所）と高山帯の昆虫相の調査を行っている。学生時代には山岳写真家の田淵行男氏が大雪山で撮影されており、後に「大雪の蝶」を上梓された。これに触発されて、専門分野の有機化学ではなく蝶の生態調査や撮影がいつの間にか本職となった。その頃は高山植物の監視が厳しく、狐塚定央さんや亀谷芳生さん、柴田清美さんら大雪営林署の監視員が健在で、登山道を踏み外して怒られる一方、山小屋で昔話を聞かせて戴いた。後年、道の自然保護監視員を嘱託されて監視する側になり双方の立場が分かるようになったが、注意された人は今でもよく覚えているそうである。

山上の越冬は冗談話がきっかけで、高橋伸幸氏（北海学園大学）と白雲小屋で酒を飲んでいて、ここで冬を越して気象観測をすれば面白そうだという事で盛り上がった。曾根敏雄氏（北大低温科学研究所）も加わり、大学院生らの協力で秋に半年分の食料や燃料の荷上げをした。そして 1984 年末に入山し、翌年３月まで小屋で越冬して気温や風速などの気象観測を行った。今では機器が発達して人間が直接観測する必要はないものの、非常に貴重な体験であった。２月にはＮＨＫ取材班が同行し、ローカル放送で冬の風景や調査の様子が放映された。この時の矢内万喜男カメラマンは山男でもあり湾岸戦争の取材などで活躍されていたが、1991 年６月に雲仙普賢岳の噴火による火砕流事故で殉職され、たいへん痛ましく今でも残念に思う。

小泉岳から緑岳への稜線を蛾の調査に向かう。前を行く渡辺は灯火採集用の発電機を背負っている（2009 年７月 20 日）

高山蝶の生態については、最近になってダイセツタカネヒカゲが卵から成虫になるまでまる３年かかる場合があるなど新しい知見が発表されている。新種や未記録種の昆虫類も発見されており、未知の領域が少なくない。これからも可能な限り、地道に大雪山で調査を続けて行きたい。

大雪山に関わる歴史・人文の足跡を追い求める

武田　泉

経歴
北海道教育大学札幌校准教授。
1962 年、東京都生まれ。1989 年に来道し、1995 年に北海道教育大学岩見沢校に赴任し、その後北海道教育大学札幌校に異動、現在に至る。人文地理学、国立公園問題等の環境政策論、交通政策論を専門とする。
なお、北教大大雪山自然教育研究施設の連絡先他は P47 を参照。

まずは大雪山との出会いについて。鉄道等道内交通の研究を目指して来道したものの、当時の北大の指導教員から示されたのは、予想外の大雪山等の国立公園での歩行交通と人為的登山道の侵食との関係の話。それまで国立公園とは、東京出身なので単なる自然中心の有力観光地としか考えが及んでいなかったため、大いに面喰ったものである。

暫定的に存置された十勝三股林鉄修理庫

その後、黒岳ロープウェーや８合目で、靴の種類と装備のカウント調査、また各登山口によって入林届の方法の相違や、土地所有での国有林（御料林等）と道有林との色分け（特に真っ二つに分かれた旭岳温泉界隈）、林野庁と環境庁（当時）との対抗関係や攻めぎ合いで作られる公園計画（特に地種区分や道路付近だけこんもりとした作為的な地域指定、等）に興味を抱いた。また大雪山の各登山口の歴史、例えば、愛山渓の背後では戦前の幻となった冬季五輪計画での滑降会場を想定し、安足間から鉄道の支線敷設の構想も出たという話、層雲峡は洞爺丸台風被害後の風倒木処理と造材飯場相手の商店が旅館・ホテルに鞍替えした話や、湧駒別から銀泉台への横断道路建設の頓挫、旭岳温泉（湧駒別）からのロープウェーは、戦時中の硫黄採掘の索道跡を利用したもの、そして旭岳温泉と天人峡までのバスがかつて地元温泉協会負担のため無料で乗車可の全国的に稀な路線バスであったこと、十勝三股の環境省計画に森林鉄道修理庫を何とか含められないか、そしてこのため環境省が糠平で開かれた検討ワークショップの席上で発言し、地元の自然保護だけの意見に加えて両論併記へと書き加えさせた等、様々な人文面での諸点の把握へと、興味関心が向かった。こうした各種の取材のため、本書誌集掲載の諸氏を訪問したこともあり、「大雪山に関わる４人の軌跡」（旭川市史研究）として投稿したり、近年は北教大の施設研究報告（紀要）に大雪山に関わる人文分野の書籍の書評を、網羅的に掲載を画策しているわけである。

では、当人の山行能力は？というと、以前腰のヘルニアの手術をしてから、重いザックを背負えなくなり、またテント泊も良く寝付けず、日帰り圏でかつ車が無いので、交通機関でアクセス可能（又は前泊）の範囲に限られる。そして天候との兼ね合いもあり、最近はなかなか山行の機会には恵まれず、残念至極である。想い出では、今は無き愛山渓からのバスで、ある時乗り遅れて下山者の車に乗せてもらうことに難儀したことや、銀泉台と高原温泉は紅葉期シャトルバス他が走るが、砂煙を上げる車内で車掌からきっぷを買ったこと、さらにはあのトムラウシ山低体温症集団遭難事故のパーティーが旭岳から入山した翌日、旭岳頂上を目指した際に、８合目より上部でやけに寒かったこと、等がある。

姿見駅で登山者レクチャー風景

最後に、北教大大雪山自然教育研究施設について一言。同施設は国立大学では稀な温泉付の研修施設である。ログハウスの入口には「六陵山荘」の看板が掛けられている（旭川校同窓会の名称）。但し管理人によれば、最近は学内利用ではゼミ合宿をして温泉入浴で帰ることが多く、以前のような登山やスキー利用はそれほど多くはないとのことで、残念なことである。

大雪山文献目録について

1、定義

ここに記載する大雪山文献目録（以下、文献目録という）は、大雪山域の文献を収録することを目的とし、以下の基準に従って収集したものである。

2、収録山域範囲

ここに記載する文献目録の山域範囲は、原則として十勝連峰、東大雪連峰を含む大雪山国立公園地域とするが、周辺地域を含むこともある。

3、収録年代

文献目録は近代以降、すなわち明治維新以降、現代に至るものとする。

4、文献目録の分類

収集した文献目録は次のように分類する。

1、総記

辞事典、図鑑類、書誌、地方史誌、講座、講演集など全般にわたるもので、２以下の分類に属さないものとする。総記は更に次のように分類する。

１－１、文献の総てが大雪山に関するもの。

１－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

2、研究書

学者、研究者、専門家の自然科学に関する学術論文、研究報告、関係機関の調査報告書類とする。研究書は更に次のように分類する。

２－１、文献の総てが大雪山に関するもの。

２－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

3、実録

事実をありのままに記したもので、登山記録、遭難記録、遭難報告書類、ドキュメンタリー、ノンフィクション類を含む。実録は更に次のように分類する。

３－１、文献の総てが大雪山に関するもの。

３－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

4、人物誌

人物伝、人物史、人物研究、追悼録など、人物を主題としたものとする。人物誌は更に次のように分類する。

４－１、文献の総てが大雪山に関するもの。

４－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

5、案内書

登山案内、自然案内、観光案内、花案内、案内小冊子など、初心者から熟達者までそれぞれを対象とした各種の案内ガイドブックを含む。案内書は更に次のように分類する。

５－１、文献の総てが大雪山に関するもの。

５－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

6、図録類

写真集、画集、図集、画文集（図画が半数以上）、各種図録。イラスト、スケッチ、マンガ類を含む。図録類は更に次のように分類する。

６－１、文献の総てが大雪山に関するもの。

６－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

7、文学書

小説、紀行文、エッセイ、詩集、歌集、句集、詞華集、アンソロジーなど、文学に関わるものとする。文学書は更に次のように分類する。

７－１、文献の総てが大雪山に関するもの。

７－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

8、紙誌、部会報

新聞、雑誌、部報、会報、機関誌などの定期刊行物、もしくはそれに準じて刊行されているものとする。私的刊行物、不定期刊行物を含む。通常、紙誌、部会報における大雪山文献は、その一部なので次のように分類する。特集記事、連載、シリーズ物も同様である。

８－１、新聞紙面に大雪山関連の記事が掲載されているもの。

８－２、雑誌上に大雪山関連の記事が掲載されているもの。

８－３、部報、会報、機関誌などに大雪山関連の記事が掲載されているもの。

9、その他の文献

上記１～８に分類し難いものはその他の文献とし、次のように分類する。

９－１、大雪山に関する小冊子パンフレット類、絵はがき類（セット物、袋入り）、チラシ類、または複写物で、表題を付けて綴じてあるもの、もしくは袋に入れて表題を付け整理されているものとする。１葉の絵はがきは原則として含まない。

９－２、直接に大雪山文献とはいえないが、間接的に関連づけられるもの。

９－３、大雪山に関する音楽、映像など、ＣＤ、ＤＶＤ類、もしくはそれに準ずるもの。

上記分類は、岩見沢市緑が丘 5-166「大雪山房」清水敏一さんにお願いしました。

総記
辞事典、図鑑類、書誌、地方史誌、講座、講演集など

1－1 総記（全てが大雪山）

001　大雪山のキノコ　新版
佐藤清吉 ／ 総北海
2015 ／ 474 －サ
著者は定年退職してから大雪山のキノコを調査するために、上川町の自宅から主に銀泉台―赤岳に通い続けた。キノコの専門知識はなく、札幌の研究家らを訪ねながら独学。デジカメに撮りため、パソコンに入力した際の操作ミスで相当量のデータを破損したのが悔しくてならない。標高 1,835m で見つけたマツタケモドキが標高では一番高く、標高 1,700m 以上で約 50 種類を採取した。キノコを研究して約 30 年、80 歳で出版にこぎつけた労作。

002　ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第１～第３話編
上川支庁・上川中部広域市町村圏振興協議会 ／ 制作　FM りべーる
2002 ／ 291 －ド
2002 年 2 月 3 日から 17 日までの毎週日曜日午前 11 時 30 分から正午まで、FM 特別番組として放送した内容を、タブロイド判 8 ページの小冊子にまとめたものである。表紙、裏表紙、文中にもカラフルな大雪山の写真がある。第 1 話・大坪三好、第 2 話・清水敏一、第 3 話・荒井一洋と斎藤しのぶ。

003　ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第４～第６話編
上川支庁・上川中部広域市町村圏振興協議会 ／ 制作　FM りべーる
2002 ／ 291 －ド
同じくなので省略。第 4 話・保田信紀、第 5 話・太田眞、第 6 話・小桧山俊介。

1－2 総記（部分が大雪山）

004　石狩日誌
著　松浦武四郎、訳　丸山道子 ／ 凍土社
1973 ／ 291 －マ
武四郎日誌の逐語訳ではなく、原文の持ち味を失わないように改訳しているのでわかりやすい。原著の図版も挿入する。そのひとつに石狩岳頂上眺望の図があり、ユウハリ、トカチ、クマネシリなどの山々が遠望される。解説とあとがきによって訳者の意図を知ることができる。推定する石狩岳（大雪山系）踏査図もある。

005　NHK ふるさとデータブック
北海道 NHK 情報ネットワーク ／ 日本放送出版協
1992 ／ 291 －エ
全国で全 10 巻のうちの北海道編。合併前の 212 市町村ごとに、各種データを項目別に 1 市町村約 2 ページ前後にまとめてある。人口、世帯数、面積のほか、写真とともに観光資源、名産・お土産、歴史上の人物、イベント、四季の風物、主要文化財、歌碑や記念碑、歌謡曲、文学作品、郷土歴史家、映像記録者、天然記念物、よくわかる参考図書など多岐にわたる。紙面スペースや項目に差異があるのは、提供する市町村側のデータ量の多少と、編集者の採否によるのだろうか。一時期の興味あるデータを与えてくれる一冊。

006　岳人事典
岳人編集部 ／ 東京新聞出版局
1983 ／ 786 －ガ
山に関する地形、気象、雪崩、医学、文学、絵画、音楽、民俗、スキーなど、あらゆる分野にわたって、それぞれ専門家が概説する。人名、用語は辞書式。そのほか山名表、登山史年表もあるが、総じて大雪山系の記事は少ない。

007　角川日本地名大辞典　北海道・上巻地名編
「角川日本地名大辞典」編纂委員会 ／ 角川書店
1987 ／ 291 －カ
別巻を含む全 51 巻のうちの 1 巻北海道地名編である。単なる行政地名だけではなく、山岳、河川、台地、平野、温泉、史跡名勝天然記念物などのほか、過去に失った地名も立項する地名百科である。例えば大雪湖、大雪国道、大雪山、大雪山国立公園、旭岳、黒岳、羽衣の滝などもそれぞれ立項、その数合わせて約 1 万 5 千 5 百項目。

008　角川日本地名大辞典　北海道・下巻総説・地誌編・資料編
「角川日本地名大辞典」編纂委員会 ／ 角川書店
1987 ／ 291 －カ
平成の大合併前の全道 212 市町村別に、現況、立地、沿革、現行行政地名を記述する。沿革では古代から現代へ、将来への目標に至るまでの歴史的経緯を記述する。巻末には支庁、藩県、市町村沿革表、団体移住一覧などもあり、資料としての活用度は高い。

009　金沢山岳文庫　北海道山岳文献目録
編　斎藤浪子 ／ 斎藤浪子
2006 ／ 291 －カ
「斎藤俊夫追悼」の副題がある。斎藤は当別町金沢で山岳文庫を主宰していたが、2004

年 68 歳で病没。本書は追悼の意味を込めて、収集した山岳文献目録と遺文・遺稿、寄稿によって構成される。夫人・浪子、サッポロ堂・石原誠の編集、故人は絵や版画をよくしたことがわかる。別に布装、箱入りの限定本が 35 部ある。

010　かみかわ　小学校社会科副読本

編　上川町社会科郷土読本編集委員会 ／ 上川町教育委員会
1980（奥付欠）／ 375 ー カ
表紙は牧場と大雪山、冒頭のグラビア写真には大雪山や石狩川、層雲峡がある。文中には大雪山や層雲峡の説明や折り込み鳥瞰図がある。

011　かみかわ＝生物編＝

上川町立上川中学校　理科グループ ／ 上川町教育委員会
1981 ／ 375 ー カ
「中学理科」とある。同町の昆虫学者・保田信紀が囲み読み物になっている。身近な生物が中心だがヒグマや大雪山のナキウサギや高山蝶もある。

012　かみかわ＝地学編＝

上川町立上川中学校　理科グループ ／ 上川町教育委員会
1979 ／ 375 ー カ
「中学校理科授業書」とあり、大雪山麓の町であるだけに、大雪山に関連する図や写真を用いた記述は多い。大雪山の航空写真は同町の写真家・志賀芳彦撮影。

013　かみかわ＝野外観察編＝

上川町立上川中学校　理科グループ ／ 上川町教育委員会
1980 ／ 375 ー カ
「中学校理科資料集」とあり、表紙の写真エゾシカは志賀芳彦撮影。「ヒグマの生態観察」では、ヒグマに対する注意、危険なヒグマなどを記述。「山の学校」では、大雪山について、生いたちから、地質、地形、植物帯までを図示しながら記述してある。

014　上川町内のアイヌ語地名解、上川町の川の名・沢の名

成田新太郎 ／ 上川町自然科学研究会
1990 ／ 291 ー ナ
会報『上川町の自然』に発表したものに、その後の調査考察を加えて 1 冊にまとめた。大雪山に関する山や川の地名について各説を紹介して解説する。折り込み地図を付してあるのも親切である。川の名、沢の名については、アイヌ名のほか、支沢、枝沢の名は和名が多い。32 図もある地図から、その位置と名称を知ることができる。

015　上川町の自然　生物目録集

編　保田信紀 ／ 上川町自然科学研究会
1985 ／ 460 ー カ
町域の半ばは大雪山国立公園であり、この目録も大雪山に大きく関わる。植物目録では高等植物を旭雅人、シダ植物を佐々木太一、蘚苔類を伊藤律子、キノコ類を成田新太郎、動物目録では哺乳類を成田新太郎、鳥類を磯清志、爬虫類・両生類を保田信紀、魚類を中条良作、蝶類を野田佳之、大雪山・石狩川源流地域の真正蜘蛛類、甲虫類を保田信紀が担当した。

016　上川の概況

上川支庁 ／ 上川支庁
1957 ／ 318 ー カ
上川支庁管内（当時 29 市町村）の概況を記述したものである。内容は概説、戸口、産業、運輸、文化、観光など、多岐にわたって統計資料を図示しながら説明する。写真も多く、当時の作業や暮らしぶりを活写する。管内の映画館 30 館、テレビはわずか 76 台しかないところだった。表紙は残雪の大雪山を背景に、田んぼの手作業での草取り中の写真。観光の項には大雪山、十勝岳、層雲峡、天人峡、愛山渓、勇駒別、白金温泉などの写真も豊富に記載する。

017　熊に関する百訓

阿部泰三 ／ 山音文学会
1973 ／ 489 ー ア
著者は元・自衛隊員で札幌北部方面総監部化学課長を経て退職。自衛隊が演習訓練中にしばしば熊が出没した。標津方面の被害がはなはだしく根室支庁から自衛隊派遣の要請があったことから、熊の被害防止のために上官から熊対策を命じられた。文献を調べ、学者、有識者の教示、実体験者からの聞き取り調査、実地検証、動物園やクマ牧場に足を運び、熊の生態研究とその対策をまとめたのが本書である。1962 年、標津の出没情報が突出して多いのは、同年の十勝岳噴火による降灰の影響といわれるが明らかではない。本書は北部方面総監部が発行、訓練資料として全道の各部隊に配布され、版を重ねた。そのことが新聞に報道され、道民の要望にこたえて山音文学会が発行し、これもまた版を重ねた。自衛隊の初版は 1963 年である。

018　札幌・大正の青春

編　札幌市教育委員会社会教育課 ／ 札幌市教育委員会
1978 ／ 051 ー サ
―雑誌「さとぽろ」をめぐって―という副題がある。「さとぽろ」とは 1925 年（大正 14 年）に創刊した詩と版画の同人雑誌のこと。本書は角背布装の上質な本であるが非売品。大雪山とは直接に関連はないが、創立同人は教授、北大生、予科生ら 8 人で、そのうちの伊藤秀五郎（詩）は北大山

岳部を創立、北海道の山に大きな足跡を残す。相川正義（詩）は北大で山とスキーに活躍、のち旭川市の相川精神病院院長・理事長を務めた。伊藤義輝（版画）は北大山岳部部報の表紙を描いた。

019　山岳講座　第８巻
編　南條初五郎／共立社
1936／786 ーサ
巻頭グラビア写真が十勝岳。巻末に千島・北海道の山案内（佐々保雄）があり、中央高地の山々について夏期、冬期とも詳しく案内され、当時の登山状況を知ることができる。山岳講座は全８巻。

020　山岳事典
編　川崎隆章／山と渓谷社
1960／786 ーサ
『山岳講座』全６巻の別巻として編集された。山岳高度表、登山年表、山岳図書一覧、登山用語辞典などを記載する。大雪山に関する山岳図書には、小泉秀雄、大島亮吉、伊藤秀五郎らの著書をあげている。「山岳団体一覧」「山小屋一覧」は、地域別に記載しているので、当時の北海道の状況がわかり、きわめて興味深く資料としても役立つ。

021　自然保護事典［山と森林］
編　全国自然保護連合／緑風出版
1996／519 ーシ
危機に瀕する自然を読む事典である。「山と人とのかかわり」「山岳観光道路の自然破壊」「森林の荒廃」など識者、自然保護活動家が論述している。大雪山では大雪山縦貫道路を取り上げている。今なら考えられないような大雪山の尾根を縦貫する自動車道開発計画であったが、反対運動によって中止に終わった。「北海道の森林」の項でも触れている。

022　十勝日誌
著　松浦武四郎、訳　丸山道子／凍土社
1975／291 ーマ
冒頭の両見開き大雪・十勝山系眺望の図は壮観、石狩ノタツカウシヘ岳、チクヘツ岳、ヒエ岳などの山が描かれている。訳者の解説、十勝越えの推定地図もある。それによると美瑛から富良野岳南方（原始ヶ原のあたり）の峠を越えて、十勝へ下ったようである。

023　登山講座　第５巻
編　川崎隆章／山と渓谷社
1960／786 ート
全６巻のうちの第５巻が積雪期登山の講座で、巻末に北海道の山の案内（北大山岳部）がある。表大雪、裏大雪、十勝岳はいずれも積雪期中心の案内で、松山温泉口という表記が残る。

024　北海道から　第３号
山根対助／北海学園
1987／051 ーホ
「特集：北海道をより深く知るための本 539 冊」という副題がある。基本文献とする 539 冊について、各分野の専門家が１冊ずつ解説するほか、市町村関係資料目録、タウン誌、日刊新聞などの記述がある。北海道を知ることはすなわち大雪山を知ることにつながっていることを知る本である。

025　北海道山村経済の実態　上川郡上川町の調査報告
編　北海道総合開発委員会事務局／北海道総合開発委員会事務局
1953／318 ーホ
巻頭グラビアに大雪山、層雲峡の写真がある。上川町の概要、経済構造（農業、林業、商工業など）の実態調査報告書で、調査には東京教育大学農学部の協力を得ている。謄写印刷 168 ページ、粗末な作りの１冊であることが時代を物語る。

026　北海道　自然と人
編著　八木健三、辻井達一／築地書館
1985／450 ーホ
学者、作家、新聞記者らが執筆した自然と人との交流、これからの自然保護を考える本である。「開拓と自然保護」は俵浩三が執筆、阿寒と大雪山についての論考がある。

027　北海道史の歴史
高倉新一郎／北海道郷土資料研究会
1959／211 ータ
著者・高倉は北海道史研究の泰斗。北海道の歴史に関する江戸期以来の主要文献と、その著者たちを解説する。河野常吉にも紙面を割いており、編著『北海道史跡名勝天然記念物調査報告』『大雪山石狩川上流探険開発史』もある。タイプ印刷の軽装本。

028　北海道と環境保護
編　札幌学院大学人文学部／札幌学院大学人文学部
2003／519 ーホ
札幌学院大学人文学部が 1998 年度に「北海道の環境保護」を共通テーマとした公開講座を開いた。10 人の講師による講義記録である。俵浩三「北海道の開発と自然保護―過去。現在・そして未来―」では、事例のひとつとして層雲峡における太田龍太郎の国立公園指定陳情に触れ、また士幌高原道路（然別湖）の経緯について語っている。

029　北海道の地名
北海道地方資料センター／平凡社
2003／291 ーニ
郷土歴史大事典・日本歴史地名大系 50 巻のうちの北海道編である。名の通り歴史的

見地から記述している。総論、北海道（国別）、各支庁（各市町村別）など、独自の配列で解説する。国別とは石狩国、十勝国など 11 国。小項は巻末の索引から引き出すことができる。大雪山関連の記述も多い。

030　北海道の伝説

編著　更科源蔵、渡辺茂 ／ 楡書房
1955 ― 1956 ／ 388 ―ホ
序を高倉新一郎、知里真志保が書いている。全 286 話を地域別に分け、「大雪山附近」の項で 22 話を記載している。本書はすべて出典を明記しているのが特徴で、例を挙げると「忠別川上流の地獄穴」（永田方正著「蝦夷雑話」）、「大雪山の伝説」（近江正一著「伝説の旭川及びその附近」）、「十勝岳と雌阿寒」（十勝高島、山越三次郎老伝）など。「太平洋岸」の項にも「十勝川上流の神座」（工藤梅次郎著「アイヌの民話」）など十勝側からみた大雪山系の伝説が数話ある。

031　山ことば辞典

著　岩科小一郎、編　藤本一美 ／ 百水社
1993 ／ 382 ―イ
―岩科山岳語彙集成―という副題がある。岩科は山村に古くから伝わる山ことばを収集、発表してきた。それに藤本の調査を加えて編集したのが本書である。猟師、杣夫、木地師など山里の方言も含んでいる。基本的には本州の言語であるが、全国的に登山用語として定着している言葉もある。ガラバ、ガレ、ツメ（沢の）、ナメ（滑）など。例…ヤチ＝谷を当てる。アイヌ語ヤチ（湿地）が語源である。ヤツ（谷、谷津）も同義語。

032　山の本販売目録

編　茗溪堂 ／ 茗溪堂
1975 ／ 025 ―ヤ
茗溪堂は山の本の販売店として知られており、自社でも山の本をよく出版した。「この図書目録は、茗溪堂で入手可能な、山と探検をテーマとする本を選んで作成したものです」とあり、分野別に分類された山の図書目録で、もちろん北海道の本もある。書名索引、編著者索引のほか、注文の仕方、小包料金早見表まで付されている。

033　山・やま事典

編　第二アートセンター、監修　近藤信行 ／ 大修館書店
1988 ／ 821 ―ヤ
漢字百話シリーズ「山の部」で、山の付く漢字がずらりと並んでいて壮観だが、読める字は少ない。「山なんでも事典」「故事・ことわざと山」「山嘘文字考」などの項があり、文字と言葉と写真でつづる山の百話とうたっている。「日本の名山」14 座のなかにトムラウシ山がある。

034　山を読む事典

編　徳久球雄 ／ 東京堂出版
1981 ／ 786 ―ヤ
編者は従来の事典の形を破り、読むことを前提としたという。自然、生活、文化など 6 部構成で、それぞれ専門家が論述する。北海道の山の節に大雪山の記述があるのは当然だが、それ以外の項にも断片的に大雪山関係の記述がある。例として索引から、ヒグマ、ナキウサギ、シマリス、ダイセツタカネヒカゲ、ダイセツヒトリ、永久凍土、構造土などを引いて解説を読むことができる。

研究書

学者、研究者、専門家の自然科学に関する学術論文、研究報告、関係機関の調査報告

2 ― 1 研究書（全てが大雪山）

035　高山植物園新設設計書

宮部金吾 ／ 宮部金吾
不詳 ／ 525 ―ミ
年月日の明記はないが便箋 7 枚に記述された、宮部金吾直筆の大雪山に高山植物園を新設する計画書である。地域は山頂高山帯（白雲岳、小泉岳、赤岳、烏帽子岳の一帯）と山麓層雲峡である。（詳細は 63 ～ 72 ページ）

036　高山帯における登山道やその踏みつけによる被害への対応

小林昭祐 ／ 日本造園学会誌『ランドスケープ研究』61 ― 5 抜刷
199 ／ 629 ―コ
大雪山中心部の登山道と、赤岳第三雪渓に限定した地点で観測した調査を、図表とともに論述している。赤岳第三雪渓では雪渓の後退とともに変化する動線を図示、本来の登山道からはずれて踏み跡が複雑に交錯する状況がわかって興味深い。立地環境の特性、かつ利用者の歩きやすさを考慮した対応が必要という。

037　山岳性自然公園における利用者の意識構造に関する研究

小林昭祐 ／ 専修大学環境情報科学研究所（美唄市）
1997 ／ 629 ―コ
調査範囲は表大雪から東大雪、トムラウシ、十勝までほぼ国立公園全域にわたっていて、調査方法は利用者（登山者）へのアンケートを基本としている。図表を多用しながら利用者の実態を考察、今後の保護と対応について論述する。85 ページの論文。

038　自然公園における野外レクリエーションに伴う過剰利用に処するための方策

小林昭祐 ／ 専修大学北海道短期大学紀要・第 29 号別刷
1996 ／ 629 －コ
過剰利用、管理、自然公園、利用体験、機会、資源をキーワードに論じている。文末の参考文献に「自然公園等における自然とのふれあいの確保の方策について」（阿部宗広）などの研究論文を数多く記している。

039　斜面上に分散した登山道が形成される要因

小林昭祐 ／ 環境情報科学センター
1995 ／ 519 －コ
第 8 回環境情報科学論文集の別刷り。登山者の踏みつけによる裸地化を調査した研究論文。調査地は大雪山白雲岳分岐から白雲岳避難小屋にいたる登山道で、登山者の選択ルートを実測したデータである。本来の登山道（逆 S 字状）からはずれた新たな踏み分けは、最短ルートに沿って分布することがわかり、裸地化が拡大、現在も進行中という。

040　大雪火山群の研究

㈶日本自然保護協会 ／ ㈶日本自然保護協会
1963 ／ 402 －ダ
大雪山は学術的に、ユーラシアと北米両大陸亜寒帯地域と比較研究する上で重要な区域に位置づけられ、日本自然保護協会が 1959 年から北大に調査を委託した。田村剛が自然保護、石川俊夫が地形と地質、舘脇操が植物、犬飼哲夫が動物、渡辺千尚が高山昆虫、そうそうたる学者が担当、執筆した。英文付き。

041　大雪山積雪水量及び流出調査

編　経済安定本部資源調査会 ／ 北海道庁
1949 ／ 451 －ダ
調査を主導したのは雪と氷の科学者、随筆家としても著名な中谷宇吉郎である。実際に現地で調査したのは中谷の指導を受けた北大低温科学研究所員、菅谷重二で、多くの写真と図表を用いて報告書にまとめた。調査は忠別川上流域から山稜に至る範囲で、積雪期から融雪期まで長期にわたった。この種の調査は日本で初めてで、雪の水資源としての知見を得ることができた。菅谷は後に菅谷水質資源研究所を設立した。

042　十勝岳爆發概報

田中館秀三 ／ 大雪山調査会
1926 ／ 453 －タ
「大正一五年五月二四日。突如として起つた十勝岳の大爆發は泥流を流す事實に六里餘。途中の森林を薙倒し且つ數千の移住民が三〇餘年間辛苦をなめ拮据經營した約一〇〇〇町歩の美田と約五〇〇町歩の耕地とを瞬時の間に泥流の海と化し去つた」（序から引用）。北大助教授、田中館らが上富良野、美瑛の被災地に直ちに調査に入った。爆発の原因は多量の融雪水が火口付近地下の水道を流下し、火口管中を上昇した溶岩によって一気に水蒸気爆発を起こした。火口の沼にたまった融雪水、山の残雪、爆発に伴う豪雨などが破壊的泥流の元になった。荒井初一が会長を務めた「大雪山調査会」が爆発から一カ月後の六月二十五日に概報を発行した。

043　ヌタプカムシペとニセィカウシペ

村上啓司 ／ 北海道林務部報『林』1971 年 9 月
1971 ／ 291 －ム
著者はアイヌ語の山名の研究家である。ヌタプカムシペとニセィカウシペの山名解について、小泉秀雄、更科源蔵、知里真志保、山田秀三らの諸説を検討しながら、山田説を正答としている。すなわち『川の湾曲した中の地・を覆って・いつもいる・もの』と解く。ニセィカウシペは、知里真志保説をとって、『断崖絶壁・の上に・いつもいる・もの』と解する。

044　利用者の利用体験に対する態度に基づく自然公園の管理方策

小林昭祐 ／ 日本造園学会誌『ランドスケープ研究』60 － 5 抜刷
1997 ／ 629 －コ
調査は大雪山白雲岳野営指定地、赤岳第三雪渓、ひさご沼野営指定地、沼の原で行う。アンケート用紙を配布、帰宅後郵送という方式で回収した（一部は現地回収）。アンケートのデータ分析結果から、高山帯において利用者が重視する環境と活動を提供するには、利用規制計画、保護施設計画、保護規制計画を相補的に考えるべきであると考察する。

２－２ 研究書（部分が大雪山）

045　荒井組慰霊碑建立の歴史調査報告書

播磨秀幸 ／ 播磨秀幸
2012 ／ 366 －ハ
荒井建設株式会社（旭川）の創業者、荒井初一は層雲峡開発に尽力し、層雲閣を経営、「大雪山調査会」会長として大雪山を全国的な観光地へ飛躍させた功労者として知られる。層雲峡にあった第七師団転地療養所の建物を寄付し、上川から層雲峡までの道路開設の巨費を負担し、その功績を明記した記念碑がある。ところが陸軍大将の放談記に荒井の功績をゆがめるような記述があり、史料として使われることもある。著者は歴史調査が趣味の同社社員。豊富な資料を元に荒井の功績を正しく伝える一方、大将の名も放談記の書名も明かさず、あくまでも奥ゆかしい。書名は「荒井組慰霊碑建立の歴史調査報告書」ではあるが、層雲峡開発

にまつわるエピソードを深く調査している。

046　石狩川水利総合開発計画調査報告（大雪ダム調査報告）

編　北海道開発庁 ／ 北海道開発庁
1964 ／ 517 －イ
表題の通りであり、内容は専門的なので省略する。「大雪ダム計画平面図」を添付してある。この一帯は小泉秀雄が「奥山盆地」と称した。ダムは 1975 年に竣工、大雪湖と呼ばれる観光地となった。

047　金井弘夫著作集

著　金井弘夫、編　大場秀章 ／ アボック社
2008 ／ 470 －カ
「植物・探険・書評」のサブタイトルがあり、本書はこれらの著作をまとめたもので、大雪山関連の記述がある。著者は植物学者、理学博士、国立科学博物館名誉館員。『ヒマラヤ地名索引』『新日本地名索引』『日本植物分類学文献目録』などの大著があり、吉川英治文化賞受賞。

048　故・小泉秀雄先生の野帳（1）

編　横内文人 ／ 長野県植物研究会誌
2006 ／ 470 －コ
小泉秀雄の野帳は全 60 冊、秀雄夫人ミサオから横内斎に譲渡された。次男・文人がその野帳を筆録、『長野県植物研究誌』（年報）に掲載したものである。北海道の植物目録は省略されているが、調査地、日付、同行者などは記載されていて、調査活動の足跡がよくわかる。さすがに大雪山系の記録は多い。筆録は現在（10）まで、その後も続行中でやっと 1923 年まできた。全冊解読、筆録によって小泉の調査の全貌が明らかになると思われる。

049　自然保護と戦後日本の国立公園

村串仁三郎 ／ 時潮社
2011 ／ 629 －ム
著者の「国立公園成立史の研究」の続編。第 11 章に「大雪山国立公園内の層雲峡電源開発計画と反対運動」「大雪山国立公園内の硫黄鉱山開発計画と反対運動」がある。前者は大雪湖（大雪ダム）の電源開発計画の経過と、反対運動に対する「適切な補償」として「大雪山観光道路開削」が町側から提起されたことを詳述している。後者は御鉢平での計画だったが国立公園審議会がハナから申請を却下し認めなかった。

050　北海道教育大学 大雪山自然教育研究施設研究報告

北海道教育大学大雪山自然教育研究施設 ／ 北海道教育大学大雪山自然教育研究施設
1962 ～ ／ 405 －ホ
旭岳温泉にある北海道教育大学自然教育研究施設を拠点に教員、研究者、学生らが調査、研究活動を続け、1962 年 3 月に「研究報告」を創刊以来、これまでに 49 号を発行している。年 1 回、400 部を刷り、寄贈、配布する。（詳細は 57 ～ 62 ページ）

051　北海道高山植物図譜　附菌類

小泉秀雄 ／ 小泉秀雄
1918 ／ 471 －コ
「大雪山の父」といわれる小泉秀雄自描の着色図譜で、旭川中学校教諭時代に作った和綴じ本。第一・顕花植物部、第二・隠花植物（菌類ノ外高山産）部・甲－菌蕈類、乙－地衣類・蘚苔類・羊歯類をもって構成する。合わせて 219 種の植物を図示する。現物は小金井の小泉家が所有し、東川町にはそのコピーがある。

052　北海道地名一覧

栃木義正 ／ 栃木義正
1986 ／ 291 －ト
地名研究家・栃木義正は前著『北海道地名索引』をベースに本書を著した。特徴とするところは、5 万分の 1 地形図の位置と地名の由来、出典を明記したところにある。ただし山や川などの自然地名は割愛、市町村名を含む集落地名を 50 音順に配列してある。一例をあげると、「東川」は、東川町 = 東・川の意訳か（山田秀三）。そのほか黒松内町、苫前町、新冠町、釧路市、函館市にも東川がある。「旭」「朝日」「旭町」「朝日町」がいかに多いかも一目瞭然にわかる。町名も「ちょう」と「まち」と、呼び方が違うことも記してある。

053　北海道のスキーづくり

佐藤徹雄 ／ 市立名寄図書館
1958 ／ 784 －サ
名寄叢書の第 4 巻。著者は高校教諭であり、スキー研究家である。スキーの発祥に始まり、北海道のスキー発達史、スキーづくりの歴史にまで及ぶ。レルヒ中佐と旭川第 7 師団、1913 年（大正 2 年）には早くも旭川中学の生徒もスキーを始めたこと、旭川にはかつて、スキー製作工場が 10 軒もあったことなどを調べ、記述している。北海道のスキー場と索道設備表では、ロープウェイ、リフトなどの設備を 5 類に分けて表示。大雪山スキー場、層雲峡スキー場などは「普通」閉鎖式搬器（扉を有する箱型、人及び物を運送する）と呼ぶ。一般的なリフトは「乙」椅子式搬器（外部に開放された座席で構成された搬器）という。

054　北海道・緑の環境史

俵浩三 ／ 北海道大学出版会
2008 ／ 519 －タ
本の帯に「長らく北海道自然保護協会会長を務めた著者が、自らの体験を踏まえ、北海道の環境保護の歩みをまとめた、次世代に託すバトン。渾身のライフワーク！」とある。愛別村長・太田龍太郎の「霊山碧水」など大雪山国立公園に関する記述もあるが、

北海道全域の森林資源の利用と管理、優れた自然環境の保全、「民唱官随」で前進する自然保護など広範に調べ記述している。巻末の引用・参考文献は膨大である。

実録

登山記録、遭難記録、遭難報告書類、ドキュメンタリー、ノンフィクション

3－1 実録（全てが大雪山）

055　大雪山山行印象記

川村耕造／川村澄
1998／291－カ
著者は四日市市の大病院の理事長であったが1993年、60歳で急逝した。10年後に遺稿が発見され、それをもとに当時の写真を加えて妻・澄が小冊子にした。本書は1988年8月の大雪山登山記である。

056　天人峡砂防ダム

旭川土木現業所／旭川土木現業所
1963／517－テ
天人峡の忠別川とクワウンナイ沢の分岐上流にあるV字渓谷に造られたアーチダムの詳細な記録。昭和22年のカサリン台風で忠別川が氾濫、東川や下流域の旭川に被害が広がった。23年から大々的な砂防調査が始まり、道内初の砂防工事が忠別川で実施され、清流ダムなどが完成。一連の砂防ダム工事で最大規模となった天人峡砂防ダムを中心に工法、技術などの記録である。

3－2 実録（部分が大雪山）

057　印刷の道 100年

山藤印刷100年史編纂室／山藤印刷株式会社
1999／749－イ
山藤印刷の歴史は1996年、山藤敬助「山藤活版所」設立に始まる。以来100年、北海道文化の担い手として発展を続け、同社の印刷物はそのまま北海道文化史というべきである。本書は集大成とする箱入豪華本で、第2部「伝えて、残す」には90ページのカラー写真があり、膨大な山藤の印刷物を掲示しており、ひときわ目立つのが『ヌタツク』の2冊。『新北海道史』、北大関係の本など公的な印刷物も多い。

058　風と岩の音　田所一義君追悼集

編　阿部智一ほか／田所芙実子
1997／289－タ
田所は北峰岳朋会会員、詩的であり思索の人、絵も描く。大雪山系の記事が随所に見られる。岳友との岩と氷雪の登山も多く、かつ酒も好んだ。一方、単独行者としても知られていたのである。1993年5月、単独で日高カムイエクウチカウシ山に登山中遭難。41歳、夫人、1男1女を残して。本書は田所の遺稿、手記、スケッチとともに、故人を偲ぶ追悼文をまとめたものである。巻頭の長女の言葉が重い。

059　北の山と本　その登山史的考察

高澤光雄／日本山書の会
1992／786－タ
後篇に「北海道登山史年表」（1871～1991）、「本邦山岳団体の刊行せる部・会報についての誌名目録　北海道の部」（五十音順）、「北海道関係山書目録」（1868～1988）を発行年順に記載。本編では清水敏一の「北大山岳部『時報』、北大山の会『会報』戦前編の解題」など九編。

060　広葉樹に惚れて五十年

高橋丑太郎／第一印刷出版部
1984／650－タ
著者は創業百年超えの『昭和木材』二代目社長で北海道の木材業界を代表した一人。北海道林務部の広報誌「林」に請われて「北海道広葉樹に夢を託して」を昭和56年11月～58年4月まで連載し、これに加筆した自分史で、樹木と木材業界を広く語っている。ことに大雪山の原生林をなぎ倒した昭和29年の洞爺丸台風について、木材屋として風倒木処理の奮戦ぶりと業界にもたらした功罪を書いている。洞爺丸台風が荒れ狂った9月27日は著者の忘れがたい誕生日でもある。

061　札幌グランドホテルの50年

阿部要介／三井観光開発株式会社
1985／689－ア
同ホテルが開業したのは1934年、本書の小見出しにあるように阿寒、大雪山国立公園指定の年であった。北海道庁商工課は1936年度予算に開拓使以来初めて「観光費」の費目を作って700円を計上…。北海道景勝地協会は、前年まで1千円だった予算を一挙に2千5百円に増やし、国立公園と温泉の紹介パンフ、大雪山と利尻の絵はがきを大量に作り…。札幌鉄道局も前年度の2倍にあたる2万円の宣伝費を組み、阿寒と大雪山国立公園のリーフレット3万部…。札幌市役所でも観光係を設置、札幌観光協会発足…。1936年は札幌（北海道）の観光元年であったと記述する。同年6月19日は北海道が皆既日食観測の適地だったので内外の学者が来道、宿泊、会食、会議に同ホテルを活用した。英国ストラットン教授を中心に池田北海道庁長官、高岡北大総長、中谷宇吉郎、茅誠司らの記念撮影写真がある。

062　登山歴程

児島勘次 ／ 児島勘次
1973 ／ 290 －コ
布装箱入りの豪華本ながら、なぜか目次のない本である。非売品。著者は同志社大学山岳部出身、同書はこれまでに発表したものを 1 冊にまとめたものである。足跡は台湾の山、朝鮮白頭山、中国大興安嶺、ヒマラヤ・サイパル初登頂（隊長）に及ぶ。北千島の登山では、単独行の小泉秀雄と交流、語りあう。児島は大雪山など北海道の山にも登っている。

063　突兀七千有余尺　庁立旭川中学校校歌雑考

栃木義正 ／ 栃木義正
1994 ／ 376 －ト
書籍名は「とつこつ･しちせんゆうよしゃく」と読み、北海道庁立上川中学校（現北海道旭川東高校）の校歌の歌い始めである。東高校歌は昭和 29 年に代わったので今は歌われることはないが年輩の OB らは誇らしげに歌い、札幌や函館の同窓会は「突こつ会」という。突兀は山が険しくそびえることで、大雪山を指し、明治時代の測量で標高は七一〇八尺だった。著者は卒業生であり、教師でもあり「北海道地名索引」などの著書がある郷土史研究家。難しい歌詞がなぜ出来たのかを作詞作曲・塩田弓吉から調べ、大雪山の山名の変遷、大雪山の読み方などへ論考を広げている。

064　ナナカマドの挽歌

秋庭ヤエ子 ／ 恒友出版
1979 ／ 289 －ア
昭和 6 年生まれの著者の手記「赤い命」が話題になり、改題して出版され、副題に「地獄を見た母　愛と痛恨の手記」とある。大雪山麓の上川町天幕にあった冬山造材飯場で幼子を抱えて暮らした時期があり、その『数カ月間は､文字どおり死闘の連続』で､『こだまは、「頑張るんだぞ!」 大雪山の峰々が私を励ましてくれているように聞こえるのです』と書いている。

065　日本の山岳　登頂跡誌

編　松浦勇次、大西敏夫 ／ 松浦秀明
1993 ／ 786 －ニ
「一等三角点　本点と其標高 1963 ～ 1993」という副題がついている。その間に大雪山にも登っているが、「登頂跡誌」一覧表には残念ながら割愛されている。松浦は本州以南に限定したのであった。82 歳の 1992 年 10 月、大峰山系南部の山へ 4 泊 5 日の予定で、単独入山したが消息不明となる。残した登山計画をもとに捜索を続けたが手がかりがなく、延べ 375 人の大捜索であったが、生存の見込みなしと判断、身内の申し入れで中止される。本書は松浦の出版予定の原稿であったが、図らずも遺稿集になってしまった。子息・松浦秀明が行方不明に至る経過、捜索活動の概要報告と謝辞を述べている。

066　北海道一般スキー八十年の歩み

栗林薫 ／ 広告の岩泉
1991 ／ 789 －ク
布装箱入の立派な本。著者は北海道教育大学名誉教授、スキー連盟の役員として基礎スキーに関わってきた。1957 年 1 月、旭岳で遭難事故があり、同年 5 月に著者は遺体捜索隊長として出動、旭岳に向かう一隊の写真が巻頭のグラビアにある。1930 年、ハンネス・シュナイダーが十勝岳で妙技を披露したこと、1949 年、旭川の速水潔が戦争で片腕を失いながら義手で指導者検定に合格したこと、1957 年 3 月の指導者研修会は層雲峡を宿舎に大雪山赤岳中腹までツアーをしたことなどを語る。総じて議事録的な記述となり参加者、合格者の氏名などが大半である。

067　北海道中央分水嶺踏査記録　―宗谷岬から白神岬まで

編　高澤光雄 ／ 日本山岳会北海道支部
2006 ／ 786 －ホ
日本山岳会が創立百周年記念事業として日本列島中央分水嶺踏査計画を実施、このうち北海道支部が宗谷岬から白神岬まで 1,132㎞を踏査した記録。中央分水嶺とは、降った雨や雪が川となって日本海側に流れるか、太平洋側に流れるかの境で、日本の脊梁である。道内の踏査に参加した会員は 139 人。大雪山系も通り抜ける調査であり、20 万の 1 地勢図にルートを書き入れ、記録に回想を加えた。

068　北海道中央分水嶺踏査　余話

編　滝本幸夫 ／ 日本山岳会北海道支部
2007 ／ 786 －ホ
日本山岳会北海道支部が挑んだ中央分水嶺踏査の報告書とは別に、踏査に参加した会員の思い思いの寄稿をまとめた。積雪期の尾根を行く困難な踏査だっただけにヒヤリ、ハッとする回顧も多く、達成感がにじむ寄稿集になった。

069　北海道の環境を守るために

編　北海道警察本部生活安定部 ／ 北海道警察本部生活安定部
1999 ／ 519 －ホ
～環境犯罪防止に関する提言～の副題がある。「高山植物の盗掘問題」「稀少動物保護問題」「廃棄物問題」の部に分け、全編グラビア紙にカラー写真を添えている。大雪山の写真も多い。本書は各分野で活躍する人たちの提言集で、そのひとつ「大雪山監視員のアルバイトで学んだこと」（酪農学園大学・吉沼利晃）がある。盗掘の取り締まりを行う道警ヘリコプター「大雪」の写真を裏表紙に使っている。

070　村井米子追悼集

編　日本山岳会婦人懇談会有志 ／ 日本山岳会婦人懇談会有志
1989 ／ 289 －ム
村井米子は作家・料理研究家として著名な村井弦斎の長女。女人禁制であった立山に登り、女性第 1 号登頂者となったのをはじめ北アルプス槍穂高縦走女性第 1 号成功者。スキーもよくし、女性登山の先駆者である。日本山岳会名誉会員。1986 年、85 歳で急死したのを惜しんで、追悼文を寄稿、本書を発行した。そのうちのひとり千家啓麿（国立公園協会会長）が、1931 年 1 月、十勝岳吹上温泉で初めて村井に会ったときの思い出を書いている。

071　山道具が語る日本登山史

布川欣一 ／ 山と渓谷社
1991 ／ 786 －ヌ
変わった視点からの登山史で、きわめて興味深い本である。古くは「立山曼荼羅」（信仰登山）に始まり、「播隆の遺品」（槍ヶ岳開山）に続いて「明治・大正・昭和の山岳書」の項がある。山岳書も山の道具のひとつには違いない。見開き全面の写真があり、『富士案内』『日本風景論』などとともに『大雪山　登山法及登山案内』（小泉秀雄著）が大きく映っている。「山内、門田第一号」の項では国産ピッケルの先駆者として札幌門田を記述する。「シュナイダーの愛用具」では“雪の王者”ハンネス・シュナイダーが 1930 年、十勝・吹上温泉でスキーの実技指導を行ったとある。

072　山と雪の日記

板倉勝宣 ／ 朋文堂（コマクサ叢書）
1958 ／ 291 －イ
立山松尾峠で遭難した板倉の遺稿集である。板倉は学習院から北大に学び、北海道の山にも数々の足跡を残した。なかでも 1912 年 1 月の大雪山旭岳、同年 3 月の黒岳は、いずれも積雪期初登頂である。

073　山への挑戦―登山用具は語る―

堀田弘司 ／ 岩波書店
1990 ／ 786 －ホ
岩波新書の 1 冊。山へのあくなき挑戦は、登山用具の開発とともにあったという視点から、登山用具の進化と変遷をたどりながら登山史を語る。札幌門田のピッケルとアイゼンは、北大山岳部員・和久田弘一の依頼によって作成され、和久田らは十勝連峰で試用して、大いに満足すべき結果であったという。なお和久田は『北大山岳部々報』第 4 号に、「ピッケルとアイゼンの材質について」の論考を寄せている。

人物誌

人物伝、人物史、人物研究、追悼録など

4 － 1 人物誌（全てが大雪山）

074　大門金光・天人閣支配人の記録

大門金光 ／ 大門金光
1988 ／ ―
天人峡温泉『天人閣』の支配人を長く勤めた大門の自分史。『天人閣』社史のつもりで書いたようだが日の目をみなかった。筆文字の原稿を『（株）総合企画』社長、宗万忠に託し、宗万がワープロ打ちした A4 版 67 ページの実録。（詳細は 51 ～ 55 ページ）

4 － 2 人物誌（部分が大雪山）

075　阿寒国立公園の三恩人

種市佐改 ／ 釧路観光連盟
1984 ／ 289 －タ
著者・種市は弟子屈町の郷土史家であり、その方面の著作も多い。三恩人の一人が日本国立公園の父といわれる田村剛であり、阿寒と大雪山が同時に国立公園に指定されたことから、田村の項にはその経緯を含めて大雪山をも記述している。田村は林学博士、造園学者である。著者は田村に会い指導、教示を受けた。余記すると、北大農学部・愛甲哲也准教授が 2014 年、日本造園学会田村剛賞を受賞している。

076　回顧録　牛と夢

舘田外行 ／ 舘田芳郎
1990 ／ 289 －タ
著者・舘田の妻は荒井初一の三女であり、荒井家の事業にも深く関わってきた。本書は著者の自叙伝であり自分史であるが、そのなかには荒井一族に関する記述も多い。荒井寛三（初一の次男）らと愛山渓から永山岳、北鎮岳、黒岳を縦走して層雲峡に下山したこともある。荒井家と層雲峡開発の歴史資料といえる。書名の「牛」は著者が丑の年に生まれたから。

077　郷土を拓いた人々

村上久吉 ／ 旭川市郷土博物館
1956 ／ 281 －キ
「石北線設置層雲峡紹介の功労者愛別村長太田龍太郎」と「層雲峡開発に生涯を捧げた塩谷忠」を紹介している。出典資料は太田著『霊山碧水』と、『寒帯林』より塩谷著「大町桂月翁を想う」によるとしている。

078　昭和ひと桁生かされて八十四年

鎌倉春雄 ／ 鎌倉春雄
2013 ／ 289 －カ
著者は、大雪山の山案内人として名を残す成田嘉助の孫。嘉助じいちゃんと黒岳石室の周りで遊んでいるとき突然、「ハルオ、熊

だぞ」とじいちゃんが叫ぶ。親子熊三頭が近くを歩いていた思い出の一コマ。旭川でお茶の「静香園」を営んできた著者の自叙伝であるが「成田嘉助物語」の項を起こし、嘉助のエピソードを書いている。

079　日高山脈の先蹤者　相川修遺稿集
編　高澤光雄／日本山岳会北海道支部
2003／786 ーア
相川修は札幌第二中学出身で、部報『ヌタツク』に寄稿している。北大医学部卒業、内科医。北大山岳部員として活躍、その後も終生登山を続けた。日本山岳会名誉会員。回想記には大雪山登山のことも出てくる。

080　続『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ／中西出版
2002／281 ーホ
毎週日曜日、北海道ゆかりの人物にスポットライトをあて、その人生ドラマを約 6 千字の放送原稿にして、朗読のスタイルで 30 分間番組で放送した。それを本にまとめたもので、写真も挿入し 1 人約 10 ページの北海道人物伝というべき 1 冊。本書では、小泉秀雄を大雪山の山々を命名し、「大雪山の父」と呼ばれた植物学者として取りあげている。大雪山ゆかりの人物では他に前田真三、中谷宇吉郎がある。

081　続々『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ／中西出版
2003／281 ーホ
北海道の風土を描き続けた洋画家、相原求一朗を紹介、挿絵も相原の描いた北の十名山のひとつ「山麓紅染む旭岳」である。大雪山関係では他に坂本直行、高橋延清らを紹介している。

082　第五集『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ／中西出版
2004／281 ーホ
本書は「写実の鬼」で知られる大雪山の画家、村田丹下を取りあげている。大雪山ゆかりの人物は他に犬飼哲夫、宮部金吾がある。STV ラジオ「ほっかいどう百年物語」ラジオ番組制作スタッフの姓名も記載している。

083　松浦武四郎紀行集　下巻
編　吉田武三／冨山房
1979／915 ーマ
編者・吉田は武四郎研究の先駆者であり、原文を解読、ルビを付して現代人にも読みやすくし、武四郎全国の旅と探検紀行を上中下 3 巻にまとめた。布装箱入の立派な本で、下巻に大雪山ゆかりの「石狩日誌」「十勝日誌」を収録した。

084　森のひと　どろ亀さん
米村晃多郎／春秋社
1984／289 ータ
〈北の肖像〉シリーズの 1 冊。どろ亀さんといえば東大北海道演習林長を勤めた東大名誉教授の高橋延清のこと。「教壇に立たない、教授会には出ない、論文も書かない」三無教授の一代記。林内の最高峰・大麓山（1460m）は、大雪山国立公園区域内であり、ハイマツもあればナキウサギも棲む。兄・高橋喜平は雪の研究家として著名で、本書発行時は兄弟ともに研究活動を続けていた。

案内書

登山案内、自然案内、観光案内、花案内、案内小冊子、案内ガイドブックなど

5 － 1 案内書（全てが大雪山）

085　ぐるり大雪
編　大雪山国立公園観光連盟／大雪山国立公園観光連盟事務局
1997／291 ーグ
大雪・十勝連峰西方の 10 市町で結成する観光連盟のガイドブックである。A4 判 14 ページの小冊子に景観、温泉、飲食、アウトドア、イベントを紹介、A2 判の折り込み観光地図もある。

086　大雪山　花の山旅①
梅沢俊／山と渓谷社
2000／291 ーウ
山と渓谷社の花の山旅シリーズのトップを飾ったのが梅沢俊の「大雪山」。梅俊は大雪山を花のギャラリーとたたえ、花の色別に白色系、黄色系、赤色系、紫色系の図鑑で百三十六種を紹介。群落やお花畑を愛でながら進む登山コースを愛山渓から旭岳まで九コースを紹介、さらに大雪山の見ごろ別の花マップを登山地図上に記している。

087　大雪山　十勝岳・幌尻岳　山と高原地図 3
佐藤文彦／昭文社
2015／291 ーダ
登山道や山中のキャンプ場の状況、山小屋、トイレ、高山植物群落の情報、悪天候時の注意ポイントなどの調査を継続し、最新情報を確実に入れた 5 万分の 1 地図と登山ガイドブックをセットにしている。大雪山は上川町の『風の便り工房』佐藤文彦代表、日高の山はノマドガイドチームがそれぞれ調査、執筆を分担した。

088　大雪山・旭岳の自然観察

㈳北海道自然保護協会 ／ ㈶日本自然保護協会
1983 ／ 462 －ダ
協力は北海道、東川町、前田一歩園財団、北海道自然保護協会によって作られた自然ガイドである。旭岳周辺に限定しており、山麓の天人峡、羽衣の滝、敷島の滝、旭岳温泉周辺、姿見の池周辺を、イラストや写真でわかりやすくガイドする。登山案内ではなく自然観察ガイドなので、山麓の森から高山の花へ、植物、動物、鳥、高山蝶のほか、地形や旭岳の誕生も解説する。

089　大雪山国立公園　自然観察ガイド

大雪山国立公園層雲峡管理事務所ほか ／ 大雪山国立公園層雲峡管理事務所ほか
1985 ／ 462 －ダ
32 ページの持ちやすい厚紙のハンドブック。表紙は黒岳三山、裏表紙は黒岳石室のスケッチ。刊行には上川町、上川町自然科学研究会が関わっているので、すべて上川町からのガイドである。1･黒岳コース、2･赤岳コース、3・高原温泉コース、4・愛山渓コースについて、図示しながらコースガイドとともに、自然観察のポイントを挙げていて分かりやすい。お花畑、コマクサ、ナキウサギ、鳥類、ウスバキチョウなどを観察できるところや景観の解説、注意事項もある。黒岳山頂の北面には「危険!! 落ちると天国に行く」とある。

5 － 2 案内書（部分が大雪山）

090　一等三角点全国ガイド

編　一等三角点研究会 ／ ナカニシヤ出版
2011 ／ 291 －イ
一等三角点に愛着を持つ研究会グループが書いたガイドブックで大雪山周辺は旭岳、トムラウシ山、音更山、富良野岳、武利岳、ウペペサンケ山を紹介、すべてに一等三角点の標石の写真を添えてある。

091　一等三角点百名山

編　一等三角点研究会 ／ 山と渓谷社
1988 ／ 291 －イ
三角点は必ずしも山頂に限らないこと、点名と山名は一致しないことなど興味を引く。本書では全国の一等三角点 969 点から百の名山を選び、1 山 2 ページに写真、地図を配した紀行文調の案内記である。北海道から 10 山が選ばれ、大雪山系（カッコ内は点名）のみをあげると、旭岳（瓊多窟･ヌタック）、トムラウシ山（富良牛山・トムラウシヤマ）、富良野岳（神女徳岳・カムイメトクダケ）である。

092　北の花名山ガイド

梅沢俊 ／ 北海道新聞社
2012 ／ 291 －ウ
植物写真家、梅沢俊が『花新聞ほっかいどう』に 2008 年 3 月から 2011 年 12 月まで連載した寄稿に、宿泊情報や開花時期などを加筆、カラー写真も増やした。花を楽しみながら行く登山コガイドブックで大雪山・旭岳から紹介が始まる。

093　登山ガイド　1974 年版

旭川山岳会 ／ 道北地方山岳遭難防止対策協議会
1974 ／ 786 －ア
ポケット版のコンパクトな初心者向け小冊子。大雪山系、芦別岳、増毛山地、利尻山をガイドする。「安全登山の心得」に始まり、「楽しく登山をするために」などの項がある。概念図、鳥瞰図によるコースガイド、案内文、注意事項によって構成する。巻末に各登山口宿泊施設と料金、避難小屋、ロープウェイ（層雲峡、旭岳）の料金と時刻表、各登山口までのバス時刻表を載せている。重要な「山岳遭難の実態」では、1970 年から 4 年間の発生件数、遭難者数、原因別、職業別、年齢別、性別、居住別にグラフ化している。

094　登山ガイド　1986 年版

旭川山岳会 ／ 道北地方山岳遭難防止対策協議会
1986 ／ 786 －ア
基本的には 1974 年版（36 ページ）と同じだが、ガイド山域はピヤシリ山、函岳、天塩岳を加えたので、48 ページと分厚くなった。表紙はトムラウシのカラー写真。冬山を意識して「防ごう !! 冬山遭難を !」の項が加えられている。1986 年から 5 年間の遭難事故の実態を山系別に図示することで実態が分かりやすくなった。山域の広さ、登山者の多さから大雪山が圧倒的に多く 33 件 17 人を数える。

095　夏山登山教程

編　山岳会「クーラカンリ」／ あいわプリント
2015 ／ 786 －ナ
北見地方を拠点にする山岳会「クーラカンリ」の会員 7 人（5 人は主婦）が書いた登山教本。初心者にも分かり易い内容で、登山技術研修会、対外協力など地域活動の章を設け解説しているのが異色。大雪山など道内の主な夏山登山コースを紹介、カラー写真が鮮明だ。

096　日本百名山登山案内

伊藤健次ほか ／ 山と渓谷社
1999 ／ 291 －ニ
百名山のうち、大雪山は姿見の池…旭岳…間宮岳…中岳温泉…裾合平…姿見駅の登山ルートを紹介。他にトムラウシ、十勝岳の

登山ガイドも。

097　花の百名山　登山ガイド
WALK CORPORATION ／ 山と渓谷社
2002 ／ 291 －ハ
上巻は、北海道から北関東までの五十座の紹介。大雪山は伊藤健次が執筆。銀泉台→赤岳→小泉岳→白雲岳→緑岳→高原温泉の「ホソバウルップソウが見たい」というコースと、「エゾルリソウが見たい」という十勝岳温泉→富良野岳→上ホロカメットク山コースの二ルートを紹介している。

098　北海道　沢登りガイド
岩村和彦 ／ 北海道新聞社
2015 ／ 291 －イ
沢登りについて著者は「自然条件による困難さや、想定外の出来事に遭遇する機会が多い。気軽に取り組むには難易度が高い」と初めに書いている。大雪山系では天人峡温泉近くのクワウンナイ川からトムラウシ山へ、ポンクワウンナイ川から小化雲岳へ遡行するルートなどを紹介している。

099　北海道の自然をあるく
編　北海道新聞社販売促進部 ／ 北海道新聞社
1992 ／ 291 －ホ
北海道新聞の 60 ページの PR 小冊子で、自然の楽しみ方を紹介している。「十勝・大雪の自然をあるく」は金山湖、嵐山ビジターセンターを案内、大雪山ではネイチャーガイド・塩谷秀和のトークがある。

100　北海道名所旧蹟
千葉萬葉 ／ 小島大盛堂書店
1925 ／ 291 －チ
大正末に発行されたガイドブックのような内容の文庫版。文語体で詩歌を添えて名所旧跡を紹介している。鉄道沿線に沿って案内は進み、函館本線・旭川市に大雪山、釧路沿線にオプタテシケ硫黄山（十勝岳）の記事がある。宗谷沿線にも大雪山の項がある。ただ『日本名勝地誌』（松原岩五郎）の類似表現があり、著者は大雪山を探勝することなく参考資料に基づいたようである。

101　北海道　雪山ガイド（増補新版）
北海道の山メーリングリスト ／ 北海道新聞社
2011 ／ 291 －ホ
大雪・十勝の山関係は、山スキーのメッカとして賑わったことのあるチトカニウシ山をはじめ安足間岳、白滝天狗山、パウダースノーの聖地三段山、前十勝、富良野岳の六山を紹介している。

102　雪山登山ルート
西田省三 ／ 山と渓谷社
2014 ／ 291 －ニ
国内の代表的な冬山 60 ルートを山岳写真家である著者が取材し、グレード、特徴を付記した。北海道は大雪山・旭岳と利尻山の二山で、旭岳はパウダースノーに輝く北海道の最高峰、天候判断の難しい山と紹介している。「視界不良時下山コースに注意」など地図のルート上に赤文字で記入がある。

103　わが心の上川　Kamikawa On My Mind
上川町役場企画総務課企画グループ ／ 上川町
2014 ／ 211 －カ
上川町が明治 28 年の入植から 120 年を迎えた 2014 年に制作した町勢要覧。写真を多用したビジュアルな編集で、「神々の大地」から始まり、32 ページのおよそ半分が大雪山とその魅力の紹介となっている。

図録類
写真集、画集、図集、画文集、各種図録など

6 － 1 図録類（全てが大雪山）

104　輜重兵第七大隊　大雪山縦断行軍寫眞帖
不詳 ／ 不詳
1929 ／ 396 －シ
1929 年 8 月 11 日から 20 日にかけて 10 日間の大雪山縦断行軍記録である。将校准士官 22 名、下士 160 名、馬匹 38 頭、車両 20 両。患者 1 名還送、軍馬 1 頭が犠牲になった。終了後、慰労の宴を開き、「大雪山踏破ノ軍歌」を歌ったと記されている。10 節からなる歌詞と譜もあるが、1 節のみを紹介する。「昭和四年夏半ば ／ 輜重兵第七大隊は ／ 大雪山系縦断の ／ 壮図を今や決行す ／ ソレ越せ大雪山」。

105　層雲峡の景観　額面写真六枚組
不詳 ／ 不詳
1938 年以前 ／ —
立派なケース入りで、大きさは 28 × 23㌢、モノクロながら鮮明な写真が 6 枚入っている。額面写真六枚組の表記の通り額に入れて部屋の壁面を飾るもの。大函、小函、神削壁、天城岩、銀河の滝、流星の滝の 6 点。

106　大雪山・層雲峡　写真帳
塩谷忠 ／ 大雪山調査会
1933 ／ 291 －ダ
横型紐とじのアルバム形式である。大雪山調査会は同類の写真帳を何種類も発行しているが、これは村田丹下の原色の絵で表紙を飾っている。モノクロ写真は表大雪から石狩岳、トムラウシ、沼の原、ニセイカウ

シュッペ、然別湖、層雲峡、羽衣の滝、敷島の滝、幣の滝など広範囲に及ぶ。写真には小泉秀雄も出てくる。巻末に高山植物、高山蝶の写真もある。

107　大雪山絵画コンクール受賞作品集
編　大雪山絵画コンクール実行委員会 ／ 大雪山絵画コンクール実行委員会
2002 ／ 723 －ダ
絵画コンクールは大雪山の魅力を広く発信することを目的に上川支庁が主催した。小学生の部、中学生の部に分かれ、大賞各 1 点、優秀賞各 3 点、佳作各 10 点、美しいカラー写真で紹介している。児童、生徒の視点、感覚で描いた自由な発想の絵が面白く、応募者の大雪山に寄せるメッセージに心を引かれる。

6 － 2 図録類（部分が大雪山）

108　生誕 140 年　大町桂月
編　高知県文学館 ／ 高知県文学館　編
2009 ／ 289 －オ
高知県文学館が開催した「大町桂月～酒と旅と自然を愛した文人展」図録である。人と文学の解説に次いで、桂月の文学碑を高知県（生誕地）9 基、青森県（終焉地）42 基、全国 33 基（合計 84 基）を、それぞれ写真と碑文、碑の説明をしている。北海道にも 6 基あり、大雪山の層雲峡と天人峡の碑も紹介しているが、天人峡温泉はなぜか天女温泉と誤表記されている。

109　北の雪稜
編　若林修二 ／ 北海道撮影社
1975 ／ 748 －ワ
「編集にあたって」で若林は「道内の幾多の山、あらゆるコースに若き血潮の踏み跡を残してきた。写真集はいわば、私たちの山に賭けた青春の軌跡の集大成」と書いている。私たちとは若林、梅沢俊、菅原靖彦、中村喜吉、三輪裕佶、安田成男の六人。荒々しい冬山の写真が大部分を占めるが急斜面をスキーで登る仲間、冬山キャンプの寛ぎなどが混じる。巻末に「北海道の 50 名山」を写真と共に紹介している。

110　北の大地に生きて
高知県立坂本龍馬記念館 ／ 高知県立坂本龍馬記念館
2006 ／ 723 －サ
副題に「反骨の農民画家　坂本直行作品集」とある。直行が坂本龍馬の系列であることから高知県立坂本龍馬記念館が「おかえり！直行（ちょっこう）さん」という展覧会を開き、作品を図録にした。龍馬直筆の書簡も載せ、「小弟はエゾに渡らんとせし頃より、新国を開き候」と蝦夷地へ渡って開拓するのがを夢と書いてあり、興味深い。直行が十勝の開拓に入り、日高山脈などを描いたが大雪山とそこに咲く花の絵も多く描いた。

111　近代洋画に見る日本の名山
編　藤井敏明 ／ 朝日新聞社
1985 ／ 051 －ア
アサヒグラフの増刊美術特集で、北から南へ、70 点の名山が描かれている。ただし富士山の絵は 5 点あり、別格扱いになっている。北海道の山は 7 点、大雪山は、田辺三重松「照りかげる裏大雪」（1970 年、札幌市蔵）がある。具体的な解説はないが、東大雪連山を遠望する絵である。

112　『河野齢蔵』生誕 150 周年記念特別展図録
編　松本市立博物館 ／ 松本市立博物館
2015 ／ 289 －コ
河野齢蔵は初期の高山植物研究家として著名である。その他に山岳写真家、教育者、画家、歌人としての貌もある。齢蔵はまた大雪山初期の登山者の一人であり、兄は北海道史研究家の河野常吉である。齢蔵の遺した膨大な文献資料は、ようやくその一部が明らかとなり、特別展が開催された。齢蔵の建てた長野県松本市の河野家は、オウム真理教・松本サリン事件の現場にもなった。

113　国立公園大雪山阿寒洞爺勝景大観
高本曉堂 ／ ―
不詳 ／ 721 －タ
正絹四方金特装折本・帙（ちつ）入りの画帖である。見開き全面の絵が 14 点。画家・高本曉堂直筆の絵で、単彩、淡彩あり、すべて山の絵である。うち大雪山 7 点、いずれも山麓からではなく、山中や山頂から描いたもので、彼自身登山家であり、数少ない山岳画家であったことがわかる。画名、時季、落款はあるが、年の明記がない。

114　山嶺抒情　画文集
橋本広 ／ 橋本広
1967 ／ 290 －ハ
著者は富山県の高校教諭、全国の山を歩いて絵を描く。北海道の山旅は 1966 年の夏休みのもので、テントを担いで 20 日間歩いた。まずは北海道の最高峰、大雪山旭岳に登り、次いで十勝岳に立つ。利尻、雌阿寒、羅臼、樽前、ニセコの山々に登る。それぞれに絵と文がある。このようにして全国の山を歩き、ヒマラヤ一人旅（シェルパ、ポーターは雇う）もした。それらの山旅がこの 1 冊に凝縮されている。

115　旅ゆけば　阿寒湖物語
石川球太 ／ 電子書籍版「eBook Japan」
― ／ 726 －イ
漫画家、石川球太が戸川幸夫原作「牙王物語」を漫画化するまでのエピソードをインターネットのウエブ漫画に描いた。大雪山中で生まれた野生犬「キバ」、クマに襲われて崖から飛び込んだのが羽衣の滝、大雪山を縦横無尽に駆けるキバのイメージを掴も

うと石川は天人峡温泉にやって来る。旭岳で遭難寸前に助けられ、次に向かった阿寒湖畔でアイヌの彫刻家、砂澤ビッキらと交流、十勝岳大爆発を雌阿寒岳山頂から眺めているとき、怒涛の噴煙に「キバ」が疾走する姿が浮かんできた。

116　地図の風景　北海道編Ⅱ道東・道北
堀淳一ほか ／ そしえて
1980 ／ 291 －チ
そしえて文庫シリーズの 1 冊で、表紙カバーは然別湖の空中写真。写真と地図とエッセイで風景を語るのが狙いで、ステレオ空中写真がたくさんあり、立体視（実体験）できることが本書の特長である。大雪山では「鬱々と深く暗い神々の半円劇場（東大雪）」、「奥山にひそむ高原・円頂丘群に抱かれた湖（北見富士・雄柏山・然別湖）」がある。

117　日本の山河
緑川洋一 ／ 矢来書院
1975 ／ 748 －ミ
緑川は歯科医でありながら「光の魔術師」と呼ばれた写真家。縦 37㎝、横 26.5㎝、厚さ 3㎝の大判の写真集に大雪山は勇駒別の「大雪山原生林」1 枚。雪が原生林の下草を隠し、雪面から靄（もや）が絶えず立ち上るうっそうとした風景。添えられた紀行文「老樹の国」は串田孫一。緑川の写真、串田の文で東京新聞などに連載された。

118　日本の山河　水墨の詩
緑川洋一 ／ 東方出版
1997 ／ 748 －ミ
水墨の詩とあるようにモノクロームの写真が 88 枚。このうち大雪山関係は 4 枚。緑川が「南国育ちの私にとって神秘的とさえ思える山容が印象に残った」という純白のトムラウシ、「森の精でも出てきそうな」大雪原生林、十勝岳雪中噴煙、厳冬の十勝中腹。

119　日本の名山　四季の山容を探る
編　奥村芳太郎 ／ 毎日新聞社
1971 ／ 291 －ニ
巻頭のグラビアページを新雪の旭岳空撮、紅葉の高原温泉など大雪山の四季折々の美しい 9 枚の写真で紹介。本文でもモノクロームの写真をふんだんに使い、キャプション（写真説明）が国立公園と山の紹介記事を兼ねている。

120　日本の名山　北海道編
監修　鈴木修、編　足立朗ほか ／ 郷土出版社
1999 ／ 720 －キ
画集『日本の名山』は大きさ、質感、重量感、どれをとっても名山画集として第一級の作りである。全 6 巻のうちの第 1 巻が北海道編で、70 の作品を収めている。大雪山系は 16 点。大判変形の画面は見ごたえがあり、なかでも見開き全面の「十勝岳」（横山操）は迫力十分、作品解説にも曰く因縁があって、より興味をそそられる。以下 16 作品の画家名のみを挙げると田辺三重松、中村研一、坂本直行、小堀進、高橋北修、大本靖、岩橋英遠、吉田清志、足立源一郎、横山操、相原求一朗の 11 人（4 人は複数点）。巻末に画家解説、作品解説がある。

121　日本の山
著　槇有恒ほか　編　高橋清見 ／ 毎日新聞社
1978 ／ 748 －ニ
縦 37㎝、横 26.5㎝、厚さ 3㎝の大判山岳写真集。道内は 23 枚、そのうち大雪山関係は志賀芳彦が空撮した「新雪の大雪山群」など 11 枚。大雪山を撮った写真家は志賀、平澤實、白籏史朗、オサ・コーゾー、川崎研。

122　日本百名山スケッチ紀行
若松直 ／ 日本文学館
2003 ／ 291 －ワ
電気技術者として勤め上げ、定年を機に深田久弥の「百名山」完登をめざしスケッチ紀行を始めた。大雪山は 2000 年 7 月、旭岳は前日が激しい雷雨、霧雨をついて登った山頂は風雨でスケッチが出来ない。十勝岳、トムラウシも悪天、スケッチは十勝岳山頂の石碑だけに終わった。車中泊しながら足かけ 4 年、読みごたえのある百名山紀行が出来上がった。

123　日本列島
濱谷浩 ／ 平凡社
1964 ／ 748 －ハ
著名な写真家・濱谷浩のカラー写真集である。全国 111 点の写真を収録、解説は地理学者・辻村太郎と撮影者・濱谷浩。火山、海、高山、河川、湖沼、湿原、石灰岩台地、樹氷、原生林、最高峰に分けて各写真画像を解説する。北海道は 26 点、うち大雪山 2 点（原生林）、十勝岳 3 点（火山と原生林）、すべて濱谷独自の視点からとらえた映像である。

124　花風景　北海道
梅沢俊 ／ 北海道大学図書刊行会
1988 ／ 472 －ウ
著者が道内各地で花の撮影をしているときに「足で見つけた私のお花畑」と言う群生を 1 冊にした。大雪山系は中岳から裾合平へ向かう途中のエゾノリュウキンカ、雪渓跡のエゾコザクラ、五色ケ原のホソバウルップソウやエゾノハクサンイオチゲ、高根ケ原のエゾハハコヨモギの群生など。

125　遙かなる山　Ⅰ～Ⅴ
閑良屋会 ／ BeeBooks、旅人工房
1993 ～ ／ 748 －ヒ
山岳写真家、内田良平の写真教室「ヒマラヤ・カメラトレッキング」に参加して意気投合

した仲間が 1979 年、閑良屋会を結成。結成 15 周年に写真記念誌Ⅰを出し、以後五年ごとに編集してⅤ号になる。深川市の会員、佐藤武史がⅠに「噴煙舞う旭岳」、Ⅱに「花咲く旭平」、Ⅲに「新設の十勝岳」、Ⅳに「雲棚引く旭岳」などを載せた。

126　日高の山名について　写真集『日高山脈』別刷

村上啓司 ／ 北海道撮影社
1979 ／ 291 －ム
村上啓司はアイヌ地名（山名）研究家である。大雪山の奥座敷といえばトムラウシ山が知られているが、トムラウシと付く山はトムラウシ川の源頭の日高にも 2 山あり、北日高は 1477㍍、中日高は 1278㍍、いずれもトムラウシ山である。村上はトムラウシの意味は不明という。ただ、トムラウシには各者各説がある。

127　ふるさとの富士 200 名山

写真・文　吉野晴朗 ／ 東方出版
1996 ／ 746 －ヨ
富士山と呼ばれる山を別名、本名含めて北から南へ、200 富士山を選んだ写真文集である。北海道は 13 富士、大雪山系では「美瑛富士」があり、白金温泉付近から撮影したシンボリックな写真が載っている。全国には別称、愛称ではないれっきとした「富士山」という山がいくつかあることも分かる。

128　北海道　花の散歩道

梅沢俊 ／ 北海タイムス社
1982 ／ 472 －ウ
第 1 編はイワイチョウからヨツバヒヨドリまで五十音順に 82 の花を「道ばたの顔なじみたち」として紹介。第 2 編「花の散歩道ガイド」の大雪山系は「黒岳と桂月岳」「赤岳と白雲岳」「沼の原と五色原」の 3 コースを高山植物を中心に紹介している。

129　北海道　花の散歩道　（改訂版　続）

梅沢俊 ／ 北海タイムス社
1992 ／ 472 －ウ
前著の不足を補う形で 2 年後に続編が編まれ、10 年後に改訂版が発行された。大雪山系は「富良野岳と上ホロカメットク山」「沼の平と裾合平」で、裾合分岐からロープウエー姿見駅までの間で見られるエゾオヤマリンドウ、ミヤマバイケイソウなどを紹介している。

130　北海道の森林

北海道 ／ 北海道
1999 ／ 653 －ホ
A1 判の厚手折り込み地図で、表紙は三国峠から望む大樹海と東大雪の山々の展望写真。大地図は国有林、大学演習林、道有林、一般民有林に色分けされ、国立公園、国定公園、道立自然公園区域も表示し、自然がひと目で分かる。JR、主要道路、市町村界、空港、道民の森、森林管理局・署、道有林管理センター・林務署なども記入している。

131　吉積長春遺作展　図録

編　真鍋光男ほか ／ 知床博物館協力会
1979 ／ 721 －ヨ
吉積は日本画家。旭川在住中に大町桂月一行と層雲峡から大雪山に登頂した。桂月の紀行文に吉積の名がある。彼はその後、斜里に移住したので図録には知床の山や海、斜里岳の絵が多い。だが圧巻は「大雪」（絹本彩色 6 曲押絵張）で、層雲峡や桂月一行の登山の情景が描かれ（1933 年制作）見ごたえがある。

文学書

小説、紀行文、エッセイ、詩集、歌集、句集、詞華集、アンソロジーなど

7 － 1 文学書（全てが大雪山）

132　神さまたちの遊ぶ庭

宮下奈都 ／ 光文社
2015 ／ 914 －ミ
作家、宮下奈都が夫の「トムラウシで暮らしたい」という唐突な誘いにのって三人の子どもたちの山村留学を一年間続けた。日記風のお母さん奮闘記録で「小説宝石」に連載。小学四年生の娘の友達から「しんとくちょうぐったり」（新得町屈足）で手紙が届くエピソードなど、カムイミンタラの大自然に抱かれた一家のわくわく、どきどきの毎日が面白い。

133　層雲峡温泉小唄

菊谷清蔵 ／ 菊谷清蔵
1928 ／ 767 －キ
「附大雪山層雲峡忠別渓案内」の副題がある。文庫版の小冊子だが、口絵写真も広告ページも多い。はしがきによると菊谷は黒岳石室の番人をふた夏務めており、その間のつれづれに作った唄、登山客の作った唄をまとめて本にしたという。表題の『層雲峡温泉小唄』もそのひとつで、いうならば歌詞集である。大雪山案内の表登山口は松山温泉、裏登山口は層雲峡温泉としている。

134　秘境層雲峡　仙境の思い出

原田豊 ／ 原田豊
1982 頃 ／ 289 －ハ
菓子職人の原田が入峡したのは 1927 年で、その目的は日本百景に入選した新名所、層雲峡の土産菓子を作ることであった。本書は入峡から 10 年ほどの出来事を、エピソード風に短歌を交えながら語る回想記。成田嘉助を案内人にして十勝岳まで縦走したことや遭難救助、怪談話もある。

7－2 文学書（部分が大雪山）

135　旭川・大雪　白い殺人者

梓林太郎 ／ 実業之日本社
2015 ／ 913 －ア
山岳ミステリーを得意とする作家の近作。東京の私立探偵、小仏太郎シリーズの 8 作目で、東京調布にある館の謎めいた人物の周辺から殺人事件が起きる。最初の殺人現場が層雲峡の流星の滝付近。探偵は旭川、上川、比布、美瑛、札幌などを調べ犯人に迫って行く。

136　オークブリッジ邸の笑わない貴婦人

太田紫織 ／ 新潮文庫
2015 ／ 913 －オ
著者はインターネット上の投稿コミュニティサイトで人気になった札幌出身の作家。19 世紀の英国文学を翻訳していた婦人が晩年、英国風お屋敷を東川町内に再現し、ヒロイン相川鈴佳がメイドとしてお仕えする奇想天外なストーリー。文中に「綺麗……」「今日は晴れているので、旭岳も見えますね。まだ雪を被っていますが、大雪山連峰の最高峰です」と大雪山が描かれる。19 世紀ファッションと英国料理をふんだんに織り込んだ物語が時々、東川町の現実に戻り、道の駅や郷土館などが登場する。大雪山と言うよりも東川町がかかわる物語として紹介する。

137　歌集『古代幻想』

豊田千恵 ／ みみずく書房
1982 ／ 911 －ト
古代幻想とは邪馬台国の女王・卑弥呼のこと。著者は旭川出身、札幌在住の薬剤師で歌人。山と旅を好み全国各地を歩いた。大雪山にも登り、たくさんの歌を詠んでいる。そのひとつ、小泉岳の構造土を「永久凍土の潜む小泉平に意志もちしごと石動きたり幾万年を」（永久凍土 = ツンドラ、小泉平 = タイラと読む）と詠んだ。著者は小泉秀雄の教え子だが、小泉が教え子や家族にも大雪山のことはいっさい語らなかったため、師の山とは知らずに登っていた。

138　北の山・南の山　研究・随筆・紀行

吉澤一郎 ／ 三省堂
1942 ／ 786 －ヨ
吉澤一郎（1903 ～ 1998 年）は日本山岳会副会長を務めた登山家。「真の登山者とは、山に登り、山の書を読み、常に山を考えている人」と序に書く。紀行編に「冬の愛山渓温泉」がある。昭和 15 年正月のスキー旅行だが、上野駅を発ってから安足間駅に着くまでが当時は一苦労、その先が深夜の馬そりで 3 時間、やっと温泉にたどり着く。天候に恵まれなかったがそれでも「北海道最高の山、旭岳に日帰りが楽だし」「硼酸（ほうさん）の様な軽い粉雪」「全くスキーのパラダイス」と永久に忘れ得ぬ印象を書いている。

139　桑原武夫紀行文集　1

桑原武夫 ／ 河出書房
1968 ／ 915 －ク
著者は仏文学者であり登山家。紀行文集は全 3 巻で、第 1 巻に「北海道断想」（『文学界』1951 年 9 月号）の 1 編がある。講演のため 29 年ぶり 2 度目の来道となり、札幌から北見、網走、阿寒、斜里、釧路などを巡ったときの断想で、辛口の批評もある。京大山岳部時代に初めて来道し、大雪山や阿寒の山に登っているが、そのころは登山が目的で都会を観察するという気もなかったという。

140　寂しき遊戯

著　大橋うめ、編　遠藤一郎 ／ 遠藤一郎
2009 ／ 911 －オ
『山恋う母娘』と対になる大橋うめの歌集で、両書を収める立派な箱付き、上製本、カバーは坂本直行の花の絵である。書名は歌の一首からとった。難解な個所には編者の注、解説があってわかりやすい。1,200 首の歌から 1 首だけあげておく、「旭岳登りしことも今思へば夢のごとくに思はゆるかも」。
（163 山恋う母娘　参照）

141　山岳遍歴

深田久彌 ／ 番町書房
1967 ／ 786 －フ
愉しき山行の章に「トムラウシ」がある。北大山岳部 3 人をシェルパ役に十勝川上流の野天温泉からトムラウシに登り、ヒサゴ池でテント泊して天人峡温泉へ下る。「柱状節理のすばらしい断崖に、美しい長い滝がかかっていた。羽衣の滝という。上から下へ落ちるまで、途中に滝壺が九つも数えられるような、長大な滝であった。おそらく日本一かもしれない」。天人峡温泉の宿に泥まみれの格好でゾロゾロ入ったとき、玄関先に居並んだ女中さんたちに「唖然とした表情があった」と結んでいる。

142　詩集　山

井田清 ／ 山と雪の会
1931 ／ 911 －イ
井田は初期の北大山岳部員として、大雪山や日高の山に意欲的な登山をした。1930 年、北大農学部畜産学科を卒業。詩集は東京・陵楓山房版となっているので、井田は東京に勤めていたものと思われる。武者小路実篤が序の詩を贈っている。詩のなかに山名があるわけではないが、その一節に“夕張　十勝　大雪　その峰々に若い情熱の灯をとぼして、深い歓喜にあたゝめられた俺ではあったが……”とある。

143　自然探訪（1）北海道・東北を歩く
監修　開高健／講談社
1982／462 ーシ
監修の作家、開高健は戦後の北海道緊急開拓を素材に「ロビンソンの末裔」を発表した。それを振り返って「取材のために私はその大雪山のふもとの開拓村へ、春、夏、秋、冬と、それぞれ一ケ月ずつ行って滞在したことがあります。そして、村の生活の厳しさに度肝をぬかれました」と書いている。ナチュラリスト、足田輝一が「大雪山の麓を歩く」をイラストや写真を織り交ぜながら書いている。元北海タイムス写真部長、河野利明や部員、貴戸敏勝らが写真協力している。

144　樹海　夢、森に降りつむ
高橋延清／世界文化社
1999／650 ータ
樹海といえば富士山や大雪山を連想するだろうが、ここでは東大北海道演習林のこと。演習林は十勝岳の南西方（富良野市）に位置し、最高峰は大麓山（1460㍍）、大きな意味で大雪山につながる本といえる。著者は元演習林長であり東大名誉教授、「どろ亀さん」の愛称で知られる。「林分施業法」を確立し、実践した学者。随所に挿入されたグラビア写真がすばらしい、撮影者は写真家・水越武。

145　画文草木帖
鶴田知也／東京書籍
1978／470 ーツ
著者は『コシャマイン記』で芥川賞を受賞、一時期、八雲町に在住したことがあり、『北方の道』など北海道を題材にした作品も多い。作家活動の一方で山野の草木を好んで写生した。国立公園内を歩いていて道路脇の刈り草のなかから 4 ～ 5 本の野草を拾ったことで監視員に捕まる。罰金は徴収されなかったが野草は没収され、厳重な補導を受けて釈放されたという。本書は写生図とそれにまつわる随筆を添えた画文集。

146　草木図誌
鶴田知也／東京書籍
1979／470 ーツ
『画文草木帖』の続編で、前書にはなかったカラー写生図 12 点がある。両書ともに北海道で馴染みの草木が多い。著者は戦中から戦後の一時期を北海道で暮らしたゆかりの作家である。

147　草木漫筆
横内斎／銀河書房
1985／472 ーヨ
横内斎は長野県四賀村（現・松本市）出身の植物学者。横内は昭和初期、松本に在住していた小泉秀雄に連れられて大雪山に登ったことがある。本書は横内の没後、子息 4 人が諸会誌に寄せた父・斎の植物紀行随筆を選んでまとめた。特に大雪山はないが各所に小泉秀雄の名が見える。

148　草木寸景
横内斎／「横内斎著作集」刊行会
1986／472 ーヨ
『草木漫筆』に続く 2 冊目の著作集で小泉秀雄の名が頻繁に見られる。「故小泉秀雄先生」「恩師小泉秀雄先生」「当時の松本女子師範学校教諭小泉秀雄先生」「恩師故小泉秀雄教授」などの表現から、横内がいかに小泉に心酔していたかがわかる。北海道に関わる記述もある。

149　大雪・層雲峡殺人事件
梓林太郎／光文社
1997／913 ーア
梓林太郎が書いた 70 冊目の本で、北アルプス南部山岳救助隊員、紫門一鬼が活躍するシリーズもの。層雲峡の小函付近で落石に見せかけた殺人事件が起こり、紫門が穂高で知り合った男が容疑者として浮かぶ。その後も、容疑者と旧知の山男が谷川岳で、さらに女性がガス中毒で次々と変死、紫門が真犯人を追う。

150　単独行
九糸郎／クライアント
1997／291 ーイ
九糸郎とは版画家・一原有徳の俳号である。本書は戦前の山・11 山、戦後の山・10 山に分けて、俳句、回想、版画、スケッチ、写真でつづる紀行集で、表題の通り、いずれも単独行だった。武利岳は戦前の 1938 年 3 月、スキーでニセイチャロマップ岳西の山稜を越え、3 日間で登頂した。オプタテシケ山登山は戦後の 1958 年 3 月、白金温泉から吹雪のなかを日帰りしている。

151　小さな頂【戦前の山】
一原有徳／不詳
不詳／291 ーイ
戦前に登った 29 山を俳句、回想、版画、スケッチ、写真でつづる 19 ページの小冊子である。ニセイカウシュペ山は 1941 年 4 月、小樽スキー連盟の仲間 4 人で登頂した。

152　泥火山
田中長三郎／芸林発行所
1958／911 ータ
田中長三郎は名寄の弁護士であり歌人。本書は布装、箱入の特装愛蔵本の立派な歌集である。登山愛好家だけに山や自然を詠んだ歌も多く、大雪山には 9 回も登って歌を詠んでいる。羊蹄山、甲斐駒、伊吹、富士の歌もある。名寄に 30 余年在住したが故郷の三重県に転居、古希を期して念願の歌集を刊行した。田中は名寄におもむき歌

友らの出版祝賀会に出席して名古屋への帰途、搭乗した全日空機が利島沖で墜落、全員死亡、結果的に遺稿歌集となってしまった。大雪山登山を詠んだ歌のなかから1首だけ挙げておく。1937年8月、2人の子を連れて登った、「晴れてをらば高根にかげもうつるべし底べ砂すく姿見の池」。

153　登高者

著　大島亮吉、編　安川茂雄／三笠書房
1965／786－オ
「平原の上に聳ゆる山」の一編を収録する。1924年、西ヌプカウシヌプリに登った時の紀行で、『山とスキー』41号に掲載された一文である。慶大山岳部部報『登高者』に所載の「北海道の夏の山」にも西ヌプカウシヌプリは、登山行程のなかで記述されている。

154　残された山　杖の頂

一原有徳／クライアント
2000／911－イ
著者は登山家であり版画家、俳人（号・九糸郎）としても著名である。本書は版画、スケッチ、写真、山の仲間たち、俳句で表現する山岳誌で、大雪山系は西クマネシリ岳、ヌタクカムウシュペ山（桂月岳、熊ヶ岳）、美瑛岳、旭岳（金庫岩）、平山がある。

155　歌集『米寿碌碌』

遠藤一郎／遠藤一郎
2012／911－エ
著者は登山家、80歳を過ぎて短歌を始め、小さな歌集を出した。歌は折々の心境を詠むもので日記のようだが、やはり登山や山に関わる歌が多く「仰ぎ見る山」と「回想の山」がある。大雪山の歌もまた多く、冒頭と掉尾を飾っている。

156　ぺたぬぅ　９号

編　ぺたぬぅ発行委員会／ぺたぬぅ発行委員会
2008／905－ペ
旭川の文芸同人誌　『ぺたぬぅ』9号に、「旭川実業界の巨星　荒井初一の生涯」（今井勝人）が載った。実業家であり、層雲峡の開発に大きく貢献した荒井初一の人物伝である。筆者・今井勝人は元高校教諭、古文書研究家でもある。なお同号、冒頭の詩「惚れろってことは莫迦だってこと」（じゅうきち）は、大雪山そのものを詠んだ詩である。

157　北海道・東北ふるさと大歳時記

編　角川文化振興財団（加藤楸邨）／角川書店
1992／911－フ
布装箱入の豪華本、全7巻のうちの第1巻である。写真も豊富、大雪山、羽衣の滝、十勝岳、美瑛の丘もある。季語編の蝶（大雪の蝶）、登山、夏の山の項があり、大雪山系の句が見られる。また地名編には「旭川・上川・富良野周辺」があり、さらに大雪山、富良野の項があって、大雪山、十勝岳の句百数十句がある。それらのうちの1句「神神の座のはるかなるケルン積む」（深谷雄大）。

158　北海道の碑

東延江／北海道新聞社
1989／910－ア
北海道の文学碑巡り記である。大雪山国立公園地域の文学碑は層雲峡の大町桂月と野口雨情、十勝岳中腹に道路をふさぐように九条武子の歌碑が建っている。もう一つ大雪山にゆかりの碑として愛別町安足間神社境内の百田宗治の詩碑「アンタロマに来よという　大雪山を見に来よという　埋もれに来よという」を紹介している。

159　北海道の山と雪

加納一郎／教育社
1986／291－カ
『加納一郎著作集』全5巻のなかの第3巻が本書で、「北海道のスキーと山岳」「氷と雪」「随筆―北の国から」の3部構成、全編にわたって大雪山系の記述が見られる。加納は極地研究家、北海道の山とスキーの先駆者である。

160　北海道文学散歩　道北編

編　木原直彦／立風書房
1983／910－キ
「大雪山・層雲峡」の項があり、この地に関わる作家、詩人とその作品をたどる。百田宗治、真崎晋吾（菊池一雄）、佐藤喜一、開高健、宮之内一平、八匠衆一、大町桂月、太田龍太郎、塩谷忠、小泉秀雄、更科源蔵、野口雨情、小熊秀雄、与謝野寛・晶子、火野葦平、城山三郎、瓜生卓造、船山馨、原田康子、木野工、三好文夫、渡辺淳一らを紹介している。

161　明治の山旅

武田久吉／創文社
1971／291－タ
著者は明治16（1883）年生まれの植物学者であり、日本山岳会創設者の1人である。本書は明治時代に各地の山野を踏破した自伝的紀行随筆で、後半の「北海道内の採集旅行」は、明治42（1909）年の旅日記。旭川に宿泊後、釧路に向かう車窓から大雪山を眺めたらしい。「東方には大雪山彙の山々が雄然と扣【ひか】え、忠別川を渡って東南に向かえば、オニシモツケは花をつけ、林地にはカシワが多い。辺別に近づくに従い、遥かにトムラウシュ【ママ】を望む」と書いている。

162　山愛の記
村井米子 ／ 読売新聞社
1976 ／ 914 ーム
著者 60 年に及ぶ山旅と自然保護へのかかわり、人とのふれあいを描いたエッセイ集。大雪山関係は、「十勝岳のある正月」（1929 年）、「花と雪田の大雪山」（1954 年）の 2 編で、いずれも回想記である。

163　山恋う母娘
編著　遠藤一郎 ／ 遠藤一郎
2009 ／ 289 ーオ
「母娘」とは編著者の義母・大橋うめ、妻・遠藤淑子のことで、本書は母娘の伝記であり、追悼集、遺稿集でもある。大雪山登山は 1936 年 8 月、うめ、淑子と弟・秀郎の 3 人が案内人を頼んで層雲峡から入山、黒岳石室泊、旭岳に縦走し松山温泉泊という 2 泊 3 日の山旅であった。登山記は函館中学 1 年の秀郎が書いている。うめはその後、回想の歌を詠んだ。1944 年、うめ、淑子の 2 人は、再び前回と同じく大雪山を縦走、案内人も同じ成田嘉助であった。義母の詩歌、随想、淑子の文も収録する。
（140 寂しき遊戯　参照）

164　山旅歌集
渡辺公平ほか ／ 社会思想社
1966 ／ 767 ーヤ
北海道の山の歌の定番は「山の四季」（北大山岳部歌）といわれる。4 番まであり、四季それぞれ北海道の山を詠みこんでいるが、3 番の秋に「山は紅葉にいろどられ ／ 頂高く空澄みぬ ／ 新雪輝く山々は ／ いずれも親しき友達よ ／ いざ行こうわが友よ ／ ニセイカウシュペにトムラウシに ／ 北の山の沢の焚火に語ろうよ」と、大雪山系の山を詠んでいる。ほかに十勝岳のスケッチに寄せて春スキーの楽しさを語り、石北峠では写真で大雪山の展望のすばらしさを説く。

165　山と旅　大正・昭和編
編　近藤信行 ／ 岩波書店
2003 ／ 786 ーヤ
作家、学者、登山家ら多彩な人物の山旅紀行を収録した岩波文庫の一冊。なかに大町桂月「層雲峡から大雪山へ」がある。解説者・近藤は、作家、紀行文家のなかでも晩年まで歩き続けたのは桂月であり、文体は美文調だが、近代の山の文学に独特の位置を占めると説く。

166　山とともに在り
山川力 ／ えぞまつ豆本の会
1981 ／ 914 ーヤ
豆本には並製本、上製本、特装本など、判型も含めていろいろあるが、本書は「えぞまつ豆本」第 13 巻、限定 500 部の上製本である。17 編の山随筆のうち大雪山関係は「ニセイカウシュペ」「正しくはニセイカウシペ」「大雪山をはしごに乗って下山した」の 3 編。表紙と扉の裏に香川軍男のいも版がある。

167　山のあなたの空遠く
西信博 ／ クライアント
1994 ／ 914 ーニ
著者は精神科医で、北大山岳部出身の登山家でもある。書名はカール・ブッセの詩から採った。一原有徳の版画を入れた上製本、山の写真もある。『北海道医報』そのほか医学関連誌に掲載したエッセイ、コラム、小論文を 1 冊に収録した。4 部構成の第 1 部が山の文で、中学 1 年のとき、父に連れられて層雲峡から黒岳に登ったのが登山の始まりだという。

168　山のあなたの空遠く　Ⅱ
西信博 ／ クライアント
2000 ／ 914 ーニ
装本は前著と同じだが本書は 3 部構成になっている。第 1 部は同じく山、北の山の先駆者・伊藤秀五郎、秀岳荘の金井五郎らにふれ、海外の観光の山もある。全編を通じて山に関する記事が各所に見られるのは登山家であるゆえんであろう。

169　山のあなたの空遠くⅢ
西信博 ／ オー・プラン
2008 ／ 914 ーニ
装本は前 2 著と同じでも本書は 4 部構成になった。第 1 部は山。海外の山のほか「エゾヒグマの DNA」「北海道の硫黄鉱山」など。第 2 部は、「山で会った花」として山の花の写真を集め、大雪山で撮った花が多い。「中谷宇吉郎と武見太郎」も興味深い記事で、日本医師会会長として権力を振るった武見は、中谷の主治医であった。

170　流域をたどる歴史　第一巻
編　豊田武ほか ／ ぎょうせい
1979 ／ 291 ーリ
河口から源流へ、流域という視点から語る文化史、風土記というべきシリーズで全 7 巻、布装箱入の上製本。そのうちの北海道編は石狩川と十勝川を取りあげている。源流部の項目を挙げると「神居古潭―伝説と遺跡」（内田実）、「層雲峡と源流」（君尹彦）、「大雪山国立公園」（内田実）、十勝川では「十勝日誌に現れたアイヌ」（高倉新一郎）、「十勝のダム建設」（棚瀬善一）、「伝説の古戦場」（棚瀬善一）など。

171　私の中の深田久弥 「日本百名山」以降の北の山紀行
滝本幸夫 ／ 柏艪舎
2015 ／ 291 ータ
深田久弥の「日本百名山」にニペソツ山は入っていない。それならばと、著者が結成した帯広エーデルワイス山岳会五周年記念

事業に深田をニペソツへ招いたのが初めての出会い。深田に心酔する著者の登山紀行でありながら深田の道内登山歴も渾然一体となって分かる一冊。

172　私のラバさん　酋長の娘
安細和彦 ／ 北方ジャーナル（2016 年 1 月号から連載）
2016 ／ 913 －ア
プロローグに「大雪山の麓に広がる稲作地帯であり、北の風土に見合った木工家具や手工芸品を生産している ” ある町 ”」とあるが、モデルになったのは東川町である。著者は元外交官で、2015 年春、マーシャル諸島共和国日本大使館勤務を最後に退官。「マーシャルの対日観光促進を考える会」を立ち上げ、本作品の元となる映画脚本を作り、さらに小説化した。大雪山麓の ” ある町 ” に暮らす祖母と孫がマーシャル諸島の慰霊巡拝団に参加して、運命的な出会いを体験をする物語。

紙誌、部会報
新聞、雑誌、部報、会報、機関誌などの定期刊行物

8 － 1 新聞

173　懐郷
福田和民ら写真集編集委員会 ／ 大須賀羊一・大雪山山の村村長
1998 ／ 786 －カ
愛山渓新聞社・大雪山山の村通算 40 周年記念誌。愛山渓温泉を根城に大雪山登山を楽しむ仲間たちの一人、三好文夫が昭和 32 年 12 月、謄写版を背負ってきて愛山渓新聞を刷り始め、10 周年のころに仲間が増えて新聞社には入りきれないことから「大雪山山の村」として“独立”、村長、議長を選出していた。それから 40 周年を迎えた記念誌で、名誉村民、歴代村長、議長の紹介や活動を振り返る写真、新聞記事、村民の横顔、物故者エピソードなど。

8 － 2 雑誌

174　旭川春秋
編　桧山修 ／ 旭川春秋
1983 ／ 291 －ア
旭川の月刊タウン誌『旭川春秋』1983 年 1 月号には広告欄も含めて大雪山の写真がたくさんある。「旭川春秋ホット情報」に 3 編の大雪山関連記事がある。当時の旭川周辺の状況がわかり、きわめて興味深い。

175　岳人　№817
編　辰野勇 ／ ネイチュアエンタープライズ
2015 ／ 786 －ガ
2015 年 7 月号で「山岳トレイルを行く」を特集。この中で、東川町エコツーリズム協議会職員、大塚友記憲が「大雪山旭岳から十勝岳へ」を担当。花と動物たちが迎えてくれる神々の遊ぶ庭（カムイミンタラ）六泊七日の縦走を写真と文で紹介した。

176　Coyote　№57
編　新井敏記 ／ スイッチ・パブリッシング
2015 ／ 290 －コ
2015 年 11 月発行の 57 号に「自然を求めて　大雪山国立公園・旭岳、トムラウシ」が載った。文と写真は赤坂友昭。旭岳日帰りトレッキング、坂本直行に魅かれたトムラウシ山行、ネイチャーガイド・中川伸也に聞く大雪山の魅力、旭岳ビジターセンターや大雪旭岳源水公園の紹介など。

177　ザ・ラストフロンティア
スキージャーナル ／ スキージャーナル
2016 ／ 784 －ザ
月刊スキージャーナル 2016 年 1 月号の特別付録「The　Last　Frontier」に東川町で SEA（スポーツ国際交流員）として 2014 年から一年間活躍したノルウェー人、トリグバ・ベンディクセン・マルクセットが挑んだグランドトラバース（大縦走）を特集した。彼は 2015 年 4 月 28 日、十勝岳連峰から大雪山旭岳麓までスキーで踏破した。2 時 20 分十勝岳温泉から入って十勝岳、美瑛岳、オプタテシケ、トムラウシ、ヒサゴ沼、忠別岳を経て旭岳山頂を極めたのが 19 時、一気に下って旭岳温泉がゴール。67.7㎞、トータル標高差 5,300m の冬山を 17 時間で滑りきった。この記録は破られることはないだろう。スキー王国ノルウエーの若者が大雪山で伝説となった。

178　JR 北海道車内誌　THE JR Hokkaido 318 号
編　幅口堅二 ／ 北海道ジェイ・アール・エージェンシー
2014 ／ 051 －ジ
2014 年 8 月号に「神々の庭に遊んだ明治男子―大雪山探検時代と小泉秀雄」（筆者・北室かず子）の特集記事がある。今昔の写真も多く、大雪山探検史と小泉秀雄を紹介する。

179　週刊・日本百名山　全 50 冊
編　郡司武 ／ 朝日新聞社
2001 ／ 291 －シ
写真と解説、案内、紀行でつづる百名山である。北海道は第 32 号「利尻岳・阿寒岳」、第 33 号「大雪山・トムラウシ・十勝岳」、第 34 号「斜里岳・羅臼岳」、第 35 号「後志羊蹄山・幌尻岳」がある。

180　SKI&SKI　報知グラフ別冊 '75 ①
編　黒田隆二 ／ 報知新聞社
1974 ／ 784 －ス
巻頭グラビに「十勝－オプタテシケ・ビッグチャレンジツアー」が 17 ページにわたって組まれ、最初の折り畳み大判の一枚はオプタテシケ山斜面を一気に滑る前田光彦、斜面の光と影のコントラストが美しい。他に美瑛富士の夜明けの滑降、美瑛の岩峰の間を抜けるシーンなど感動的な大雪山山岳スキーで占めている。撮影は木村之与。望岳台にあった十勝岳銀座コースで行われた第 10 回サンフラワーズ・スキー大会が 5 ページを使って紹介され、名誉大会長、三笠宮寛仁殿下のスラローム連続写真もある。スキー場紹介では大雪山旭岳スキー場、大雪山黒岳スキー場など。

181　SKI 特集　報知グラフ '74 第 2 集
編　八巻明彦 ／ 報知新聞社
1973 ／ 784 －ス
1970 年代がスキー全盛だったのではないかと思わせる特集号で、モデルのスキーヤーとカメラマンが組んだ写真を満載している。十勝岳滑降はプロスキーヤー、前田光彦（現・カムイスキーリンクス支配人）の鮮やかな滑りを写真家、大塚大がとらえた 4 枚。旭岳で行われた第 1 回プロスキー・トーナメントのカラー写真 6 枚もあり、写真説明は「大雪山をバックに開脚ビーバー」「空中散歩」など。

182　skier '75　別冊山と渓谷
編　菅井康司 ／ 山と渓谷社
1974 ／ 784 －ス
特集「北海道－比布岳の粉雪を滑る」が 8 ページにわたって載った。プロスキーヤー、前田光彦と写真家、佐藤憲悦がピウケナイ川源頭に約 1 週間キャンプして晴天を待ち、厳冬の比布岳（2206m）を山頂から滑った。圧倒的な雪山の広がりの点景となってシュプールを刻む前田、バックカントリーと言う表現が無かった 40 年も前に大雪山を縦横に滑っていた。

183　大雪山系の詩人・作家群（『月刊道北』連載）
佐藤喜一 ／ 月刊道北
1982 ～ 1984 ／ 910 －ダ
稚内市を拠点にする月刊誌『月刊道北』に旭川の郷土史家、佐藤喜一が「大雪山系の詩人、作家群」というタイトルで詩人編を 7 編、作家編を 12 編に亘って昭和 56 年 9 月号から 19 回連載した。旭川で活躍した詩人、作家が大半を占めるもののタイトルを「大雪山系の…」としたところに著者の思い入れがうかがえる。詩人、鈴木政輝らが発刊した「大雪山系」と言う詩誌が創刊号のみで終わってしまったこと、あるいは、愛山渓温泉とその入り口に当たる愛別町安足間地区で戦後、目覚ましい文芸活動が起こったことに由来するのかもしれない。徳富蘆花、野口雨情、井上靖、三浦綾子ら良く知られた作家から埋もれた詩人まで丹念に拾い、120 余人をも紹介している。大雪山を詩歌、小説の題材にした数多くの文学が詩人、作家群を通して読み取れる。

184　大雪山の父・小泉秀雄の生涯
清水敏一 ／『北海公論』6 月号
1983 ／ 289 －コ
大雪山小泉岳に名を残す小泉秀雄の生涯と業績を略記した 1 編である。当時、健在であった秀雄夫人・ミサオの写真（東京都小金井市の小泉邸・二階の客間）も掲示する。

185　天人峡三十三曲がり附近のハゴロモホトトギスの行方（『北方林業』掲載）
新田紀敏 ／ 社団法人北方林業会
2006 ／ 650 －ホ
上川支庁林務課、新田紀敏が「天人峡三十三曲がり附近のハゴロモホトトギの行方」を『北方林業』2006 年 12 月号に寄稿している。そもそもは、同誌表紙の写真と文を担当している鮫島惇一郎が 2005 年 11 月号に天人峡の柱状節理の写真を載せ、黄色い花を付けるハゴロモホトトギスは幻となってしまったのでしょうかと書いたことから、新田が地元にいる責任と感じて調査し直した。その結果、三十三曲がり登山道付近に 712 株、羽衣の滝へ向かう遊歩道付近に 148 株、羽衣橋上流左岸急斜面に 100 株以上を確認、「幻となっていなかったと結論したい」と結んでいる。

186　十勝岳硫黄山の噴火原因と現状（地学雑誌　451 号別刷）
田中館秀三 ／ 東京地学協会
1926 ／ 453 －タ
田中館は『十勝岳爆発概報』（大雪山調査会）を発表しているが、同時期に『地学雑誌』にも寄稿している。10 ページの別刷で、6 月 24 日稿、7 月 3 日受理とある。同年 9 月号に掲載された。

187　ハイカー
編　山と渓谷社 ／ 山と渓谷社
1967 ／ 786 －ハ
月刊雑誌『ハイカー』1967 年 7 月号は、「ワイド特集・北海道」を載せた。大雪山の記事も多く、写真（村本輝夫、三木慶介）、紹介案内記を俵浩三、大田正豁、一原有徳らが書いている。

188　ビスターリ　5 号
ビスターリ編集部 ／ 山と渓谷社
1990 ／ 051 －ビ
ビスターリとはネパール語で「ゆっくり、ゆるやかに」という意味。中高年のための

楽しくゆたかな山歩き季刊誌で、文・渡辺一枝、写真・梅沢俊「大雪山花紀行」が載った。『ビスターリ』は 1989 年に創刊、1995 年 27 号で休刊した。

189　雑誌『風土』創刊号
編　伊藤徹秀 ／ 北創社
1967 ／ 051 －フ
登山、旅、自然賛歌を謳歌する雑誌。編者・伊藤自身も登山をするので、S 岳（札幌岳）登山記がある。主要スキー場の案内では十勝岳、富良野岳の山スキー、十勝岳マンモススキー場（白金温泉）を紹介している。編集後記に執筆者の紹介と、社員募集（編集部員、営業部員各々若干名）があるが、その後の発行状況は不明。

190　平原の手帖　13 号
編　千葉章仁 ／ 平原書房
1983 ／ 051 －ヘ
特集「十勝の伝説」に大雪山や然別などにまつわる伝説の数編を寄せている。編者は登山愛好家で、編集追録にトムラウシ山とウペペサンケ山に登ったことをコメントしている。

191　北海道の山
清水一行 ／ 清水孔版印刷所
1959 ～ 1962 ／ 051 －ホ
北海道初の商業的山岳雑誌であったが 16 号をもって廃刊となる。その間、発行所はたびたび名称変更されているが、いずれも同じなので第 1 号の名称とした。全号の大半にわたって大雪山系の記事がある。4 号は特集「中央高地」、9 号は特集「夏の中央高地案内」「一月の十勝岳遭難救助報告」がある。

192　北方風物　第一輯
編　更科源蔵 ／ 北日本社
1946 ～ 1947 ／ 051 －ホ
月刊随筆雑誌全 15 冊の合本。敗戦直後であり紙質も印刷もよくないが、挿画を配した瀟洒な雑誌である。執筆者は各界著名人が名を連ねる。北海道の宮部金吾、中谷宇吉郎、坂本直行、館脇操らのほか、柳田国男、高村光太郎、牧野富太郎、斎藤茂吉、土井晩翠など多彩。登山家として知られる川田楨が大雪山に触れている。

193　POPEYE　第 38 巻第 2 号
編　木下孝浩 ／ マガジンハウス
2013 ／ 051 －ポ
2013 年 2 月号の表紙に「シティボーイのためのスキー特集。ポートランド、旭岳、立山からスキーのたしなみまで」とある。この中で「スキーが楽しめる町。旭岳へつながる最後の町、東川町」を特集。カラー写真とイラスト、キャプションのような簡単明瞭な短文で人、味、アウトドア、アートなど東川町の魅力をつづっている。

194　山と渓谷　総索引 1 － 379 号
能勢信二、丹羽素雄 ／ 山と渓谷社
1970 ／ 051 －ヤ
山岳専門誌「山と渓谷」の昭和 5 年創刊から 40 年を経た 379 号までの掲載総索引。「案内・記録・紀行」編は地域別になっていて「北海道地方」を見ると大雪山の登山、スキーなどの寄稿がひと目で分かる。他に「遭難」「連載記事」「随筆・その他」など 16 の項目別になっている。

195　月刊　わが北海道　3 － 8
編　河原昌春 ／ 東京文化センター北海道 PR センター
1973 ／ 051 －ワ
3 － 8 は第 3 巻第 8 号の意。本号で旭川を特集、「鬼気迫る大雪の自然―縦貫道路予定のコース登破記―」が写真と地図を含めて 9 ページの大きな記述がある。他に旧旭川中学 OB の座談会に層雲峡や大雪山の話題がある。「激動の五年―旭中の思い出」（木野工）もあるが大雪山に触れていない。

8 － 3 部会報

196　ある高校山岳部小史
編　福島正秋 ／ 福島律子
1999 ／ 786 －ア
ある高校とは、岩見沢西高等学校のことで、教諭の福島正秋は山岳部顧問として指導し登山にも引率した。福島は 1950 年から 81 年までの山岳部の活動について部報をもとに編集、自費出版しようとしていたが 81 歳で急逝。山岳部 OB（土佐功）たちが引き継いで出版した。坂本直行「春の十勝岳」の絵が表紙を飾る。大雪山系の登山記録や写真も満載である。福島の名は『北大山岳部々報』5 号、6 号に見える。

197　アルピニスト　第 8 号
編　岡本陸人 ／ あかね書房
1969 ／ 051 －ア
あかね書房は一時期、山岳図書を盛んに出版した。「アルピニスト」は同書房の PR 誌であり、第 8 号で大島亮吉を特集、加納一郎が「大島と板倉」という小文を書いている。加納は『山とスキー』を編集、大島、板倉ともによく送稿してくれた。この二人が申しあわせたように、立山の雪、穂高の岩に遭難、相ついで早逝したことは、かえすがえすも、くちおしいかぎり…と追懐する。加納、大島、板倉ともに北海道ゆかりの登山家である。あかね書房は『大島亮吉全集』全 5 巻を発行している。

198　生きる　1988 年 1 月号
㈱ホツマ ／ 安田火災海上保険㈱
1998 ／ 051 －イ
安田火災の PR 誌（20㌢ × 27㌢）全グラビア紙カラー写真 72 ページの豪華版。特集

が【山】だけに全ページ山一色、取り上げた山もテーマも執筆者も実に多彩で、エベレストもあれば、マッターホルン、アンデス、富士山、槍ヶ岳もある。文・玉手英夫、写真・岩合光昭の「ケモノだって平地に住みたいんだ」は、ナキウサギもウスバキチョウもダイセツタカネヒカゲも、氷河期が過ぎてからの気候の温暖化に伴い、いきどころを失って、大雪山のような寒冷な高山地帯に生き残ったのであり、日本アルプスのライチョウも同じく氷河時代の生き残りであるという。

199　薄雪草　創立 10 周年記念

編　高澤光雄ほか ／ 札幌山の会
1978 ／ 786 －ウ
札幌山の会は 1968 年創立、記念登山は富良野岳であった。10 年の歩みのなかで、会の山行、個人山行、エッセイを含めて、大雪山、十勝連峰の記録が多い。

200　薄雪草Ⅱ　創立 20 周年記念

編　秋元笠男ほか ／ 札幌山の会
1988 ／ 786 －ウ
記念誌の構成は 10 周年記念誌に従ったとある。社会人山岳会記念誌としては珍しい箱入り本。大雪山ではバリエーションルートを含む 10 コースからの集中登山。ニセイカウシュッペ、8 ルートよりの集中登山、そのほか個人山行、エッセイに大雪山の記録がある。海外登山の記録もある。

201　えぞ　1

編　渡辺文仁ほか ／ えぞ山岳会
1969 ／ 786 －エ
えぞ山岳会（札幌）は 1962 年創立。本書は 1962 ～ 1964 年の活動実績をまとめたグラビア写真入り、タイプ印刷の創刊年報である。記録集に旭岳、クワウンナイ沢、ニペソツ山の報告あり。山行録に大雪山系の登山が多くみられる。発行の遅れは原稿の集まらないこと、校正に煩わされること、休日は山へ行きたいことなどが理由である。

202　えぞ山岳会三十周年記念誌

編　今村朋信ほか ／ えぞ山岳会
1993 ／ 786 －エ
時代の進化とともに会報も変化する。海外登山の記録も増した。マッターホルン北壁もあれば大雪山花見山行もある。山岳写真、山のスケッチもある。30 年の歴史のなかには病死、遭難死も 14 人を数える。立派な会報だが今後は、社会人山岳会としては作成が難しい時代になった。

203　大町桂月翁を想う（『寒帯林』掲載）

塩谷忠 ／ 旭川営林局
1951 － 1952 ／ 289 －オ
塩谷は大町桂月を塩谷温泉（現・層雲峡温泉）に勧誘し、層雲峡探勝の後、桂月らと共に黒岳沢を遡行して黒岳に登った。桂月一行は山頂で塩谷と別れ、さらに旭岳まで縦走した。塩谷はこの初めての大雪山縦走を成功させた立役者である。それだけに桂月への追慕の念はひとしおのものがあり、旭川営林局発行の機関誌『寒帯林』に寄稿、14 回にわたって桂月翁の縦走経緯と思いを連綿とつづる。ほかに「故大町桂月先生の霊に告ぐ」（1954 年）もある。

204　開校五十年史　北海道旭川東高等学校

編　記念事業協賛会 ／ 北海道旭川東高等学校
1955 ／ 376 －ホ
大雪山を望む同校歴史は大雪山とともにある。校歌、大雪山探険登山あり。1911 年（明治 44 年）東宮殿下（のちの大正天皇）行啓時に、小泉秀雄教諭が同年旭岳で採取した高山植物の腊葉 10 数枚を展示したこと。1913 年、小泉秀雄の主唱で中庭に学校植物園を設置、大雪山と石狩川を表徴する花壇、有毒植物、繊維植物、食用植物、園芸植物、高山植物などを植え付けた。1922 年、摂政宮（のちの昭和天皇）台臨時には、高山植物、小泉制作の大雪山模型を出品したこと。この大雪山模型は、その前の 1918 年、北海道大博覧会に出品、銀杯（2 等賞）を得たものである。そのほか山岳部の活動など、大雪山に関わる記事は多い。

205　会報　創立二〇周年記念特別号

編　安田成男 ／ 札幌山岳会
1973 ／ 786 －サ
札幌山岳会は先鋭的な登山活動を続けてきた。本書は 6 部構成で 20 年の足跡をたどった記録である。なかでも 1967 年のマッキンリーは、道内初の社会人山岳会による海外遠征であり、詳細な報告がある。中央高地、大雪山系の登山も多く収録されている。『山と渓谷』誌会報賞を受賞。

206　学友会雑誌　第 1 号

編　上川中学校学友会 ／ 上川中学校学友会
1907 ／ 376 －ガ
中に 2 編の大雪山旭岳の登山もあり第 5 学年・小林安序が「山と水」、第 4 学年・新里文八郎が「大雪山探険旅行記」を書いた。1907 年 7 月の登山であり、大雪山初期の登山や学校登山の史料としても評価されている。

207　学友会雑誌　第 13 号

編　旭川中学校学友会 ／ 旭川中学校学友会
1918 ／ 376 －ガ
特別会員、小泉秀雄が 「我が旭中の大雪山」を寄稿した号として知られている。小泉が大雪山調査研究概要を記述しており、表現は学術論文的である。参考文献として『山岳』に寄稿した「北海道中央高地の地学的研究」などの自著を挙げている。

208　京都山岳　六十周年記念号

編　京都山岳会 ／ 京都山岳会
1985 ／ 786 －キ
松浦勇次「登渉跡誌」に山歴 50 余年の登山一覧表があり、1979 年に松浦岳、北海岳、小泉岳、北鎮岳、中岳、間宮岳、旭岳、荒井岳、松田岳、北海岳、黒岳を 2 泊 3 日で縦走した。同年、300 山を記念して伊勢の有地山にも登頂。山名はアルジヤマだが「渓々斎」の号を持つ書家でもある松浦は、無理にユウジサンと読むことにしたという凝りようである。ほかに「北の山と人と」（清水敏一）があり、大雪山にある人名のつく山について、その人物の略歴と業績を紹介している。小泉秀雄（小泉岳）については、生没年その他調査中とある。

209　熊笹　11 号

編　井内俊之 ／ 札幌西高山岳部
1969 ／ 051 －ク
札幌西高の前身は札幌二中であり、部報『ヌタツク』があるが、部報名を『熊笹』に変えて、手作り感あふれるささやかな部報にした。寸法は縦 20㌢、横 18㌢の変形袋とじ。部員が手分けをしてガリ切り、謄写印刷である。写真そのものを貼付しているのが微笑ましい。『東大雪遠征報告』は十勝三股から石狩岳、五色ヶ原、忠別岳、高原温泉の 4 日コース、部員 7 人、教諭 2 人同行。大雪山へ挑むのは当時としては遠征であり、OB 会員の住所、大学、勤務先まで明記しているところにも時代がうかがえる。

210　熊笹　12 号

編　富田祐志 ／ 札幌西高山岳部
1970 ／ 051 －ク
前 11 号と同じ作りだが寸法は縦 19㌢横 18㌢。奥付に札西山岳部所属印刷所、山岳部著作権問題審議会などの遊び心が見られる。部員 7 人に教諭 2 人が同行した「大雪山系遠征報告書」があり、天人峡クワウンナイからトムラウシ、白雲岳、黒岳、層雲峡のコースを 5 日間で縦走した。

211　熊笹　13 号

編　佐藤康幸 ／ 札幌西高山岳部
1971 ／ 051 －ク
寸法は縦 18㌢横 18㌢の正方形である。チョウノスケソウの着色スケッチ画が入っている。「華麗なる大雪遠征」はトムラウシ温泉からトムラウシ、忠別岳、高原温泉に下山、部員 3 人、教諭 1 人という少ない山行であった。なお『熊笹』は 1953 年に創刊。山岳部は現在も活動している。

212　群落　旭川西高等学校生物部創部 60 周年記念誌

編　旭川生物同好会 ／ 旭川生物同好会
2010 ／ 376 －グ
旭川西高生物部 60 年の活動をまとめたもので、写真も多く活発な行動実績が一望できる。第 1 期 1950 年の調査地は大雪山黒岳、「高度・気圧が人体に及ぼす影響（高山病の研究）」であった。それには層雲峡日赤分院の医師・大山正信が江口健二ら部員とともに登山、検査実験をしている。調査地は大雪山のほか、全道各地に及び、その成果によって数々の表彰を受けている。

213　慶応義塾山岳会北海道旅行（大登会叢書第 3 号）

上野三郎 ／ 大登会
1975 ／ 786 －ケ
大登会は慶大山岳部 OB で結成している。上野らの北海道旅行は 1919 年 8 月、羊蹄山、雌阿寒岳、大雪山に登頂した。「大雪火山群登行」の 1 編に詳しい。案内役は成田嘉助。最高峰北鎮岳、近藤岳などの記述が見られる。大島亮吉らのトムラウシ、石狩岳登頂がその翌年であることを思うと、慶大山岳部としては初の北海道行と思われる。

214　國立公園　通巻 729 号

編　熊谷洋一 ／ 自然公園財団
2014 ／ 629 －コ
国立公園 80 周年記念特集Ⅱで、東川町駐在初代レンジャー、二橋愛次郎が『大雪山国立公園「カムイミンタラ」と呼ばれる地』を寄稿した。二橋が駐在したのは昭和 47 年から 52 年で、大雪山縦貫道が論議を呼び、環境庁長官が着工に『待った』をかけた。ごみ持ち帰りから「クリーン大雪運運動」も始まった。トイレ問題と登山道の荒廃への対応にもふれ、永遠のカムイミンタラ（神々の庭 = 天上の神苑）であるように、と願っている。

215　樹海の中の赤い屋根

編　白樺荘同窓会事務局 ／ 白樺荘同窓会事務局
1998 ／ 786 －ジ
「1997 白樺荘同窓会記念誌」の副題が付けられている。1997 年 7 月、旭岳温泉の白樺荘で開催された大雪山愛好家たちの集い（ミニコンサート、宴会、旭岳登山など）の記録。長年にわたる大雪山を通じた山仲間たちの強い思いが伝わってくる。

216　聳嶺　第五号
編　坂井久光／一等三角点研究会
1978／786 ーシ
一等三角点研究会の会報で年 1 回発行する。会員の三角点登山記が中心で巻末に「会員登頂一等三角点一覧表」があり、旭岳、トムラウシの記録がある。他に同会顧問・今西錦司の日本 1000 山登頂を祝う記事など。

217　聳嶺　第九号
編　坂井久光／一等三角点研究会
1982／786 ーシ
清水敏一著『大雪山わが山　小泉秀雄』（阿部恒夫）を紹介する記事があるほか、同会副会長・松浦勇次が古希を記念して登った自分の姓の山、大雪山松浦岳（緑岳）の紹介文がある。

218　聳嶺　第十号
編　坂井久光／一等三角点研究会
1983／786 ーシ
創立十周年の特輯号で、「トムラウシ山」（菊田貞明）、「北海道の一等三角点巡峰」（坂井久光）がある。坂井は音江山、和寒山、天塩岳、富良野岳に登頂した。

219　創立五十周年記念誌
旭川山岳会創立五十周年記念事業実行委員会／旭川山岳会
1985／786 ーア
本書は全編大雪山の記録といっても過言ではない。大雪山登山紀行のほか「大雪山小史」「大雪山登山行程表（折り込み）」もある。速水潔を会長とする同会は、登山大会の運営、遭難対策、自然保護対策など、公的な事業も多い。本書でも旭川市長を含む、道内外組織団体の長が祝辞を述べており、半ば公的な出版物でもある。

220　大雪山概観（日本生物地理学会誌・別刷）
犬飼哲夫／日本生物地理学会
1935／462 ーダ
大雪山の地形・地質、気候、交通・施設、探検史、生物相など、写真、図表を用いて概略を記述する小冊子である。大雪山上で発見された石器の写真もある。

221　翼の王国　通巻 511 号
翼の王国編集部／ANA
2012／051 ーツ
ANA（全日本空輸）の機内誌。2012 年 1 月号で「天から送られた手紙　～雪に魅せられた人」を特集した。表題の人は雪博士・中谷宇吉郎のことで、雪の結晶などを研究した吹上温泉や旭岳温泉での博士のエピソード、現在の大雪山山岳スキーの醍醐味を三十ページに亘って紹介している。

222　日本山岳會　會報（一～一〇〇）　復刻版
日本山岳會／日本山岳會
1975／786 ーニ
昭和五年十月発行の日本山岳会会報一号から同十五年十二月の百号までの復刻版。昭和初期の山の会報だけに大雪山の記述は少ない。「北海道より」「北海道の山」「北海道の旅」などの会員通信に直井温泉（現愛山峡温泉）や厳冬期の旭岳登山など簡単な報告がある。

223　日本の高山蝶について
塚本珪一／『平安高校』紀要 21 号
1977／486 ーツ
―その文献について―の副題がある通り、各種の資料から高山蝶の文献を紹介している。北海道の高山蝶については、なかでも河野広道「大雪山の蝶類」が詳しいとあり、他に小泉秀雄、犬飼哲男、松村松年、江崎悌三、内田登一、河野齢蔵らの名が見える。1950 年、白畑孝太郎「北海道大雪山の珍蝶発見」という当時の新聞記事（『新昆虫』3 ― 12）も文献として紹介している。

224　ヌタツク　1 号
編　大戸昌雄／札幌第二中学山岳旅行部
1929／051 ーヌ
誌名は大雪山ヌタクカムウシュペから命名された。活版印刷のフランス装、写真、図版も多く、内容も充実、中学校（現・高校）の水準をはるかに超える立派な部報である。これには現役部員よりも、坂本直行ら OB たちの主導によるものである。札幌周辺の山のほか、誌名の通り大雪山系の登山記録も多い。北アルプスの縦走記もある。

225　ヌタツク　2 号
編　吉村重文／札幌第二中学山岳旅行部
1930／051 ーヌ
創刊号の好評を得て、さらに分厚い第 2 号を発行した。大学山岳部報レベルの会報である。登山も高度化し大雪山系の記録もあるが、積雪期の登山、沢登り、南アルプス、台湾の山もある。惜しくも 2 号で廃刊してしまったが、あまりに立派過ぎて、あとが続かなかったと見るべきだろう。

226　ヌタック　（第 2 次）1 ～ 6 号
ヌタック会／ヌタック会
1935 ～ 1938／051 ーヌ
ヌタック会は札幌第二中学山岳旅行部現役会員と OB 会員によって組織する。「会報」という名称で、タブロイド判 8 ～ 16 ページの小冊、4 年間にわたって断続的に発行された。大雪山の記録は少ない。

227　のぼるべ　創刊号

編　堀井克之ほか ／ 酪農学園大学体育会山岳部
1970 ／ 051 ーノ
1967 年 1 月、十勝美瑛岳ポンピエイ沢を登山中、雪崩により 4 人が遭難死。詳しい報告と追悼文がある。大学山岳部らしく、研究、論壇、運営の章もある。山行には大雪山系の記録も多い。

228　部報　第２号

編　服部勝宗 ／ 日本製鋼所室蘭製作所・文化体育会山岳部
1976 ／ 786 ーニ
大手企業の職域山岳部ならではの部報で、会社も社員の福利厚生上から部活動を奨励したようだ。北海道山岳連盟にも加盟している。部員名簿には生年月日、血液型、所属部署、住所、自宅電話番号もある。部報は 1969 年から 1975 年まで 7 年間の山行記録で、日高山脈の山、地元周辺の山が中心だが、大雪山系の山も見られる。

229　部報　第３号

編　服部勝宗 ／ 日本製鋼所室蘭製作所・文化体育会山岳部
1982 ／ 786 ーニ
巻頭言は山岳部長だが、役職が品質監査室長とはいかにも職域山岳部らしい。写真概念図、ルート図も多く、内容も充実した分厚い部報である。1976 年から 1981 年まで 6 年間の山行記録で、技術的に高度な登攀も多い。山域別に分けられ、大雪山の章があり、積雪期登山が中心である。夏の忠別川遡行では、水量が多くそれぞれ救命具をつけて泳いだとある。

230　部報　第４号

編　服部勝宗 ／ 日本製鋼所室蘭製作所・文化体育会山岳部
1995 ／ 786 ーニ
これまでの縦書きから横書きに、和暦から西暦に、巻頭グラビアをカラー写真に、部報の体裁を変えた。1982 年から 1993 年まで 12 年間の山行記録であり、大雪山の章では積雪期のバリエーションルートを中心に充実した山行が多い。「イランでの登山」は 1 年半の長期出張中、現地のイラン人たちと 2 千から 4 千㍍級の山々に登っている。

231　北大山の会　会報

編　北大山の会 ／ 北大山の会
1938 ー 1949 ／ 786 ーホ
当初は東京在住の北大山岳部 OB 有志が集まり「こくわ会」と称していたが、発展拡大して『北大山岳部　時報』として刊行。その後の変遷を経て『北大山の会　会報』となったので、ここではその名称を用いることにした。要するに公的な『北大山岳部々報』ではなく、内部的な刊行物である。活動報告、会員名簿、会員消息のほか、論考、随筆、登山記録、遭難、後半には出征、戦没という痛ましい記事もある。1 ～ 22 号までの合本で、大雪山の記録はかなり多い。

232　北海道医報創刊 1000 号記念写真集

編　西信博 ／ 北海道医師会
2002 ／ 490 ーホ
『北海道医報』901 号～ 1000 号の表紙写真集である。100 点の写真は風景や建物、動植物など様々で、高山植物も含めて大雪山、十勝連峰の写真が多く、それぞれに写真説明が付いている。

233　北海道山岳

発行人　新妻徹 ／ 日本山岳会北海道支部
1999 ／ 786 ーホ
日本山岳会北海道支部の 30 周年記念誌。新妻徹が 30 年の歩みと歴代支部長の紹介を書き、「大雪山層雲峡四つの氷瀑登攀」（三和裕佶）、「高嶺への夢を追い続けて　北海道 1500m 以上の山すべてに登頂」（京極紘一）など。

234　松浦竹四郎の山岳画（『林』に掲載）

村上啓司 ／ 北海道林務部
1973 ー 1974 ／ 291 ーム
北海道林務部報『林』の 1973 年 10 月号から 1974 年 8 月号に 10 回連載したものを 1 冊にまとめた。『十勝日誌の中央高地描写図』と『中央高地描写図の山名解』の 2 部に分け、武四郎の山岳図をもとに現在の山座を同定、アイヌ山名の解釈について山岳図や地形図、模式図を掲示して詳しく記述している。

235　野帳

編　早川禎治 ／ 山岳同人・北の野帳社
1972 ～ 1975 ／ 786 ーヤ
本書は 1 号から 33 号までの合本で全 408 ページになる。同人誌形式だが、ガリ切謄写版、発送まですべて早川であり、事実上は手作りの個人誌といえる。大雪山系の記録には「憧れのオプタテシケ山」（田中たか子）、「トナカリウシュペツ川より美瑛岳へ」（早川）、「クマネシリ岳とコロコロ沢」（田村昌文）、「オプタテシケ西壁」（早川）がある。33 号で休刊したのは、主宰・早川が青年海外協力隊の一員としてバングラデシュに赴くため。

236　続・野帳

編　淡川舜平 ／ 北の野帳社
1977 ー 1980 ／ 051 ーヤ
北の野帳社主宰・早川禎治が不在の間、淡川舜平がガリ切（謄写版）をし「続・野帳」として続刊。本書は 1 ～ 7 号全 232 ページ、別冊 3 号 30 ページの合本である。本文は淡川、高澤光雄が中心で、早川も現地ベンガル（バングラデシュ）から送稿した。大

雪山は「秋の沼ノ平」（片平卓男）、「正月の永山岳・愛別岳・当麻岳」（高澤光雄）がある。終刊は早川禎治が帰国したため。

237　第二次　野帳

編　早川禎治 ／ 山岳同人 北の野帳社
1985 － 1996 ／ 051 －ヤ
早川は引き続いて「第二次　野帳」を刊行する。100 冊分を合本にして 1177 ページにも及ぶ大冊となったため、二分冊にした。松田保・裕子（後志羊蹄工房）の版画を貼付して美しい。大雪山関係は 6 編あるが内容を省略する。

238　山　復刻版全 6 巻

編　石原巖 ／ 出版科学総合研究所
1980 ／ 786 －ヤ
梓書房が誌名を公募した「山」は、昭和八年十二月暮れに印刷して九年 1 月 1 日に創刊号が発行された。巻頭に『山』は極く寛いだ爐邊叢談誌であると打ち出している通り、登山家をはじめ山に関心を持つ人たちの随筆文芸月刊誌だった。三年間で 30 号を出したところで短命に終わった。目次から大雪山関係を拾うと、今西錦司「北海道の冬を訪ねて」ではニセイカムシウペ山行きで雪橋（ブリッジ）を踏み外している。三上次男「ヌタクカムシュッペの想ひ出」は旧制旭川中学時代の旭岳登山記。羽衣の滝近くの絶壁を苦しみながら這い登ったことなど初期の旭岳登山が忍ばれる。中谷宇吉郎の良く知られた随筆「雪の十勝」は第 2 巻第 12 号に載っている。同じ号で金田一京助が「北海山名譚」を寄稿。アイヌはオプタテシケを大雪山の中で最も高い山であり、かつ、荘厳神聖なる山と崇め、オプタテシケのウポポ（神歌）まで紹介している。

239　山脈越えて　創立五十周年記念誌

編　札幌山岳会 ／ 札幌山岳会
2002 ／ 786 －ヤ
札幌山岳会 50 年の足跡を 5 部構成でたどる。第 2 部「風雪」は道内を中心とする国内の山、第 3 部「飛翔」は海外の山である。利尻山のバリエーションルートの登攀、厳冬期日高山脈全山縦走、知床全山縦走など、困難な登山の記録が多い。中央高地では厳冬期大雪～十勝全山縦走 11 日間、ニペソツ山東壁登攀、忠別川左股ルート遡行などがある。

240　山行手帖　おいらく山岳会 30 周年記念号

編　おいらく山岳会 ／ おいらく山岳会
1988 ／ 786 －オ
おいらく山岳会は 1958 年創立、名の通り中高年登山愛好者を対象にした山岳会で、40 歳以上でなければ入会できない。独自の組織運営で会員は増加の一途をたどり、一時は 3 千人にも達した。1988 年まで 30 年間の山行は約 1 万回、東京近郊の史跡巡りから低山ハイク、中高山の縦走登山、海外各地のトレッキングもある。北海道大雪山の山旅も記録されている。同会は今も 600 人の会員がおり活動を続けている。

その他

小冊子、パンフレット類、絵はがき類、複写物、大雪山文献とはいえないが関連づけられるもの

9 － 1 その他

241　御絵葉書

層雲閣 ／ 層雲閣
不詳 ／ ―
二つ折りカバーの表紙は吊り橋の上に仰ぐ黒岳と桂月岳の図柄である。写真絵はがきが 2 種類 2 枚入り。1 枚は客室と浴場、もう 1 枚は層雲閣全景と大函、いずれもモノトーンである。温泉旅館・層雲閣の PR 用絵はがきであるが、電話　層雲閣一番・二番と付していることにも興味を引く。

242　観光の層雲峡

不詳 ／ 不詳
不詳 ／ 291 －カ
袋付き着色カバーの絵はがき。表紙には、大雪山国立公園・霊泉と風光美の仙境のサブタイトルがある。モノトーン 7 枚入り。それぞれ 2 行の案内文があり、霊山碧水峡の名も付している。探勝路を歩く和装洋装の観光客の姿もある。新旧漢字が混じっていることから、戦後発行のものと思われる。

243　大雪山登山案内図　スキーコース付

編　あさひ出版社 ／ あさひ出版社
不詳 ／ 291 －ダ
縦約 76㎝、横約 52㎝の大雪山登山案内山岳図を横四つ折り縦四つ折りにした携行版（縦 19・5㎝、横 13.5㎝）。大雪山のほか、十勝岳・美瑛岳案内図もある。書いてあることは大雪山の解説、登山案内、高山植物図、大雪山連峰鳥瞰図、赤い線でコースを示したスキー登山案内図、層雲峡、天人峡の鳥瞰案内図など。広告に「勇駒別　大雪山・山の家」がある。

244　大雪山と層雲峡

編　其水堂 ／ 其水堂
1926 年以降 ／ 291 －ダ
横二つ折り縦六つ折り、畳んだ状態の一部が表紙になっていて、「北海の霊峰・附鹽谷温泉案内」のサブタイトルがある。小泉秀雄の記述に基づいて、北海道の山、北海道中央高地の解説と登山案内、層雲峡と塩谷温泉の案内がある。文中に馬場孤蝶、大町桂月、尾崎咢堂（行雄）の詩歌挿入あり。黒岳からトムラウシ、十勝岳に至る大縦走路が本年完成したとある。

245　森林【もり】への招待

㈶北海道森林整備公社 ／ ㈶北海道森林整備公社
1985 以降 ／ 291 －モ
森に親しみながら、自然に接して、新鮮な喜びや感動を共有するためのパンフである。国立公園、国定公園、道立自然公園、自然休養林、21 世紀の森、緑のふるさとに区分し、指定日と番号をふり、北海道図に番号で位置を示す。大雪山とその周辺では、「大雪山国立公園」「富良野芦別道立自然公園」「嵐山・神居自然休養林」「白金自然休養林」「然別自然休養林」「トムラウシ自然休養林」「21 世紀の森（旭川市）」がある。その後の指定増加や組織名称、所管者も改変されている。

９－２ その他

246　医と福祉の道のり

編　パック宣研 ／ 医療法人　社団主体会
1990 ／ 498 －イ
主体会 20 周年史であり、大雪山に関わる本ではないが理事長・川村耕造は大の山好き人間であり、わざわざ登山の項を設けて川村自身が書いている。彼が特にこだわったのは 56 歳の誕生日（1 月 3 日）に六甲全山縦走 56㌔で、56 歳、56㌔の一致から今後の事業を賭けて参加、踏破に成功した。彼の登山一覧表によると、1988 年は 63 回登山をしていて、大雪山に登頂ののち羊蹄山、樽前山、風不死岳、恵庭岳に登っている。

247　命　今を重ねて　エッセー集

宮崎二三子 ／ 宮崎二三子
2015 ／ 914 －ミ
著者は女性の国際奉仕団体ゾンタクラブ旭川に所属、池坊華道と表千家茶道の師匠として活躍した。エッセーに「曇りのち晴れ」の一文があり、旭岳の噴煙をバックに野点の準備をする写真が添えてある。旭岳裾野で緋毛氈（ひもうせん）を敷き、野点を開いたのは後にも先にもこれ一回きりだろう。カラー写真付きで北海道新聞一面上段に記事も載ったらしい。著者は楽しみにしていたエッセー集の刷り上がりを確認してまもなく逝去。担当した旭川の第一印刷（株）にとっても最後の印刷・製本となり、廃業した。

248　大雪山系

編集発行人　下村保太郎 ／ 北海道詩人クラブ
1953 ／ 911 －ダ
冊子名が「大雪山系」なので紹介するが、中身は詩集。　創刊について詩人、鈴木政輝が「詩の発表の場として十分すぎるものとおもう（中略）大雪山系を徒に死火山とならしめないやうにしようぢゃないか」と説いているが、創刊号で終わった。余談だが鈴木は茶人でもあり、旭岳麓で噴煙を間近に野点を開いた。その時の詩が「萬年雪に水ようかん姿見池畔野だては紅紫萬朶のお花畠忘れざらめや」。

９－３ その他

249　音楽劇ヌタック・カウシュペ

作曲　伊福部昭 ／ 日本コロムビア
2015 ／ 775 －オ
釧路出身で北大農学部卒の作曲家、伊福部は「ゴジラ」の映画音楽で知られる一方、雪博士、中谷宇吉郎の科学映画『霜の花』の音楽も担当した。伊福部らの作曲は最近見直され、コロンビアが「戦後作曲家発掘集成」（CD8 枚組）を製作、その中で伊福部が HBC 北海道放送ラジオ番組で 1953 年 11 月 28 日に発表した音楽劇「ヌタック・カムシュペ」を収録している。アイヌ語のタイトルは大雪山のこと。麓の村のアイヌと、敵対するアイヌが争い、敵方の若者が捕えられるが、平和を強く願う村の娘が若者を解き、二人で旭岳へ逃げるが追っ手の矢に倒れる悲劇。30 分の音楽劇の出演は劇団七曜会、演奏は東京室内管弦楽団。

250　大雪山の勇者　牙王（ビデオ）

原作　戸川幸夫 ／ ポニー
1978 ／ ―
戸川幸夫原作「牙王物語」をアニメ化、フジテレビ系列で 1978 年 9 月 23 日、秋分の日特集番組として放送した。大雪山と東川村を主な舞台に繰り広げられる犬「タキ」と牧場の娘、早苗の物語。原作では早苗が台風荒れ狂う天人峡温泉で凶暴な熊「片目のゴン」に襲われ、タキが敵討ちをするのだが、アニメではこの展開が全く違う。地名がセリフで入るが『東川』ではなく、大雪山と離れた実在の町名になっているのも原作と異なる。VHS は 60 分。

251　北海道中央高地の地学的研究附図

小泉秀雄／小泉秀雄
1918 ／ －
「大雪山の父」と称される小泉秀雄が庁立旭川中学校（現・旭川東高校）在職中に大雪山を調査し、山並みをスケッチしながら、当時はまだ山名がなかったことから小泉が山名を考え記入していった。スケッチは小泉自身が手作りしたと思われるアルバムに張って残した。アルバムには、小泉が名付けた『勝仙峡』（現・天人峡）の写真と写真絵はがきも貼ってある。（詳細は 48 ～ 50 ページ）

252　大雪山の四季

1976 年から毎年欠かさず制作されてきた大雪山の写真カレンダー、2016 年版で 41 冊目になる。旭川営林局広報担当職員、高橋秀雄が作り、林野弘済会が販売、旭川の印刷会社「総北海」が印刷・制作していた。高橋が 20 冊を節目に大雪山の撮影を終え、代わって写真家・後藤昌美が撮影した大雪山の写真を使い、「総北海」が作り続けている。（詳細は 56 ページ）

インデックス

著者・編者名（50 音順）

秋庭ヤエ子
ナナカマドの挽歌 ……20
秋元笻男
薄雪草Ⅱ　創立 20 周年記念 ……35
旭川山岳会創立五十周年記念事業実行委員会
創立五十周年記念誌 ……37
旭川山岳会
登山ガイド　1974 年版 ……23
登山ガイド　1986 年版 ……23
旭川生物同好会
群落　旭川西高等学校生物部創部 60 周年記念誌 ……36
旭川中学校学友会
学友会雑誌　第 13 号 ……36
旭川土木現業所
天人峡砂防ダム ……19
あさひ出版社
大雪山登山案内図　スキーコース付 ……39
梓 林太郎
旭川・大雪　白い殺人者 ……28
大雪・層雲峡殺人事件 ……29
東延江
北海道の碑 ……30
阿部泰三
熊に関する百訓 ……14
阿部智一
風と岩の音　田所一義君追悼集 ……19
阿部要介
札幌グランドホテルの 50 年 ……19
新井敏記
Coyote　№ 57 ……32
淡川舜平
続・野帳 ……38
安細和彦
私のラバさん　酋長の娘 ……32
井内俊之
熊笹　11 号 ……36
石川球太
旅ゆけば　阿寒湖物語 ……25
石原巖
山　復刻版全 6 巻 ……39
井田清
詩集　山 ……28
板倉勝宣
山と雪の日記 ……21
一原有徳
小さな頂【戦前の山】……29
残された山　杖の頂 ……30
一等三角点研究会
一等三角点全国ガイド ……23
一等三角点百名山 ……23
伊藤健次
日本百名山登山案内 ……23
伊藤徹秀
雑誌『風土』創刊号 ……34
犬飼哲夫
大雪山概観（日本生物地理学会誌・別刷） ……37
伊福部昭
音楽劇ヌタック・カウシュペ ……40
今村朋信
えぞ山岳会三十周年記念誌 ……35
岩科小一郎・藤本一美
山ことば辞典 ……16
岩村和彦
北海道　沢登りガイド ……24
上野三郎
慶応義塾山岳会北海道旅行（大登会叢書第 3 号） ……36
梅沢俊
北の花名山ガイド ……23
大雪山　花の山旅① ……22
花風景　北海道 ……26
北海道　花の散歩道 ……27
北海道　花の散歩道(改訂版　続) …27
ＳＴＶラジオ
続『ほっかいどう百年物語』 ……22
続々『ほっかいどう百年物語』 ……22
第五集『ほっかいどう百年物語』 …22
遠藤一郎
歌集『米寿碌碌』 ……30
山恋う母娘 ……31
おいらく山岳会
山行手帖　おいらく山岳会 30 周年記念号 ……39
大島亮吉
登高者 ……30
太田紫織
オークブリッジ邸の笑わない貴婦人 ……28
大戸昌雄
ヌタツク　1 号 ……37
大橋うめ、遠藤一郎
寂しき遊戯 ……28
岡本陸人
アルピニスト　第 8 号 ……34
奥村芳太郎
日本の名山　四季の山容を探る ……26
開高健
自然探訪（1）北海道・東北を歩く ……29
岳人編集部
岳人事典 ……13
「角川日本地名大辞典」編纂委員会
角川日本地名大辞典　北海道・上巻地名編 ……13
角川日本地名大辞典　北海道・下巻総説・地誌編・資料編 ……13
角川文化振興財団（加藤楸邨）
北海道・東北ふるさと大歳時記 ……30
金井弘夫著　大場秀章編
金井弘夫著作集 ……18
加納一郎
北海道の山と雪 ……30
鎌倉春雄
昭和ひと桁生かされて八十四年 ……21
上川支庁
上川の概況 ……14
上川支庁・上川中部広域市町村圏振興協議会
ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第 1 ～第 3 話編 ……13
ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第 4 ～第 6 話編 ……13
上川中学校学友会
学友会雑誌　第 1 号 ……35
上川町社会科郷土読本編集委員会
かみかわ　小学校社会科副読本 ……14
上川町役場企画総務課企画グループ
わが心の上川　Kamikawa On My Mind ……24
上川町立上川中学校　理科グループ
かみかわ＝生物編＝ ……14
かみかわ＝地学編＝ ……14
かみかわ＝野外観察編＝ ……14
川崎隆章
山岳事典 ……15
登山講座　第 5 巻 ……15
河原昌春
月刊　わが北海道　3 － 8 ……34
川村耕造
大雪山山行印象記 ……19
菊谷清蔵
層雲峡温泉小唄 ……27
其水堂編
大雪山と層雲峡 ……39
記念事業協賛会
開校五十年史　北海道旭川東高等学校 ……35
木下孝浩
POPEYE　第 38 巻第 2 号 ……34
木原直彦
北海道文学散歩　道北編 ……30
九糸郎
単独行 ……29
京都山岳会
京都山岳　六十周年記念号 ……36
山岳会「クーラカンリ」
夏山登山教程 ……23
熊谷洋一
國立公園　通巻 729 号 ……36
栗林薫
北海道一般スキー八十年の歩み ……20
黒田隆二
SKI & SKI　報知グラフ別冊 '75 ① ……33
桑原武夫
桑原武夫紀行文集　1 ……28
郡司武
週刊・日本百名山　全 50 冊 ……32
経済安定本部資源調査会
大雪山積雪水量及び流出調査 ……17
小泉秀雄
北海道高山植物図譜　附菌類 ……18
北海道中央高地の地学的附図 ……40
高知県文学館
生誕 140 年　大町桂月 ……25

インデックス

高知県立坂本龍馬記念館
北の大地に生きて …… 25
児島勘次
登山歴程 …… 20
後藤昌美
大雪山の四季 …… 40
小林昭祐
高山帯における登山道やその踏みつけによる被害への対応 …… 16
山岳性自然公園における利用者の意識構造に関する研究 …… 16
自然公園における野外レクリエーションに伴う過剰利用に処するための方策 …… 17
斜面上に分散した登山道が形成される要因 …… 17
利用者の利用体験に対する態度に基づく自然公園の管理方策 …… 17
近藤信行
山と旅　大正・昭和編 …… 31
斎藤浪子
金沢山岳文庫　北海道山岳文献目録 …… 13
坂井久光
聳嶺　第五号 …… 37
聳嶺　第九号 …… 37
聳嶺　第十号 …… 37
札幌学院大学人文学部
北海道と環境保護 …… 15
札幌山岳会
山脈越えて　創立五十周年記念誌 …… 39
札幌市教育委員会社会教育課
札幌・大正の青春 …… 14
佐藤喜一
大雪山系の詩人・作家群（『月刊道北』連載）…… 33
佐藤清吉
大雪山のキノコ　新版 …… 13
佐藤徹雄
北海道のスキーづくり …… 18
佐藤文彦
大雪山　十勝岳・幌尻岳　山と高原地図３ …… 22
佐藤康幸
熊笹　13号 …… 36
更科源蔵、渡辺茂
北海道の伝説 …… 16
更科源蔵
北方風物　第一輯 …… 34
山藤印刷 100 年史編纂室
印刷の道 100 年 …… 19
塩谷忠
大町桂月翁を想う …… 35
大雪山・層雲峡　写真帳 …… 24
清水一行
北海道の山 …… 34
清水敏一
大雪山の父・小泉秀雄の生涯 …… 33
下村保太郎
大雪山系 …… 40
白樺荘同窓会事務局
樹海の中の赤い屋根 …… 36
菅井康司
skier '75　別冊山と渓谷 …… 33
スキージャーナル
ザ・ラストフロンティア …… 32
鈴木修、足立朗
日本の名山　北海道編 …… 26
全国自然保護連合
自然保護事典［山と森林］ …… 15
層雲閣
御絵葉書 …… 39
大雪山絵画コンクール実行委員会
大雪山絵画コンクール受賞作品集 …… 25
大雪山国立公園観光連盟
ぐるり大雪 …… 22
大雪山国立公園層雲峡管理事務所
大雪山国立公園　自然観察ガイド …… 23
第二アートセンター、監修・近藤信行
山・やま事典 …… 16
大門金光
大門金光・天人閣支配人の記録 …… 21
高倉新一郎
北海道史の歴史 …… 15
高澤光雄
薄雪草　創立 10 周年記念 …… 35
北の山と本　その登山史的考察 …… 19
日高山脈の先蹤者　相川修遺稿集 …… 22
北海道中央分水嶺踏査記録　一宗谷岬から白神岬まで …… 20
高橋丑太郎
広葉樹に惚れて五十年 …… 19
高橋延清
樹海　夢、森に降りつむ …… 29
高本曉堂
国立公園大雪山阿寒洞爺勝景大観 …… 25
高橋秀雄
大雪山の四季 …… 40
滝本幸夫
北海道中央分水嶺踏査　余話 …… 20
私の中の深田久弥「日本百名山」以降の北の山紀行 …… 31
武田久吉
明治の山旅 …… 30
辰野勇
岳人　№817 …… 32
舘田外行
回顧録　牛と夢 …… 21
田中館秀三
十勝岳爆發概報 …… 17
十勝岳硫黄山の噴火原因と現状（地学雑誌　451 号別刷） …… 33
田中長三郎
泥火山 …… 29
種市佐改
阿寒国立公園の三恩人 …… 21
俵浩三
北海道・緑の環境史 …… 18
千葉章仁
平原の手帖　13 号 …… 34
千葉萬葉
北海道名所旧蹟 …… 24
塚本珪一
日本の高山蝶について …… 37
翼の王国編集部
翼の王国　通巻 511 号 …… 37
鶴田知也
画文草木帖 …… 29
草木図誌 …… 29
戸川幸夫（原作）
大雪山の勇者　牙王（ビデオ） …… 40
徳久球雄
山を読む事典 …… 16
栃木義正
突兀七千有余尺　庁立旭川中学校校歌雑考 …… 20
北海道地名一覧 …… 18
富田祐志
熊笹　12 号 …… 36
豊田武
流域をたどる歴史　第一巻 …… 31
豊田千恵
歌集『古代幻想』 …… 28
成田新太郎
上川町内のアイヌ語地名解、上川町の川の名・沢の名 …… 14
南條初五郎
山岳講座　第８巻 …… 15
新妻徹
北海道山岳 …… 38
西田省三
雪山登山ルート …… 24
西信博
北海道医報創刊 1000 号記念写真集 …… 38
山のあなたの空遠く …… 31
山のあなたの空遠くⅡ …… 31
山のあなたの空遠くⅢ …… 31
新田紀敏
天人峡三十三曲がり附近のハゴロモホトトギスの行方 …… 33
日本山岳會
日本山岳會　會報（一～一〇〇）復刻版 …… 37
日本山岳会婦人懇談会有志
村井米子追悼集 …… 21
(財)日本自然保護協会
大雪火山群の研究 …… 17
ヌタック会
ヌタック（第２次）１～６号 …… 37
布川欣一
山道具が語る日本登山史 …… 21
能勢信二、丹羽素雄
山と渓谷　総索引 1-379 号 …… 34
橋本広
山嶺抒情　画文集 …… 25
パック宣研
医と福祉の道のり …… 40
服部勝宗
部報　第２号 …… 38
部報　第３号 …… 38
部報　第４号 …… 38
幅口堅二
ＪＲ北海道車内誌　THE JR Hokkaido　318 号 …… 32

濱谷浩
日本列島 ……26
早川禎治
野帳 ……38
第二次 野帳 ……39
原田豊
秘境層雲峡 仙境の思い出 ……27
播磨秀幸
荒井組慰霊碑建立の歴史調査報告書 ……17
ビスターリ編集部
ビスターリ 5号 ……33
閑良屋会
遙かなる山 Ⅰ～Ⅴ ……26
桧山修
旭川春秋 ……32
深田久彌
山岳遍歴 ……28
福島正秋
ある高校山岳部小史 ……34
福田和民ら写真集編集委員会
懐郷 ……32
藤井敏明
近代洋画に見る日本の名山 ……25
ぺたぬぅ発行委員会
ぺたぬぅ 9号 ……30
北大山の会
北大山の会 会報 ……38
北海道
北海道の森林 ……27
北海道ＮＨＫ情報ネットワーク
ＮＨＫふるさとデータブック ……13
北海道開発庁
石狩川水利総合開発計画調査報告（大雪ダム調査報告） ……18
北海道教育大学大雪山自然教育研究施設
北海道教育大学 大雪山自然教育研究施設研究報告 ……18
北海道警察本部生活安定部
北海道の環境を守るために ……20
㈳北海道自然保護協会
大雪山・旭岳の自然観察 ……23
北海道新聞社販売促進部
北海道の自然をあるく ……24
㈶北海道森林整備公社
森林【もり】への招待 ……40
北海道総合開発委員会事務局編
北海道山村経済の実態 上川郡上川町の調査報告 ……15
北海道地方資料センター
北海道の地名 ……15
北海道の山メーリングリスト
北海道 雪山ガイド（増補新版）……24
堀田弘司
山への挑戦―登山用具は語る― ……21
㈱ホツマ
生きる 1988年1月号 ……34
堀井克之
のぼるべ 創刊号 ……38
堀淳一
地図の風景 北海道編Ⅱ道東・道北 ……26
槇有恒
日本の山 ……26
松浦武四郎著、丸山道子訳
石狩日誌 ……13
十勝日誌 ……15
松浦勇次 大西敏夫
日本の山岳 登頂跡誌 ……20
松本市立博物館
『河野齢蔵』生誕150周年記念特別展図録 ……25
真鍋光男
吉積長春遺作展 図録 ……27
緑川洋一
日本の山河 ……26
日本の山河 水墨の詩 ……26
宮崎二三子
命 今を重ねて エッセー集 ……40
宮下奈都
神さまたちの遊ぶ庭 ……27
宮部金吾
高山植物園新設設計書 ……16
村井米子
山愛の記 ……31
村上久吉
郷土を拓いた人々 ……21
村上啓司
ヌタプカムシペとニセィカウシペ …17
日高の山名について 写真集『日高山脈』別刷 ……27
松浦竹四郎の山岳画 ……38
村串仁三郎
自然保護と戦後日本の国立公園 ……18
茗溪堂
山の本販売目録 ……16
八木健三、辻井達一
北海道 自然と人 ……15
安田成男
会報 創立二〇周年記念特別号 ……35
保田信紀
上川町の自然 生物目録集 ……14
山川力
山とともに在り ……31
八巻明彦
SKI特集 報知グラフ'74第2集 …33
山と渓谷社
ハイカー ……33
山根対助
北海道から 第3号 ……15
横内斎
草木寸景 ……29
草木漫筆 ……29
横内文人
故・小泉秀雄先生の野帳（1）……18
吉澤一郎
北の山・南の山 研究・随筆・紀行 ……28
吉田武三
松浦武四郎紀行集 下巻 ……22
吉野晴朗
ふるさとの富士200名山 ……27
吉村重文
ヌタツク 2号 ……37
米村晃多郎
森のひと どろ亀さん ……22
WALK CORPORATION
花の百名山 登山ガイド ……24
若林修二
北の雪稜 ……25
若松直
日本百名山スケッチ紀行 ……26
渡辺文仁
えぞ 1 ……35
渡辺公平
山旅歌集 ……31

著作名（50音順）

阿寒国立公園の三恩人
種市佐改 ……21
旭川春秋
編 桧山修 ……32
旭川・大雪 白い殺人者
梓林太郎 ……28
荒井組慰霊碑建立の歴史調査報告書
播磨秀幸 ……17
ある高校山岳部小史
編 福島正秋 ……34
アルピニスト 第8号
編 岡本陸人 ……34
生きる 1988年1月号
㈱ホツマ ……34
石狩川水利総合開発計画調査報告（大雪ダム調査報告）
編 北海道開発庁 ……18
石狩日誌
松浦武四郎著、丸山道子訳 ……13
一等三角点全国ガイド
編 一等三角点研究会……23
一等三角点百名山
編 一等三角点研究会 ……23
医と福祉の道のり
編 パック宣研 ……40
命 今を重ねて エッセー集
宮崎二三子 ……40
印刷の道100年
山藤印刷100年史編纂室 ……19
薄雪草 創立10周年記念
編 高澤光雄ほか ……35
薄雪草Ⅱ 創立20周年記念
編 秋元笻男ほか ……35
えぞ 1
編 渡辺文仁ほか ……35
えぞ山岳会三十周年記念誌
編 今村朋信ほか……35

ＮＨＫふるさとデータブック
北海道ＮＨＫ情報ネットワーク……13
御絵葉書
層雲閣……39
オークブリッジ邸の笑わない貴婦人
太田紫織……28
生誕140年　大町桂月
編　高知県文学館……25
大町桂月翁を想う
塩谷忠……35
音楽劇ヌタック・カウシュペ
作曲　伊福部昭……40
懐郷
福田和民ら写真集編集委員会……32
開校五十年史　北海道旭川東高等学校
編　記念事業協賛会……35
回顧録　牛と夢
舘田外行……21
会報　創立二〇周年記念特別号
編　安田成男……35
岳人　№817
編　辰野勇……32
岳人事典
岳人編集部……13
学友会雑誌　第１号
編　上川中学校学友会……35
学友会雑誌　第13号
編　旭川中学校学友会……36
歌集『古代幻想』
豊田千恵……28
風と岩の音　田所一義君追悼集
編　阿部智一ほか……19
角川日本地名大辞典　北海道・上巻地名編
「角川日本地名大辞典」編纂委員会……13
角川日本地名大辞典　北海道・下巻総説・地誌編・資料編
「角川日本地名大辞典」編纂委員会……13
金井弘夫著作集
著　金井弘夫　編　大場秀章……18
金沢山岳文庫　北海道山岳文献目録
編　斎藤浪子……13
かみかわ　小学校社会科副読本
編　上川町社会科郷土読本編集委員会……14
かみかわ＝生物編＝
上川町立上川中学校　理科グループ……14
かみかわ＝地学編＝
上川町立上川中学校　理科グループ……14
かみかわ＝野外観察編＝
上川町立上川中学校　理科グループ……14
上川町内のアイヌ語地名解、上川町の川の名・沢の名
成田新太郎……14
上川町の自然　生物目録集
編　保田信紀……14
上川の概況
上川支庁……14
神さまたちの遊ぶ庭
宮下奈都……27
観光の層雲峡
不詳……39
北の雪稜
編　若林修二……25
北の大地に生きて
高知県立坂本龍馬記念館……25
北の花名山ガイド
梅沢俊……23
北の山・南の山　研究・随筆・紀行
吉澤一郎……28
北の山と本　その登山史的考察
高澤光雄……19
京都山岳　六十周年記念号
編　京都山岳会……36
郷土を拓いた人々
村上久吉……21
近代洋画に見る日本の名山
編　藤井敏明……25
熊笹　11号
編　井内俊之……36
熊笹　12号
編　富田祐志……36
熊笹　13号
編　佐藤康幸……36
熊に関する百訓
阿部泰三……14
ぐるり大雪
編　大雪山国立公園観光連盟……22
桑原武夫紀行文集　1
桑原武夫……28
群落　旭川西高等学校生物部創部60周年記念誌
編　旭川生物同好会……36
慶応義塾山岳会北海道旅行（大登会叢書第３号）
上野三郎……36
高山植物園新設設計書
宮部金吾……16
高山帯における登山道やその踏みつけによる被害への対応
小林昭祐……16
『河野齢蔵』生誕150周年記念特別展図録
編　松本市立博物館……25
広葉樹に惚れて五十年
高橋丑太郎……19
國立公園　通巻729号
編　熊谷洋一……36
国立公園大雪山阿寒洞爺勝景大観
高本曉堂……25
故・小泉秀雄先生の野帳（1）
編　横内文人……18
Coyote　№57
編　新井敏記……32
ザ・ラストフロンティア
スキージャーナル……32
札幌・大正の青春
編　札幌市教育委員会社会教育課……14
札幌グランドホテルの50年
阿部要介……19
寂しき遊戯
著　大橋うめ、編　遠藤一郎……28
山岳講座　第８巻
編　南條初五郎……15
山岳事典
編　川崎隆章……15
山岳性自然公園における利用者の意識構造に関する研究
小林昭祐……16
山岳遍歴
深田久彌……28
山嶺抒情　画文集
橋本広……25
ＪＲ北海道車内誌　THE JR Hokkaido　318号
編　幅口堅二……32
詩集　山
井田清……28
自然公園における野外レクリエーションに伴う過剰利用に処するための方策
小林昭祐……17
自然探訪（1）北海道・東北を歩く
監修　開高健……29
自然保護事典［山と森林］
編　全国自然保護連合……15
自然保護と戦後日本の国立公園
村串仁三郎……18
輜重兵第七大隊　大雪山縦断行軍寫眞帖
不詳……24
斜面上に分散した登山道が形成される要因
小林昭祐……17
週刊・日本百名山　全50冊
編　郡司武……32
樹海　夢、森に降りつむ
高橋延清……29
樹海の中の赤い屋根
編　白樺荘同窓会事務局……36
聳嶺　第五号
編　坂井久光……37

聳嶺　第九号
編　坂井久光 ……37
聳嶺　第十号
編　坂井久光 ……37
昭和ひと桁生かされて八十四年
鎌倉春雄 ……21
SKI & SKI　報知グラフ別冊 '75 ①
編　黒田隆二 ……33
SKI 特集　報知グラフ '74 第２集
編　八巻明彦 ……33
skier '75　別冊山と渓谷
編　菅井康司 ……33
層雲峡温泉小唄
菊谷清蔵 ……27
層雲峡の景観　額面写真六枚組
不詳 ……24
草木図誌
鶴田知也 ……29
画文草木帖
鶴田知也 ……29
草木寸景
横内斎 ……29
草木漫筆
横内斎 ……29
創立五十周年記念誌
旭川山岳会創立五十周年記念事業実行委員会 ……37
大雪火山群の研究
（財）日本自然保護協会 ……17
大雪山　花の山旅①
梅沢俊 ……22
大雪山　十勝岳・幌尻岳山と高原地図３
佐藤文彦 ……22
大雪山・層雲峡　写真帳
塩谷忠 ……24
大雪山・旭岳の自然観察
㈳北海道自然保護協会 ……23
大雪山絵画コンクール受賞作品集
編　大雪山絵画コンクール実行委員会 ……25
大雪山概観（日本生物地理学会誌・別刷）
犬飼哲夫 ……37
大雪山系の詩人・作家群（『月刊道北』連載）
佐藤喜一 ……33
大雪山系
編集発行人　下村保太郎 ……40
大雪山国立公園　自然観察ガイド
大雪山国立公園層雲峡管理事務所ほか ……23
大雪山積雪水量及び流出調査
編　経済安定本部資源調査会 ……17
大雪山山行印象記
川村耕造 ……19
大雪山登山案内図　スキーコース付
編　あさひ出版社 ……39
大雪山と層雲峡
編　其水堂 ……39
大雪山のキノコ　新版
佐藤清吉 ……13
大雪山の四季
高橋秀雄、後藤昌美 ……40
大雪山の父・小泉秀雄の生涯
清水敏一 ……33
大雪山の勇者　牙王（ビデオ）
原作　戸川幸夫 ……40
大雪・層雲峡殺人事件
梓林太郎 ……29
大門金光・天人閣支配人の記録
大門金光 ……21
旅ゆけば　阿寒湖物語
石川球太 ……25
単独行
九糸郎 ……29
小さな頂【戦前の山】
一原有徳 ……29
地図の風景　北海道編Ⅱ道東・道北
堀淳一ほか ……26
翼の王国　通巻 511 号
翼の王国編集部 ……37
泥火山
田中長三郎 ……29
天人峡砂防ダム
旭川土木現業所 ……19
天人峡三十三曲がり附近のハゴロモホトトギスの行方
新田紀敏 ……33
十勝岳硫黄山の噴火原因と現状（地学雑誌　451 号別刷）
田中館秀三 ……33
十勝岳爆發概報
田中館秀三 ……17
十勝日誌
松浦武四郎著、丸山道子訳 ……15
登高者
著　大島亮吉　編　安川茂雄 ……30
登山ガイド　1974 年版
旭川山岳会 ……23
登山ガイド　1986 年版
旭川山岳会 ……23
登山講座　第５巻
編　川崎隆章 ……15
登山歴程
児島勘次 ……20
突兀七千有余尺　庁立旭川中学校校歌雑考
栃木義正 ……20
ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第１～第３話編
上川支庁・上川中部広域市町村圏振興協議会 ……13
ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第４～第６話編
上川支庁・上川中部広域市町村圏振興協議会 ……13
夏山登山教程
編　山岳会「クーラカンリ」 ……23
ナナカマドの挽歌
秋庭ヤエ子 ……20
日本山岳會　會報（一～一〇〇）復刻版
日本山岳會 ……37
日本の高山蝶について
塚本珪一 ……37
日本の山河
緑川洋一 ……26
日本の山河　水墨の詩
緑川洋一 ……26
日本の山岳　登頂跡誌
編　松浦勇次　大西敏夫 ……20
日本の名山　四季の山容を探る
編　奥村芳太郎 ……26
日本の名山　北海道編
監修　鈴木修、編　足立朗ほか ……26
日本の山
著　槇有恒ほか、編　高橋清見 ……26
日本百名山スケッチ紀行
若松直 ……26
日本百名山登山案内
伊藤健次ほか ……23
日本列島
濱谷浩 ……26
ヌタツク　１号
編　大戸昌雄 ……37
ヌタツク　２号
編　吉村重文 ……37
ヌタック（第２次）１～６号
ヌタック会 ……37
ヌタプカムシペとニセィカウシペ
村上啓司 ……17
残された山　杖の頂
一原有徳 ……30
のぼるべ　創刊号
編　堀井克之ほか ……38
ハイカー
編　山と渓谷社 ……33
花の百名山　登山ガイド
WALK CORPORATION ……24
花風景　北海道
梅沢俊 ……26
遙かなる山　Ⅰ～Ⅴ
閑良屋会 ……26
秘境層雲峡　仙境の思い出
原田豊 ……27

ビスターリ　５号
ビスターリ編集部 …… 33
日高山脈の先蹤者　相川修遺稿集
編　高澤光雄 …… 22
日高の山名について　写真集『日高山脈』別刷
村上啓司 …… 27
雑誌『風土』創刊号
編　伊藤徹秀 …… 34
部報　第２号
編　服部勝宗 …… 38
部報　第３号
編　服部勝宗 …… 38
部報　第４号
編　服部勝宗 …… 38
ふるさとの富士 200 名山
写真・文　吉野晴朗 …… 27
平原の手帖　13 号
編　千葉章仁 …… 34
歌集『米寿碌碌』
遠藤一郎 …… 30
ぺたぬぅ　９号
編　ぺたぬぅ発行委員会 …… 30
北大山の会　会報
編　北大山の会 …… 38
北海道　花の散歩道
梅沢俊 …… 27
北海道　花の散歩道　（改訂版　続）
梅沢俊 …… 27
北海道一般スキー八十年の歩み
栗林薫 …… 20
北海道医報創刊 1000 号記念写真集
編　西信博 …… 38
北海道から　第３号
山根対助 …… 15
北海道教育大学 大雪山自然教育研究施設研究報告
北海道教育大学大雪山自然教育研究施設 …… 18
北海道高山植物図譜　附菌類
小泉秀雄 …… 18
北海道　沢登りガイド
岩村和彦 …… 24
北海道山岳
発行人　新妻徹 …… 38
北海道山村経済の実態　上川郡上川町の調査報告
編　北海道総合開発委員会事務局 …… 15
北海道　自然と人
編著　八木健三、辻井達一 …… 15
北海道史の歴史
高倉新一郎 …… 15
北海道地名一覧
栃木義正 …… 18
北海道中央高地の地学的附図
小泉秀雄 …… 40
北海道中央分水嶺踏査記録―宗谷岬から白神岬まで
編　高澤光雄 …… 20
北海道中央分水嶺踏査　余話
編　滝本幸夫 …… 20
北海道・東北ふるさと大歳時記
編　角川文化振興財団（加藤楸邨） …… 30
北海道と環境保護
編　札幌学院大学人文学部 …… 15
北海道の碑
東延江 …… 30
北海道の環境を守るために
編　北海道警察本部生活安定部 …… 20
北海道の自然をあるく
編　北海道新聞社販売促進部 …… 24
北海道のスキーづくり
佐藤徹雄 …… 18
北海道の地名
北海道地方資料センター …… 15
北海道の伝説
編著　更科源蔵、渡辺茂 …… 16
北海道の森林
北海道 …… 27
北海道の山
清水一行 …… 34
北海道の山と雪
加納一郎 …… 30
続『ほっかいどう百年物語』
ＳＴＶラジオ …… 22
続々『ほっかいどう百年物語』
ＳＴＶラジオ …… 22
第五集『ほっかいどう百年物語』
ＳＴＶラジオ …… 22
北海道文学散歩　道北編
編　木原直彦 …… 30
北海道・緑の環境史
俵浩三 …… 18
北海道名所旧蹟
千葉萬葉 …… 24
北海道　雪山ガイド（増補新版）
北海道の山メーリングリスト …… 24
北方風物　第一輯
編　更科源蔵 …… 34
POPEYE　第 38 巻第２号
編　木下孝浩 …… 34
松浦武四郎紀行集　下巻
編　吉田武三 …… 22
松浦竹四郎の山岳画
村上啓司 …… 38
村井米子追悼集
編　日本山岳会婦人懇談会有志 …… 21
明治の山旅
武田久吉 …… 30
森のひと　どろ亀さん
米村晃多郎 …… 22
森林【もり】への招待
㈶北海道森林整備公社 …… 40
野帳
編　早川禎治 …… 38
続・野帳
編　淡川舜平 …… 38
第二次　野帳
編　早川禎治 …… 39
山　復刻版全６巻
石原巖 …… 39
山愛の記
村井米子 …… 31
山恋う母娘
編・著　遠藤一郎 …… 31
山ことば辞典
著　岩科小一郎　編　藤本一美 …… 16
山旅歌集
渡辺公平ほか …… 31
山道具が語る日本登山史
布川欣一 …… 21
山と渓谷　総索引 1-379 号
能勢信二、丹羽素雄 …… 34
山と旅　大正・昭和編
編　近藤信行 …… 31
山とともに在り
山川力 …… 31
山と雪の日記
板倉勝宣 …… 21
山脈越えて　創立五十周年記念誌
編　札幌山岳会 …… 39
山のあなたの空遠く
西信博 …… 31
山のあなたの空遠くⅡ
西信博 …… 31
山のあなたの空遠くⅢ
西信博 …… 31
山の本販売目録
編　茗溪堂 …… 16
山への挑戦―登山用具は語る―
堀田弘司 …… 21
山・やま事典
編　第二アートセンター、監修　近藤信行 …… 16
山行手帖　おいらく山岳会 30 周年記念号
編　おいらく山岳会 …… 39
山を読む事典
編　徳久球雄 …… 16
雪山登山ルート
西田省三 …… 24
吉積長春遺作展　図録
編　真鍋光男ほか …… 27
流域をたどる歴史　第一巻
編　豊田武ほか …… 31
利用者の利用体験に対する態度に基づく自然公園の管理方策
小林昭祐 …… 17
わが心の上川　Kamikawa On My Mind
上川町役場企画総務課企画グループ …… 24

月刊　わが北海道　３－８
編　河原昌春　……34
私の中の深田久弥　「日本百名山」以降の北の山紀行
滝本幸夫　……31
私のラバさん　酋長の娘
安細和彦　……32

文献書誌の分類にあたって

文献書誌の分類、執筆については、専門家である清水敏一さん（岩見沢在住）にお願いしました。

本に関する基本的な情報は、①著者、編集者②発行者（社）③発行年④本の分類記号⑤内容の要約文（要約文中の人名敬称は略しました）－を基本としました。分類記号は、日本図書館協会が採用する「日本十進分類法（NDC）」です。図書や資料を収集、管理するときの基本的な分類記号で、図書の貸し出しや、目的の本を探すときに図書館の書棚のどこにあるかが分かり易くなります。分類記号を付ける作業にあたっては「文化交流館」のスタッフに協力いただきました。

なお、大雪山に関する本の収集の充実は継続していきますので、ご意見、情報を東川町へお寄せください。

小泉秀雄の貴重な手書き資料集

縦 28センチ×横 38センチのアルバム形式で、表と裏の表紙に布張り厚紙を使い、中はレントゲン用紙を包んでいたような黒紙を下地に使って総ページ数は 51 枚、紐で綴じている。

小泉秀雄の旭岳山頂と後旭岳山頂のスケッチ（縦 119mm ×横 165mm を 75%に縮小して掲載）

世の中に一冊だけの文献

北海道中央高地の地學的研究附圖
名付けた山々のスケッチ 56 枚

「北海道中央高地の地學的研究附圖」は、大雪山の峰々にまだ名前が付いていなかったころに小泉秀雄が大雪山に何度も入って調査し、山並をスケッチしながら一つひとつの峰に山名を付けた研究の付図で、大正七年六月下旬に旭川中学校博物研究室（現・北海道旭川東高校）で、小泉によってまとめられた。

小泉はこの年、大雪山での研究結果を日本山岳会に寄稿しており、機関誌『山岳』に掲載が決まっていた。『山岳』は会員の寄稿や登山情報などをたくさん集めて編集されていたが、小泉の寄稿は内容が深いうえに膨大な記述量だったため、第 2 号と第 3 号を合併号したうえさらに小泉以外の寄稿は一切載せない、いわば、特集号の体裁になった。『山岳』がひとりの原稿で埋められ、二冊分をまとめた合本で発行されたのは後にも先にも小泉のこの一回きりである。

特別扱いされながらも小泉にしてみれば、地図やスケッチをたくさん載せて、よりビジュアルな編集を望んでいたに違いない。しかし、掲載を期待していた手書きの地図や山並みのスケッチはあまりにも点数が多過ぎたため、掲載は見送られた。つまり、スケッチのほとんど全てがボツになって送り返されてきたらしい。

研究附圖に小泉が書いた序があるので、一部現代表記にして紹介する。

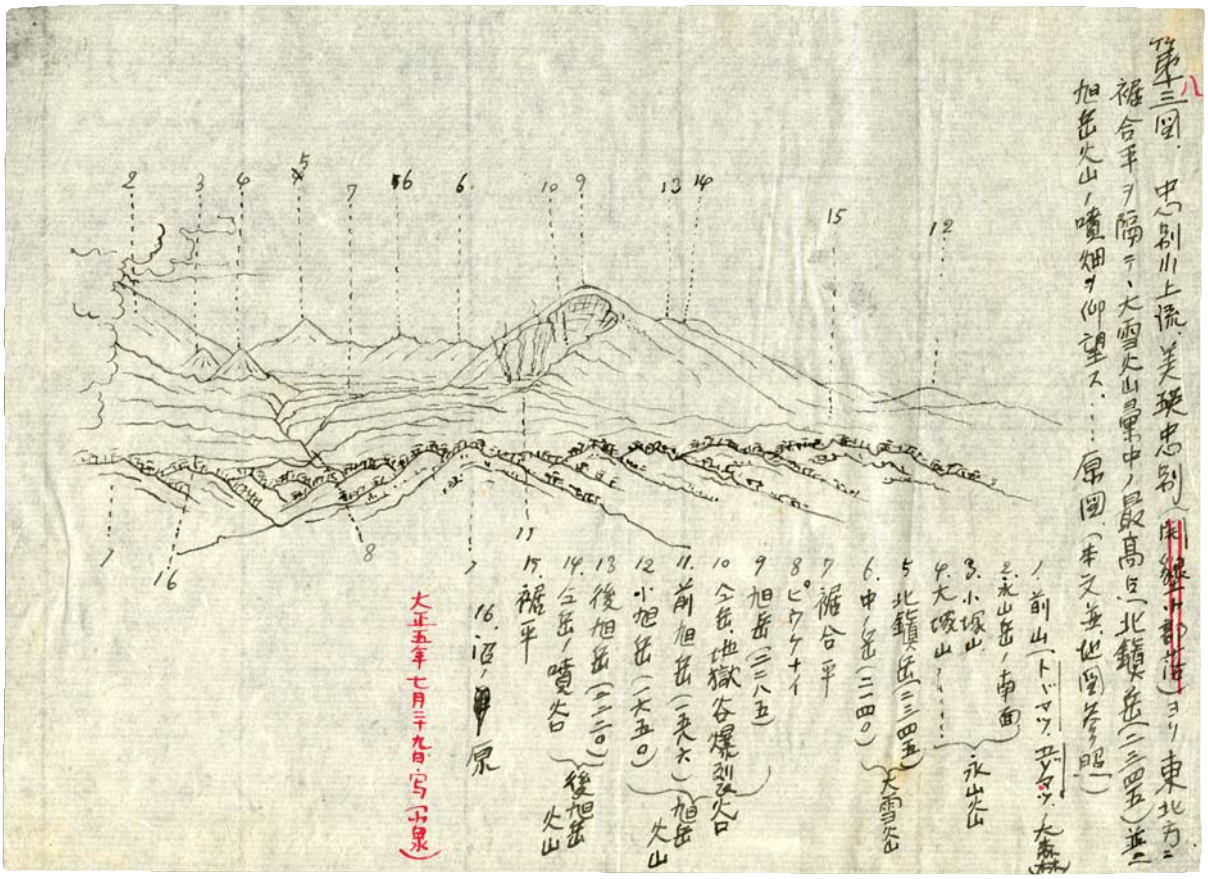
「余は渡道以来年々職務上自己の研究の必要と生来の趣味とにより北海道の山野を跋渉し、地理、地質、植物、動物、岩石、鉱物など自然界の研究に努めしが、年々その結果を記述せし原稿はこれを纏めて『北海道中央高地の地学的研究、附北海道地体構造概論』と題して日本山岳会より本年七月中に出版することとなれるは余の喜ぶ所なり。而して、該研究中には、地図、地形図、写真など合計百数十枚あれども山岳会の都合により、地図を除きて他の図版は全て（原文は「凡て」）のその挿入を許さざる事情あるをもって余はこれらを集めて一冊とし『北海道中央高地の地学的研究附図』となせしもの即ち本書なり。」

つまり、日本山岳会は小泉が手書きした精緻な地図や地形のスケッチ、写真を使わなかったけれども、これらは、大雪山を解説する小泉の原稿にはなくてはならないものであり、返されてきたスケッチや写真だけを集めて特別に一冊、自分で作った、というわけである。東川町が保存するアルバム形式のこの一冊は、小泉の思いがこもった、世の中にこれしかない貴重な文献といえる。

手書きの地図は第一図、第二図の 2 枚、山名を書き入れた山並みスケッチは第三図から第五十八図まで 56 枚もある。下地の黒紙に 1、2 枚ずつ貼り付けて 28 ページになる。最も大きな地図は縦 20㌢×横 28㌢の「北海中央高地（北海アルプス）地方地形詳図」で、説明文に縮尺六十万分ノ一とある。大雪山の主要山名、標高などのほか郡、町村名や郡境を詳細に記入し、赤ペンで鉄道や噴火口を書き入れ、川筋を紫色で記入している。小泉の文字は読みやすいが虫眼鏡で見なければならないような極細文字もある。

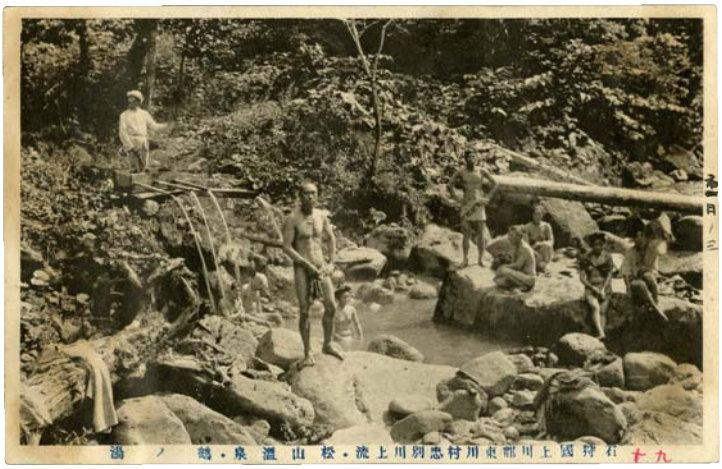
山並みスケッチの中で興味深いことは、北鎮岳（二三四五米）が旭岳火山（二二八五米）より

高いことで、小泉は第十三八図の説明に「大雪火山彙中ノ最高点北鎮岳」と明記している。当時、出回っていた地図による間違いと思われるが、このため、日本山岳会の機関誌『山岳』に載った『北海道中央高地の地学的研究』でも北海道の最高峰を北鎮岳としている。（下図原寸は 119mm × 165mm）



『大雪山調査會』が大正十五年に発行した小泉秀雄著『大雪山登山法及登山案内』では、旭岳が北海道最高峰の二二九〇、北鎮岳が二二四六に改められている。ちなみに『大雪山登山法及登山案内』も 409 ページ、厚さが 3㌢にもなる膨大な情報量の大作である。

図譜の後半の黒い下地 23 枚には写真と絵はがきが貼ってある。26 枚の写真は、上川土木派出所所員、多田純二氏ほか数名が撮影したものを、同派出所の好意で小泉が複写した。霊山碧水峡（現・層雲峡）の雄滝、雌滝（銀河、流星の滝）、小函、大函などがあり、勝仙峡（現・天人峡）の写真は羽衣の滝、大滝（敷島の滝）など。



絵はがきは『旭屋書店』と『東川村某店』の製作販売に係るもの（序から）で、19 枚のすべてが忠別川上流と天人峡の写真はがき。松山温泉、ヤマベ魚淵、羽衣の夫婦瀧、七福岩などで、中に『東川大雪山　登山記念　大正　年　月　日』の紫色のスタンプを押した未使用の 3 枚があり、貴重な史料でもある。

天人閣支配人40年、大門金光の幻の原稿

大門 金光

明治 45（1912）年、美瑛町原野 15 線南 2 番地生まれ。庁立永山農業学校（現・旭川農業高校）卒業。美瑛村美沢小学校と東川村青年学校で教壇に立った後、教職を辞して東川村農業会技術員となり、応召。戦後、農協参事などを経て昭和 25 年、「天人閣」に支配人として迎えられ、昭和 63 年 6 月に退任するまでの間、東川観光協会副会長、天人峡観光協会会長、天人峡勇駒別温泉旅館組合長、日本観光旅館連盟旭川支部副支部長などを歴任、知事から北海道観光功労者表彰受賞（昭和 61 年）。平成 10（1998）年死去。

天人峡温泉の老舗『天人閣』支配人を約 40 年間勤めた故大門金光が書き残した原稿がある。表題は無いが内容は「自分史」である。あるいは「天人閣史」を書くつもりだったのかもしれない。それを示唆するのが平成 7 年 5 月、入院中に思い出すままに書いた「天人峡温泉株式会社と私」の一文であり、その末尾に「詳細に記入の天人峡の歴史を見てください」とある。大門がいう「詳細に記入の天人峡の歴史」がおそらくこの原稿ではないだろうか。

大門の手書き原稿をワープロ打ちした旭川市内の企画・印刷会社『総合企画』代表取締役会長、宗万忠さんによると「天人峡温泉を下りた大門さんは旭川市 1 条通 5 丁目の本社（明治屋）に通って書いていた。自宅で書くこともあり、それぞれで書いた原稿を綴じることもなく、ばらばらのまま渡されたので、順序が良く分からないままワープロで打った。達筆が過ぎて判読できない漢字が混じっていた」と振り返る。

ランプ生活の温泉に電気を引いたこと、西部劇の幌馬車のようなトラックを走らせたこと、馬橇（そり）と氷橋で難儀したこと、熱帯産の魚・ティラピアを飼ったきっかけ。原稿を埋もれたままにするには惜しい。抜粋して紹介する。

昭和十八年八月、自家発電所完成

毎日のランプ生活、それに戦時中にて灯油も配給となり客室の灯火は午後九時で消灯、夜間は廊下と脱衣室と浴場のみの状態であった。当時、佐藤門治社長の父、佐藤音次が時々温泉にこられてランプの生活で、かつ九時で消灯するなんぞしておる状態では客が減る一方だ、門治は如何にも山の温泉らしくてこの方が良いと言っているが私が発電にかかる費用を全部負担するからあなた（注釈：大門金光は昭和十七年夏からアルバイトで帳場を手伝っていた）の力で発電所を造ってほしい、使用料金は灯油の料金だけ支払ってくれれば良いとのこと。さっそく札幌の北海水力電気会社を訪問し電気機具及び工事一切を請け負ってもらうことにして土木建築工事関係は当方でやることにして早速土木工事にかかる。

昭和 28 年頃の天人閣本館。切妻破風（はふ）や窓枠を白、板壁をセピア色に塗装した。吊り橋の欄干は垂木（たるき）と 8 番鉄線で出来ていたので上下左右に揺れた

大雪館の上流三十㍍の地点にライオン岩と名づけられている大きな岩石があり、この岩の高さを起点にして忠別川右岸上流に木樋を取り付け（長さ八十㍍、幅九十㌢、深さ三十㌢）、岩の横に水槽（一・五㍍×一・五㍍×三㍍）を取り付け、この中にタービンを入れ、その水槽に並べて小屋を建て、五キロワットの発電機と配電盤を据え付け発電設備は完成した。これに対して私と助手、鈴木孝雄（東十号の青年）と二人で約一カ月かかったもので、完成は本当にうれしかった。

二十数個のランプを毎朝、ランプ置き場に集めホヤの清掃、灯油の補給、芯の形を整え、夕方各カ所に配置するのが女中の仕事で中々の苦労であっただけに、いよいよ通電して電灯がついたときには従業員は飛び上がって喜んだものだ。この発電を提唱してくれた佐藤音治は昭和二十三年十一月十二日逝去、享年八十四歳であった。

電線を妻の父、江卸発電所所長に頼み込む

せっかく造った発電施設だが昭和 22 年 8 月 15 日の局地的集中豪雨で流失して、またランプの生活であった。神楽営林署に払い下げを願っていた電柱六十本は用意出来たものの、電線は配給にて一般販売のものは高価で手が出ない。たまたま江卸発電所所長、齋木繁は大門金光の妻の父であり、相談したところ、無籍の線があるのでこれを全部つなげば間に合うんだろうから、旭川の日本発送電（株）の支店長に陳情しては、とのことにて出旭しお願いしたところ後日返答するからとのこと。

江卸発電所建設工事現場で学徒動員の小樽工業高校生と一緒に写る齋木繁（前列右端）と娘、静江（同左端）、静江は後に大門の妻となる。（昭和 20 年）

江卸発電所からＯＫの返答をいただき電線を確保した折から、清流橋上流にて本道初の砂防堰（えん）堤（てい）工事が旭川の荒井組により着工したものの電気導入に困っていると聞かされ、荒井組と交渉の結果、電柱電線を提供し配線工事は組にて施工してもらうことにして十月十五日完成。江卸発電所熊の沢取水口の電柱を分岐点として自家用受電の許可を頂きやっと文化生活ができるようになった。

幌馬車のような GMC が目を引く

昭和二十七年十二月末まで羽衣荘建築中、貨物自動車にて運搬していたので全輪駆動の GMC（アメリカの払い下げ車）なら毎日の運行により雪を踏み固めて行けば除雪なしでも運行出来るだろうとの考えから、東川村市街地にて土建業を営む中川徳之進所有の GMC に金成運転手付きにて借り上げ、乗用車として利用するのでテントを張り、かつ、暖房ストーブも取り付け、特別許可をいただいて運行を開始した。アメリカ映画に出てくる幌馬車に似て、旭川市内を走ると振り返り見る人が多かった。

一月いっぱいは何とか運行したが積雪が多くなるにつれ雪道を広く踏み固めることは出来ず、轍（わだち）どうりに走らなければならず、轍から外れると車の腹がつかえて動かなくなるので、前側に付いているワイヤーを延ばして電柱、または立ち木などにしばりつけて堅い轍に車を上げては走る。

また、轍から外れるとワイヤーで引っ張るというふうに繰り返し繰り返し走ったが、これにはへこたれて二月四日にて断念し急きょ、馬橇(そり)に切り換えた。

厳冬期の川に入って氷の橋づくり

清流橋から天人峡間は道幅が狭く片側は忠別川となっているので積雪によりだんだん川側に道路がずって行く。人力での除雪は容易ではなくなるので氷橋を架け、左岸に移り、三百㍍ほど上流にてまたも氷橋をかけて道路に出て天人橋を渡るように仮道を付けなければならなかった。この時期に川に入って作業することは大変な事であったが支配人がするより他になく、女子従業員には全員出てもらって橋げたに乗せる小枝集めとその上に雪を乗せて水を掛けることを二、三日繰り返して氷橋が出来上がった。誰一人苦情を言う者もなく立派な仮道が出来た。

馬橇(そり)の悲喜こもごも

定期馬橇をお願いすると言ってもなかなか容易ではない。昭和二十五年の最初の年は長年、東川から志比内の定期をやられた清水宅を訪れ、見当をつけてもらって何軒かを訪ね歩いて三日もかかってやっとお願いが出来て一安心。馬の寝藁(わら)から飼料を持って温泉まで来てもらい三月末まで働いてもらうのである。ある年には、馬追いの若い衆が急に下りきりで帰って来ない。翌日の客のことがあるので夜、忠別までスキーで出かけ、しゃにむに臨時に頼みおき、翌日に常雇者を探し歩いた。ときには三月三十一日、切り上げの帰り道、天人橋の下手でズボズボぬかる雪道で馬の足を折ってしまい、東川まで獣医さんを頼みに行き、やっと葬ったこともあった。

美瑛町忠別、武重商店まで定期馬橇があったので十二月初旬から三月下旬までの四カ月で四万五千円にて馬橇を頼み、天人峡温泉に掘立にて倉庫兼馬小屋を建設し、農家の方々が湯治客を馬橇で送ってこられるので馬が二頭泊まれるようにした。馬橇を運行させると言っても当社の馬が一日一往復するだけであったので朝、馬が出かける時に前夜吹雪いておった時には馬の先になって道を開けないと馬の腹までつかえるところが何カ所かあり、熊の沢までの三kmは常に人力で除雪しなければならず、雑役の老人畠山と大門支配人の冬の大仕事であった。

馬は登り一辺倒の道を帰ってくるので汗でビッショリ。馬小屋に入れてから二人で馬の手入れや餌をやり、約一時間はかかる。熊の沢除雪をしながらの帰りで疲れてはいるが馬をこのままにしておけば風邪をひき、翌日の仕事に支障があるのでこれまた冬中の仕事であった。

定期馬橇の中継所として武重商店を利用させてもらったが馬橇から降りた客たちは茶の間を我が物顔で占領し、武重さんの孫たちは寒い座敷に追いやられているのを見る度におじいちゃん、おばあちゃんの温かい心に感激させられた。

玄関横に設けた売店の様子

この頃（注釈：昭和 30 年代前半）は日帰りの団体客が増加してきて玄関横の売店も売れ行きが年々伸びて来た。大阪商人の薦めにより販売した女のヌードを書き入れたタオルが売れて、何回も追加注文をした。菓子の名物として羽衣飴十㌢×十五㌢くらいの大きさで厚さは五㍉くらいのもの。飴色の飴に、白い飴にて羽衣の滝をかたどったもので、東旭川高木商店の製品であった。

また、旭川の竹林菓子店にて製造の蕗（フキ）は長さ五十㌢くらいの蕗五本を四つ折りにて包装したもので、他の製品に比して良く販売された。

夜は第一別館コーヒーショップホールにて電気蓄音機によるレコードの音声と共にバーに早変わりして、飲み物も売れたしダンスも盛んであった。

天人峡遊園地釣り堀について

昭和二十九年四月、松井竹夫（当時、東川村土建業佐々木組の帳場として勤務）は天人峡温泉の名物として虹鱒（ニジマス）の養殖を企画し、天津岩下の平地に孵化養殖場を開設した。千歳孵化場より卵一万粒の払い下げを受け、孵化をさせ第一養殖池（二〇〇平方㍍）にて飼育を始めた。三十年九月には第一養殖池の下手に第二、第三の池を完成し、この年には五万粒の払い下げを受けた。

三十一年、水族館と称して第一養殖池の南側平地に一㍍角の三面コンクリート製、前面にはガラスを入れ、十二個の水槽を並べ、道内における淡水魚十四種を飼育、観覧に供し、ブランコ、回旋塔、遊働円木などの施設をなし、第一養殖池の虹鱒が十五～二十㌢の大きさになったので釣り堀を始めたのである。この年には卵十万粒の払い下げを受けた。十一月に松井竹夫個人経営であったが天人峡温泉㈱に合併す。

魔法瓶にティラピアを入れて東京から運ぶ

人気の露天風呂は、ティラピアを飼っていた温泉池だった

三十二年九月二十八日、農林省水産庁淡水区水産研究所に食用熱帯魚ティラピァモザンピカの払い下げを受けるべく上京したが、この魚はタイから台湾に、それから日本に入れたもので寒い北海道には無理であるとて相手にされなかったが、再三の懇請に根負けして一㌢くらいの稚魚を持参の魔法瓶に五百匹を入れ、途中、国鉄の何カ所かの駅でぬるま湯を追加し無事、天人峡に着き、大浴場の川側に温泉の池を造り（現在の露天風呂）ここに放ったのである。

三十三年五月、産卵発見。以後十二の生簀（いけす）を造り飼育を始めたのである。産卵稚魚の飼育はまず雄魚が池の底に直径五十㌢、深さ二十㌢のくらいの穴を掘り、雌を誘導して来ると雄は穴の周りを警戒して泳ぎ回り、雌が七十から五〇〇粒（親の大きさにより粒数に差がある）の卵を穴の中に産み落とす。雄は直ぐ受精し、終わると雄は卵を口の中に入れて口中にて孵化し、稚魚になると穴の中に吐き出して育てる。しかし、共食いの習性があるから他の魚が近づくと雄は稚魚を口中に吸い込み、外敵がおらなくなると吐き出して穴の中で遊ばせる。

二十日ぐらいすると稚魚は穴から出て群れをなし自由に泳ぎ回るようになると完全に他人となり親は次の産卵を始める。稚魚は三カ月位にて親となり、まずは最初七十粒位を産卵するが繁殖力は物凄いものである。

しかしながら湯量に限度があるので七㌢から八㌢くらいになると唐揚げし、大きいものは刺身、洗いにして食膳を飾り、味は淡泊で珍しいとて天人峡名物として大好評であった。このことを知っ

た農林省淡水区研究所所の島津副所長が来泉し詳細なる資料をまとめて帰るなど、新聞、テレビなどもニュースに取り上げてくれたので一躍有名になった。

三十六年、勇駒別湯沼（2700平方㍍）にて大量生産したいとて神楽営林署、金尾署長の許しを得て放魚してみたところ成育が良好。即ち養殖の商品化には鯉は三年、かつ年一回の産卵、虹鱒も出荷までには二年はかかる。その点、テイラピァは年十回以上の産卵、半年で商品化されるので企業として計画を樹立、湯沼下手の湿地帯を五㌶ほどの借地を願い出たが営林局で認めてもらえずとの署からの返事にて直接局長に社長と共に陳情したが残念ながら断念す。

三十七年八月の集中豪雨の際、天津岩上の崩落により立木、土砂など一度に流出して来たものが第一養殖池に入り、池の水を全部押し出したので魚は忠別川に流され、池は立木や土砂ですっかり埋められてしまった。後日、営林署で遊園地、釣り堀などとしては今後の危険を加味し返地せよとのことにて原形に復し、返地を為(な)し、勇駒別湯沼も許可ならず、残念ながら養殖部門は中止のやむなきにいたり、松井竹夫責任者は大きな希望を失われ退職、旭川にて独立開店した（有）旭川淡水魚と活魚の卸小売ペットショップ松井は繁盛の一途をたどっている。

熊撃ち名人を伴って奥天人峡の探検

温泉郷より忠別川を溯ること約5㎞の地点には忠別川と白雲川の合流点があり、この地までの景観は日本屈指のものであると昭和二十六年、電源開発公社調査隊長から聞かされていた。その後、忠別川の水は発電に利用され地中引水にて温度の低下が問題になり、この調査を東川、東旭川、東神楽三町と土地改良区により行われた際、この地の絶景が知られていた。

天人峡開発の話しが出ると奥天人峡が話題に取り上げられ遂に八月七日、探検隊は東川村役場前を午前五時出発、中川課長、木村重太郎観光協会副会長、協会役員の村議と職員二名の顔ぶれで途中、美瑛忠別の熊撃ちの名人佐藤与之助の同行を願い、天人峡から誰も同行せんとはとお叱りを受け（支配人は足を悪くしておったので同道は皆さんにご迷惑を掛けるからと思っていた）歩けなくなったらおぶってやるからとてご一緒させてもらった。

川伝いでは三カ所、川を渡らなければならぬところがあるのでトムラウシ登山道を登り第一公園から左に折れて川伝いの山の中笹薮を漕いで歩いた。もう合流点に近付いただろうと川側まで行って見ると百㍍近い崖だ。またしばらく歩いて覗いて見ると相変わらず崖の上、やっと雨水のチョロチョロ流れている小さな沢にたどり着き、これを下って行くと合流点だった。

素晴らしい景観。今までの疲れは吹き飛んでしまう。合流点の両側は切り立った大岩壁、水は青くどんよりと流れ、合流点を出ると岩を噛む轟々(ごうごう)たる流れ。付近を見ると湯華の固まったような地形もあり、ただただ凄い、凄いの連発。

その後、神楽営林署に出向き合流点までの笹刈り道路を付けてもらいたいと願った結果、予算がないので五万円ほど応援してくれれば何とかしようとのこと、協会も予算がなく、村費支出を頼んだがこれもダメ、奥天人峡は今も眠っている。

受け継がれて41年　カレンダー「大雪山の四季」

―――　営林支局、高橋秀雄さんから写真家、後藤昌美さんへ　―――

『大雪山の四季』カレンダー13作目に

15作まで目標と高橋さん

旭川営林支局の元広報マンとして林野弘済会から発行、高橋秀雄さんと三十年間、旭川、旭川営林支局の広報担当だった故

半世紀を超える研究、学習の歴史

北海道教育大学大雪山自然教育研究施設

大雪山は学芸大学（現・教育大学）の教官や学生たちにとって夏山登山、冬山スキー訓練、自然科学の学問的研究の場として長く活用されており昭和 28 年ころから、大自然の中に、自分たちで自由に使える研究基地がほしいという機運が生まれてきた。旭川分校後援会（佐藤門治会長）が寄付を募り、建設資金 158 万円を積み立てて昭和 35 年 10 月、「北海道学芸大学大雪山科学研究所」が完成した。道有地を借り、「勇駒別温泉郷の中でも、とくに泉質の優れた温泉が豊富に得られる地点である」（研究報告第 26 号別冊・沿革から）。国立公園の中に、かけ流しの露天ぶろ付き研究施設があるのは「日本広しと言えども我が大学だけだ」と胸を張る教官が多かった。

昭和 45 年、「大雪山自然教育研究施設」と名称を改め、旭川分校の所管となった。昭和 55・56 年ころ、国の行政改革と大学の緊縮財政計画の中で廃止の危機に直面したが、大雪山の雄大な自然の中で教育者を育てる環境が評価されるなど関係者の努力が実って昭和 62 年、カラマツ材を基調とする瀟洒な建物に改築された。木造地下 1 階、地上 2 階建て、272㎡。研修室 2 部屋、和室、研究実験室、資料室、食堂などがあり、宿泊人数は 14 人。利用者は開設当初から「自分自身で生活する」のが信条で、自炊となっている。

大雪山自然教育研究施設

教員・学生の合宿、ゼミなどの利用に加え、一般にも開放されており、スキー合宿や自然学習、野外観察実習などに活用できる。

半世紀を超えた施設にはさまざまな想いが詰まっている。開設間もない昭和 37 年 6 月 29 日、十勝岳大噴火の時、「稜線の中腹から絶えまなく立ち登る噴煙は西風に流されてあたかも劇場の大緞帳のように見え、その中ほどでは火山灰の摩擦で生ずる雷が、稲妻を伴って鳴りひびいておりました」（施設研究報告第 21 号：当時の施設長、桜井兼市）姿見の池から連続写真を撮りまくったとある。その年の大晦日、函館分校山岳部の 11 名が旭岳で遭難、施設は正月返上で救難本部となった。

大学の研究施設であることから膨大な研究論文が積み上げられてきた。昭和 37 年創刊の「大雪山自然教育研究施設研究所報告」は第 49 号を数え、植物学、動物学、気象学、地球物理学、地質学、生化学、体育学など研究論文は多彩である。

平成 8 年 4 月から Web page が開設され、研究報告の全号の目次情報、第 30 号以降の研究報告全文をデータベース化したのでインターネットで検索が出来、PDF 書類として高解像でプリントも可能になった。

◆ 利用（宿泊を含め）の問い合わせ、申し込み

北海道教育大学事務局旭川校室財務グループ

〒 070-8621　旭川市北門町 9　電話 0166(59)1214　ファックス 0166(59)1220

E-mail：asa-zaimu@j.hokkyodai.ac.jp.

大雪山自然教育研究施設 Web page　http：//taisetsu.asa.hokkyodai.ac.jp/

北海道学芸大学大雪山科学研究所報告
（北海道学芸大学大雪山科学研究所）

第一巻　第一号（昭和 37 年 3 月）

大雪山彙のフロラ（註釈 1）の研究　Ⅰ 白雲岳及びその附近の植物小誌	稲垣貫一・豊国秀夫
大雪山の気象（Ⅰ）特に降雨を中心とした	桜井兼市
湧駒別に於いて飼育されるテイラピア モサンビーカの生態、特に食性について	小林弘・牧幸男
大雪山のヤブカ Ochlerotatus　亜属 2 種	佐藤正三
大雪火山周縁の堆積層及び変成 岩の花粉分析学的研究	井口休夫
湧駒別課外活動スキー訓練・セ ミナーにおける疲労について	須見芳紀
湧駒別温泉附近の地温（予報）	諸橋清一
大雪山旭岳ユコマンベツ沢水系 のプラナリア（註釈2）の調査概要	山田達也・丹治寿雄

（註釈 1）フロラ：植物相のこと。（註釈 2）プラナリア：細切れにしてもそれぞれの個体から再生する動物。繊毛運動で渦を作るのでウズムシと呼ばれる。水質変化の指標生物。

第二巻　第一号（昭和 38 年 3 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅱ	稲垣貫一・豊国秀夫
大雪山彙のフロラの研究　Ⅲ	稲垣貫一・豊国秀夫 松永圭朔・斎藤孝志
大雪山の気象　（Ⅱ）	桜井兼市
湧駒別温泉の地温について	諸橋清一
大雪山系ひさご沼及び姿見の池における 蚊類の吸血活動に関する生態学的研究	佐藤正三・沢田勇
大雪山科学研究所周辺の基本地図の作製	岡本次郎・小杉健三・今井敏信

第三号（昭和 39 年 3 月）

大雪山植物雑記（その 2）	稲垣貫一・豊国秀夫
大雪山彙のフロラの研究　Ⅳ	稲垣貫一・豊国秀夫・野坂志朗
大雪山彙のフロラの研究　Ⅴ	稲垣貫一・豊国秀夫・成田静雄
大雪山牛朱別川及び安足間川水 系の淡水産プラナリア	山田達也・丹治寿雄
大雪山の気象　（Ⅲ）	桜井兼市
大雪山天女ケ原泥炭地について	岡本次郎・小杉健三・今井敏信
スキー・ワックス（パラフィン） の効果について	安井孝司

第四号（昭和 40 年 12 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅵ	稲垣貫一・豊国秀夫 松永圭朔・滝薫・土肥芳明
大雪山石狩川水系の淡水産プラ ナリアの生態調査報告	山田達也

北海道教育大学大雪山科学研究所報告
（北海道教育大学大雪山科学研究所）

第五号（昭和 41 年 12 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅶ	稲垣貫一・豊国秀夫・浅利栄吉 永井延和・笠原義幸・小田島奉子
大雪山系高原温泉付近の蚊	佐藤正三・建脇宏安
大雪火山周縁の堆積物の花粉分 析学的研究第二報	井口休夫・百町智美

第六号（昭和 42 年 12 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅷ	稲垣貫一・豊国秀夫 清尾徹・鶴舎博
大雪山系銀泉台付近の蚊	佐藤正三・建脇宏安
大雪火山周縁の堆積物の花粉分析 学的研究　白川褐炭の花粉分析	井口休夫・猪又洋明 尾崎忠顕

第七～八号（昭和 44 年 6 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅸ 赤岳及びその近接地域植物小誌	稲垣貫一・豊国秀夫 武隈幸平
大雪山彙のフロラの研究　Ⅹ 大雪山高山帯産シヤクナゲ科植物誌（1）	稲垣貫一・豊国秀夫
十勝岳火山群富良野岳の特記す べき植物について	稲垣貫一・豊国秀夫 山下進
大雪山系愛山渓付近の蚊	佐藤正三・建脇宏安・富田征・横浜拓哉 北海道教育大学旭川分校生物学教室
ドライアイス法による大雪山系 の蚊類の活動性の研究	佐藤正三・本間武・前鼻尚樹・北 海道教育大学旭川分校生物学教室
大雪山牛朱別川、忠別川及び石 狩川水系の淡水産プラナリア	柳田欣作・北海道教育大学 旭川分校生物学教室

北海道教育大学大雪山自然教育研究施設報告
（北海道教育大学大雪山自然教育研究施設）

第九号（昭和 49 年 12 月）

大雪山系東大雪の蚊	佐藤正三・建脇宏安・富田征
大雪山オサラッペ川水系の淡水 棲プラナリア	柳田欣作

第十号（昭和 50 年 10 月）

道北地方における蚊類幼虫の生態学的研究 1. 蚊類幼虫の棲息水域について	佐藤正三・市原俊尋 竹内光日出・井戸尚貴
道北地方における蚊類幼虫の生態学的研究 2. 蚊類幼虫の群集構造について	佐藤正三・市原俊尋 竹内光日出・井戸尚貴
大雪山江丹別川水系の淡水棲プラナリア	柳田欣作
大雪山地域の地形分類（Ⅰ）	小杉健三
大正時代の大雪山での気象観測	桜井兼市

北海道教育大学大雪山自然教育研究施設研究報告
（北海道教育大学大雪山自然教育研究施設）

第 11 号（昭和 51 年 10 月）

大雪山北部の高山植物群落（1） 大気温度、土壌温度、土壌酸度、及び ハイマツ―コケモモ群集の循環変化	伊藤浩司・西川恒彦
北日本産キンバイソウ属植物の 花の形質変異	西川恒彦

第 12 号（昭和 52 年 10 月）

大雪山北部の高山植物群落（2） 植物群落の分類	伊藤浩司・西川恒彦
大雪山系白水沢の動物調査	佐藤正三・石川信夫 建脇宏安・富田征

第 13 号（昭和 53 年 10 月）

キタヤブカ Aedes(Ochlerotatus)hexodontus とチシマヤ ブカ Aedes(Ochlerotatus)Punctor の形質変異について	佐藤正三・神田英治・斉藤涼子 藤原和子・中村千賀子
北海道産植物の染色体数（1）	西川恒彦

第 14 号（昭和 54 年 10 月）

浜佐呂間産チシマヤブカ Aedes (Ochlerotatus)punctor の形質変異について	佐藤正三・源川久美子
北海道産植物の染色体数（2）	西川恒彦
完新世の気候変動と大雪の古沼堆積物（予報）	平一弘
極地域の雪・氷晶の構造（抄録）	桜井兼市・オータケ・タケシ

第 15 号（昭和 55 年 10 月）

北海道の森林植生概要（Ⅰ）	伊藤浩司
北海道産植物の染色体数（4）	西川恒彦
無意根山大蛇ケ原湿原の植生 北海道高地湿原の研究（Ⅲ）	橘ヒサ子・佐藤謙・伊藤浩司
穂別産キタヤブカ Aedes(Ochlerotatus) hexodontus の形質変異について	佐藤正三・伏見純子

第 1 － 15 号（昭和 56 年 9 月）
北海道教育大学自然教育研究施設研究報告総目次 第1−15号
（1962-1980）

第 16 号（昭和 56 年 10 月）

北海道大沼公園付近産 Aedes(Ochlerotatus) punctor Subgroup の蚊の形質変異について	佐藤正三・伏見純子 佐々木邦子
大雪山系勇駒別及び姿見付近の鳥類調査	佐藤正三・石川信夫
大雪山天女ケ原の湿原植生 北海道高地湿原の研究（Ⅳ）	橘ヒサ子・佐藤謙
北海道産植物の染色体数（5） タイセツタカネニガナ（新称）	西川恒彦
大雪周辺の第４系（1）	平一弘

第 17 号（昭和 57 年 12 月）

ティラピア・モザンビカ背筋筋原線維の構造蛋白質	浅川哲弥
北海道産植物の染色体数（6）	西川恒彦
松山湿原の植生 北海道高地湿原の研究（Ⅴ）	橘ヒサ子
天人峡瓢箪沼の湿原植生（予報）	橘ヒサ子・佐藤謙

第 18 号（昭和 58 年 12 月）

大雪山系沼の原の湿原植生 北海道高地湿原の研究（Ⅵ）	橘ヒサ子・佐藤謙
大雪山系の第４紀（2）	平一弘
旭川周辺の大気中の固体粒子の観測（1）	桜井兼市・大野伸仁・川尻智洋・西山優・茂垣之弘

第 19 号（昭和 59 年 12 月）

ティラピア背筋ミオシンの ATPase 活性	浅川哲弥・中野孝幸
大雪山系沼の平の湿原植生 北海道高地湿原の研究（Ⅶ）	橘ヒサ子・小川泰弘・佐藤謙
大雪山系の第４紀（3）	平一弘
施設だより　施設の経過と現況について	今村源吉

第 20 号（昭和 60 年 12 月）

大雪山系原始ケ原の湿原植生 北海道高地湿原の研究（Ⅷ）	橘ヒサ子・佐藤謙
松山湿原におけるアカエゾマツ林の構造	橘ヒサ子・花田英世・粥川昇・矢野浩司
旭川周辺の大気中の固体粒子の観測（2）	桜井兼市
施設だより　施設の意義と将来	今村源吉

第 21 号（昭和 61 年 12 月）

ティラピア背筋ミオシンの ATPase 活性　2	浅川哲弥・織田幸恵 吉田忍
ザリガニアルギニンキナーゼの調製とその性質	矢沢洋一・安部公子 鯨岡みのぶ
暑寒別岳雨竜沼湿原の植生	橘ヒサ子・佐藤秀之
ジオイド（註釈 3）の変形と火山活動	平一弘
施設だより　旧研究室の思い出	桜井兼市
施設だより　山での生活から	三浦浩

（註釈 3）ジオイド：測地学の用語。海面の平均値に近い面で標高の基準となる。

第 22 号（昭和 62 年 12 月）

完新世火山活動とジオイドの変形	平一弘
ザリガニアルギニンキナーゼの性質	矢沢洋一・山本弓子・武田理恵
冬期旭川での Heat island の構造	桜井兼市
走査電子顕微鏡によるミズゴケ類の枝葉の観察	橘ヒサ子・木村一枝
施設だより　ソクラテスの庭	上岡宏

第 23 号（昭和 63 年 12 月）

廻転による地殻変動とジオイドの変形	平一弘
雌阿寒火山降下軽石スコリア層の発見と不均質マグマの混合過程	和田恵治・日野智明 春藤大雅
ティラピア背筋アクチンの精製	浅川哲弥・藤坂浩美
日本ザリガニアルギニンキナーゼの酵素的性質	矢沢洋一・畠佐和子 熊崎ゆかり
登山者の踏みつけによる浮島湿原の植生と土壌環境の変化	橘ヒサ子・高梨智之 尾崎雄一
施設だより　障害児と自然	古川宇一
施設だより　釧路分校の野外実習について	神田房行

第 24 号（平成元年 12 月）

黄砂粒子の氷晶化能力	桜井兼市
極地方における氷床の発達と北部西太平洋における地球内部物質の移動の特性	平一弘
雌阿寒火山阿寒富士玄武岩の岩石学ソレアイト・マグマの２段階混合	和田恵治
差スペクトル法による日本ザリガニアルギニンキナーゼの酵素的性質の検討	矢沢洋一・粟屋博美 辻村るり子
踏みつけによる大雪山系天人が原湿原の植生の変化	橘ヒサ子・林大輔 斎藤員郎
施設だより　インタフェースとしての研究施設	横田正義

第 25 号（平成２年 12 月）

第４紀における弧状列島の隆起とジオイドの変形	平一弘
雌阿寒岳における不均質マグマのフラクタル構造	和田恵治
ティラピア背筋トロポミオシンの精製	浅川哲弥
大正期の北海道の土地利用の復原	氷見山幸夫・綿木尚弘
施設だより　チシマクモマグサ再会	石和貞男
施設だより　旭岳における植物の垂直分布　野外生物学実習記録から	橘ヒサ子

第 26 号　開設 30 周年記念号（平成３年９月）

自然と教育	平一弘
ティラピア背筋トロポミオシンの性質	浅川哲弥・西嶋ゆかり
ニホンザリガニ尾筋の筋肉蛋白質の調製とその性質	矢沢洋一・後藤志のぶ
大雪山系旭岳地域における車道及び観光施設周辺の裸地に侵入した植物について	橘ヒサ子・坂下千佳 竹内健
大雪山、旭岳の地質と岩石	大沼靖治・和田恵治
明治後期―大正前期の土地利用の復原	氷山見幸夫・岩上恵・井上笑子
1998 年オリンピック冬季大会旭川開催の影響に関する研究　―旭川市内教育系学生の意識を中心として	三浦裕・長屋昭義

第 26 号　開設 30 周年記念別冊（平成 3 年 9 月）

要覧・研究報告総目次・施設だより 1、沿革　2、略年表　3、歴代役職員　4、平成 3 年度職員、運営委員会及び研究員の研究題目　5、刊行物　6、施設概要　7、施設利用状況　8、研究用機器・図書　9、使用料及び実費負担金、10、温泉分析書　11、施設案内	
総目次　第 1-26 号	
施設だより　座談会（奥田五郎・東尚巳・櫻井兼市・橘ヒサ子）	
30 周年に想う	今村源吉
開設 30 周年にあたって	櫻井兼市
開設 30 周年を祝う	蒲　雅夫
これからの大雪山自然教育研究施設	平一弘
大雪山自然教育研究施設の将来に向けて	本間謙二
野外活動施設としての今後の役割	速水修
山小屋白昼夢	奥野亮輔
エゾシカのこと	伊藤健雄
勇駒別の思い出	関太郎
旭岳における雪結晶の観測	遊馬芳雄
大雪山科学研究所の思い出	角地敏弘
自然と教育と施設	沢出宗利
研究所時代の思い出	三浦浩
大雪山での思い出	富樫護
旭岳と高山植物	大森誠志
旭岳登山の思い出	竹内健

第 27 号（平成 4 年 12 月）

日本近海における完新世海洋変動	平一弘
大雪山熊ケ岳の縞状溶岩	和田恵治
ミヤマサワアザミの染色体数	西川恒彦
旭岳におけるクロスカントリースキーの事例報告（そのⅠ）スキー滑走中の心拍数	古川善夫・杉山喜一
旭岳におけるクロスカントリースキーの事例報告（そのⅡ）交互滑走における運動学的技術特性に着目して	杉山喜一・古川善夫
パパインによるティラピアミオシンの限定分解	浅川哲弥
ヤツメウナギ骨格筋クレアチンキナーゼの 2 種類のアイソフォーム	矢沢洋一・中島由美子 曾我知美・宇都宮澄子

第 28 号（平成 5 年 12 月）

大正期～現代の北海道の土地利用変化	氷見山幸夫・太田伸裕
大雪山旭岳における森林群落の植物季節学的研究	北川道生・橘ヒサ子
本州産キンバイソウ属植物 2 種の染色体数	西川恒彦
旭岳地獄谷火口における火山噴出物の層序	和田恵治
旭川での酸性雪の観測	櫻井兼市
日本海における完新世海洋変動	平一弘・K. A. ルタエンコ
ザリガニアルギニンキナーゼのcDNAクローニングとその生化学的性質	矢沢洋一・上堂地美佳 横田京子・中村俊
施設だより　大雪山自然教育研究施設の恵まれた立地条件	山下晃

第 29 号（平成 6 年 12 月）

明治・大正～現代の東北地方の土地利用変化	氷見山幸夫・本松宏章
キモトリプシンによるティラピア背筋ミオシンＳ１の調整とその酵素的性質	浅川哲弥・小泉千絵
北海道北部の新第三紀火山岩類のＫ - Ａｒ年代と主成分化学組成	後藤芳彦・中川光弘・和田恵治・鈴木邦輝・氏家敏文
施設だより　人と知的風土	平一弘
施設だより　北海道教育大学大雪山自然教育研究施設の今後の活動について	浅川哲弥

第 30 号（平成 7 年 12 月）

大雪山黒岳溶岩の斜長石の化学組成	和田恵治
天塩川流域におけるカヌー・クラブの実践北海道カナディアンクラブを中心に	前田和司
1930 年代の中国東北部の土地利用	氷見山幸夫・伊藤啓之 菊地隆明・本間寿豪
高速液体クロマトグラフィーによるティラピアミオシン軽鎖の分離	浅川哲弥・坂本真奈美
スキー授業の学習内容に関する基礎的研究一般スキーヤーの安全意識にみる体育倫理的視点の必要性	三浦裕・舘山さおり
ハイパーカードによるスタック「大雪山の自然」	浅川哲弥
東アジアにおける 1 ～ 2 万年前の黒潮の変動	平一弘
北海道産変形菌追加	山本幸憲・西川恒彦

第 31 号（平成 9 年 3 月）

大雪山自然教育研究施設ホームページの作成	浅川哲弥
1980 年頃の中国東北部の土地利用	氷見山幸夫・藤沢雅樹・宮腰唯導
アルペンスキーの安全意識に関する基礎的研究教員養成系課程の学部学生を対象として	三浦裕・伊藤徳之 甲斐美也子
カワヤツメ血清成分の検討	矢沢洋一
東アジアにおける 1 ～ 2 万年前の黒潮の変動（2）	平一弘
留萌で採取された混合粒子の形態	辰口一俊・櫻井兼市
中峰の平の湿原植生（予報）	橘ヒサ子

第 32 号（平成 10 年 3 月）

大雪山系天人が原湿原におけるアカエゾマツ林の構造	橘ヒサ子・濱田陽・林大輔
中国華北平原南部における 20 世紀前期の土地利用の復原	氷見山幸夫・鈴木聡美・早川亜友巳
ティラピア背筋アクトミオシンのDTNB 処理に及ぼす諸条件の効果	相沢直美・浅川哲弥
ニセコ山地神仙沼湿原の植生	橘ヒサ子
雌阿寒岳の岩石の化学組成 ―マグマの多様性	和田恵治・池上宏樹 稲葉千秋
石狩川下流域（江別市周辺）におけるカワヤツメ漁獲量の年次推移	矢沢洋一
1,000 年頃の北太平洋の気候変動の意味	平一弘
施設だより　旭岳ロープウェイの改修	氷見山幸夫

第 33 号（平成 11 年 3 月）

Properties of Tropomyosin from Tilapia,Tilapia nilotica,Dorsal Muscle 2-Comparison of Tilapia Tropomyosin with Rabbit Skeletal Tropomyosin	Tomokazu OKANO and Tetsuya Asakawa
1910 年頃～ 1980 年頃の中国華北平原南部の土地利用	氷見山幸夫・岩本清海 渡辺絵美
大雪山旭岳に侵入した低地植物の種子発芽特性	竹内健・橘ヒサ子
カワヤツメ血漿タンパク質の分離とその性質	矢沢洋一・田浦知子・大平愛子 広瀬季恵・上堂地美佳・山本克博
施設だより　大雪山自然教育研究施設　Web page の改訂計画について	浅川哲弥

施設だより　大雪山自然教育研究施設見学会参加体験記 自然は教室であり先生でもある	川邊淳子

第 34 号（平成 12 年 3 月）

雄阿寒火山混合玄武岩質安山岩から推定される浅部珪長質マグマ溜りと深部苦鉄質マグマ溜り	和田恵治
中国土地利用・被覆変化情報ベースの開発	氷見山幸夫・村田久美 谷藤陽子・佐藤太一
1999 年 2 月に勇駒別で観測された黄砂粒子	濱谷武司・櫻井兼市
施設だより　大雪山旭岳の植物観察記	林一六
施設だより 「施設見学会」に参加して	相馬一彦

第 35 号（平成 13 年 3 月）

カワヤツメヘモグロビンの生化学的研究	北村裕美・中山亨 毎田徹夫・矢沢洋一
旭岳の表層にみられる広域火山灰の化学組成とその給源火山の特定	和田恵治・中村瑞恵 奥野充
雨竜沼湿原木道周辺荒廃地の微地形と植生	橘ヒサ子・高橋勝 佐藤雅俊・佐々木純一
グリセリン存在下のミオシンＡＴＰ ase 活性	田代和孝・立田真弓 浅川哲弥
中国吉林省中部・東部地域の土地利用と諸条件	氷見山幸夫
施設だより　2000 年施設見学の記	大塚美栄子

第 36 号（平成 14 年 3 月）

1900 年頃以降サロベツ湿原の土地利用・被覆変化	周進・橘ヒサ子
中国吉林省における湿地の現状と利用	周進・橘ヒサ子
ティラピア背筋ミオシン軽鎖の単離とその性質	熊谷香織・浅川哲弥
北海道西海岸で採取されたエーロゾル粒子の特性	濱谷武司・櫻井兼市
On Aerosol Particles and Solid Particles in the Snow Crystal Observed in Kiruna,Sweden	Ken-ichi SAKURAI,Yoshifumi YASUDA Masahiro KAJIKAWA,Katsuhiro KIKUCHI
カワヤツメヘモグロビンⅠの三次元構造の解明とそのヒトヘモグロビン三次元構造との比較検討	上堂地美佳・姚閔・田中勲 中山亨・矢沢洋一
日本における 1980 年以降の観光開発動向	氷見山幸夫・熊谷潤一 角地禄崇、白川博順
中国土地利用・土地被覆変化研究のための地区単位	佐藤太一・氷見山幸夫
画像処理ソフトを用いた 100 万分 1 中国土地利用図の分析手法の開発	氷見山幸夫・中野宏香 神野宙史
中国東北部の LUCC 研究における満州 5 万分 1 図の利用	氷見山幸夫・森下祐作 荒井拓之介

第 37 号（平成 15 年 3 月）

施設だより　大雪山自然教育研究施設の利活用の推進に向けて Message from the Institute	氷見山幸夫
研究施設等の紹介シリーズ 大雪山自然教育研究施設	氷見山幸夫
研究施設等の紹介シリーズ 大雪山自然教育研究施設（Ⅱ）	氷見山幸夫
自然の教育	平一弘
洪河国家級自然保護区と釧路湿原国立公園における植生と保護区配置の比較	佐藤雅俊・橘ヒサ子・周進 張柏
北海道勇払湿原の土地利用・被覆変化	周進・橘ヒサ子
DID 統計から見た 1960 年以降の日本の都市化	氷見山幸夫・森下祐作
カワヤツメ骨格筋蛋白質の調製とその性質	矢沢洋一
ＥＰＭＡによる黒曜石ガラスの主成分化学組成 ー遺跡出土黒曜石の産地特定：常呂川河口遺跡の例	和田恵治・向井正幸 武田修

第 38 号（平成 16 年 3 月）

第 4 紀後半の構造運動と気候変動	平一弘
サロベツ湿原で見いだされた樽前山 1739 年噴火火山灰（Ｔａ - ａ）	佐藤夕紀・和田恵治 橘ヒサ子
カワヤツメミオグロビンの生化学的研究	矢沢洋一・中山亨・毎田徹夫
ティラピア背筋アクチンの性質 2	高井映里・菅田宏幸・浅川哲弥
釧路湿原とその周辺地域における 1920 年頃以降の土地利用・被覆変化	橘ヒサ子・鈴木一歌 星亜紀子・周進
日本における 1980 年以降の農地転用の動向	氷見山幸夫・新谷奈美 高橋賢市
日本における都市の拡大の動向とメカニズムおよびその影響	氷見山幸夫
書評 「知られざる大雪山の画家・村田丹下ー北海道から東京、故郷岩手へ、その足跡を溯る」	武田　泉
施設だより　学生とともに歩く大雪山「自然環境実習」	和田恵治
施設だより　北海道地理学会・東北地理学会 2003 年度合同秋季学術大会巡検Ⅱ「大雪山旭岳の自然と観光」に参加して	佐藤淳

第 39 号（平成 17 年 3 月）

大雪火山、御鉢平カルデラおよび旭岳の岩石記載と岩石の化学組成	佐藤鋭一・和田恵治 中川光弘
ティラピアミオシンの限定分解による S1 の調製	浅川哲弥
円口類（カワヤツメ・メクラウナギ）血漿タンパク質の性質と脊椎動物における進化	矢沢洋一・高木尚
上川盆地における 1898 年以降の土地利用・土地被覆変化	橘ヒサ子・松澤基 諏訪由樹・周進
5 万分の 1 地形図でみる新潟県の 20 世紀末の土地利用	氷見山幸夫・氷見山清子
わが国における 1980 年以降の利用目的別土地取引の動向	氷見山幸夫・浅川直希
日本と中国における土地利用と農村の持続可能性の地域間比較	氷見山幸夫
書評　大雪山国立公園 70 周年記念出版から小泉秀雄・太田龍太郎の生涯を探る	武田泉

第 40 号（平成 18 年 3 月）

知床半島羅臼湖周辺湿原の植生	橘ヒサ子
利尻富士町役場遺跡から出土した黒曜石石器の原産地 EPMA による黒曜石の主成分化学組成	和田恵治・渋谷亮太 山谷文人・向井正幸
大雪山小泉岳の雪田における気温および地表面・積雪表面温度の観測	宮本昌幸・武田泉
北海道の変形菌Ⅱ - 大雪山旭岳産好雪性変形菌	矢島由佳・西川恒彦 山本幸憲
1970 年以降の新潟県の農業的土地利用の変化	氷見山幸夫・氷見山清子
わが国における 1980 年度以降の土地区画整理事業の動向	氷見山幸夫・荒木聡
2 万 5 千分 1 地形図で見る 2000 年頃の福岡県の土地利用	氷見山幸夫・中村紀子

第 41 号（平成 19 年 3 月）

ティラピア背筋トロポニンの調製とサブユニットの単離	阿部卓・浅川哲弥
わが国における 1980 年度以降のほ場整備事業の動向	氷見山幸夫・菊地裕太
中国東北部における 1930 年頃以降の都市化	氷見山幸夫・畠山拓 森下祐作

大雪山の雪田における凝灰岩ブロックの破砕	宮本昌幸
ヤツメウナギ体内の必須脂肪酸と血中β-リポタンパク質含有量の季節変化	矢沢洋一
根釧台地、別海町中春別露頭で同定された大雪山・御鉢平カルデラ起源の広域火山灰	和田恵治・石崎直人 佐藤鋭一

第 42 号（平成 20 年 3 月）

ティラピア背筋トロポニン成分の性質	阿部卓・浅川哲弥
北海道における 1975 年度以降の農用地造成事業の動向	氷見山幸夫・岩城千佳子 新保竹司
台湾における 1925 年頃以降の都市化	氷見山幸夫・後藤友紀
2 万 5 千分 1 地形図で見る 2000 年頃の群馬県の土地利用	氷見山幸夫・本田達也
旭川市近郊の嵐山にみられるカシワとミズナラの種間雑種の変異	中原俊一・西川恒彦
オオバヨモギ北海道に産す	西川恒彦・並川寛司・中安義麿 松本美由喜・山本恵・宇野美和子 板垣大助・沖中深雪・尾野政明

第 43 号（平成 21 年 3 月）

積丹岬産カシワとミズナラの種間雑種の形態変異	中原俊一・西川恒彦
旭川市近郊および大雪山旭岳産変形菌リスト	矢島由佳・西川恒彦 山本幸憲
中国広西チワン族自治区および海南省における 1930 年頃以降の都市化	氷見山幸夫・石黒正基
2 万 5 千分 1 地形図で見る 2000 年頃の京都府の土地利用	氷見山幸夫・足立和政
わが国における 1980 年度以降の都市開発事業の動向	氷見山幸夫・塩崎大輔
中国天津市・河北省における 1930 年頃以降の都市化	氷見山幸夫・畠山拓
上富良野町民へのアンケート調査にみる十勝岳火山防災に対する住民意識	内田あゆ美・和田恵治
カワヤツメアルブミンの分子構造	矢沢洋一・高木尚・古泉幸子

第 44 号（平成 22 年 3 月）

大雪火山噴出物の露頭紹介 1 —大函の御鉢平カルデラ噴出物	佐藤鋭一・和田恵治
後期旧石器時代、旭川市共栄 7 遺跡の剥片石器とその石材原産地	中谷良弘・和田恵治
旭川市内における石狩川の水質調査に関する教材化	山本裕太・大鹿聖公
カワヤツメ及びホッキガイ筋肉中の成分含有量の季節変化	矢沢洋一
1980 年代後期以降の旭川近郊の農地利用変化	氷見山幸夫・阿部正和
わが国における 1980 年度以降の都市開発の動向	氷見山幸夫・小田桐千恵
わが国における 1980 年度以降の林地開発の動向	氷見山幸夫・山下祐太
中国東北平原南部における 1930 年頃以降の土地利用変化	氷見山幸夫・土岐友哉 林七夕乃

第 45 号（平成 23 年 3 月）

大雪火山噴出物の露頭紹介 2　—天人峡の御鉢平カルデラ噴出物　　御鉢平カルデラから流出した 2 種類の火砕流の噴出順序	佐藤鋭一・和田恵治
大雪山原生林保護林における亜寒帯針葉樹林の林分構造	並川寛司
白滝ジオパークの黒曜石 - 白滝黒曜石流紋岩溶岩群の地質解説	和田恵治
中国黒龍江省南東部における 1980 年代と 2010 年頃の土地利用	氷見山幸夫・白鳥佑一 樋口奨
ロシア沿海地方ウラジオストクーハンカ湖付近の 1980 年頃以降の土地利用変化	氷見山幸夫・家入麻友美
農業振興地域における 1980 年度以降の農地転用の動向	氷見山幸夫・大瀬秀策
書評　「大町桂月の大雪山—登山の検証とその同行者たち」清水敏一（著）　北海道出版企画センター（2010 年 04 月刊行）	武田泉
書評　「トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか」山と渓谷社　羽根田治、飯田肇、金田正樹、山本正嘉著	武田泉

第 46 号（平成 24 年 3 月）

大雪火山噴出物の露頭紹介 3 2 種類の苦鉄質包有物を含む黒岳の溶岩	佐藤鋭一・和田恵治
粘り気の違う溶岩の形態を示す学習教材 —重曹を使った火山噴火のアナログ実験	佐藤鋭一・長部伸城・須藤穂波 齊藤丈朗・佐々木惇基・和田恵治
インドネシア西ジャワ州の 1990 年代以降の土地利用・土地被覆変化	氷見山幸夫・前田亮・北海道教育大学旭川校地理学教室
中国黒龍江省西部における 1980 年代以降の土地利用変化	氷見山幸夫・葛西雅人 矢部寛
地形図で見る大阪府の土地利用、その変化と災害危険性	氷見山幸夫・武井智裕
書評　「十勝の森林鉄道—森とともに生きた幻の鉄路を捜（さが）して」小林實著　春陽堂書店・サッポロ堂書店発行、301 頁、2200 円、2012 年 1 月	武田泉

第 47 号（平成 25 年 3 月）

大雪山、旭岳の地質見学案内	佐藤鋭一・和田恵治
地形図で見る千葉県の土地利用、その変化と災害危険性	氷見山幸夫・高松開
地形図で見る愛知県の土地利用変化と災害危険性	氷見山幸夫・輪島聖也
タイ中部地方の 1950 年代以降の土地利用・土地被覆変化と水害	氷見山幸夫・藤間迪宏
書評　「自然保護と戦後日本の国立公園　一続『国立公園成立史の研究』」　村串仁三郎著　時潮社　6000 円　2011 年発行	武田泉

第 48 号（平成 26 年 3 月）

大雪火山噴出物の露頭紹介 4 忠別川沿いに露出する御鉢平カルデラ起源の火砕流堆積物	佐藤鋭一・和田恵治
フィリピン共和国中部ルソン平野および周辺地域の 1950 年代以降の土地利用変化	氷見山幸夫・阿部和輝
地形図で見る福井県の土地利用変化と災害危険性	氷見山幸夫・佐々木唯衣
土地利用動向調査の活用と展望	氷見山幸夫・高瀬慧
書評　「検証　層雲峡は、いま—観光活性化策『プラン 65』から 10 年」　長縄三郎著　共同文化社、258 p、2013 年発行	武田泉

第 49 号（平成 27 年 3 月）

大雪山の地質紹介Ｗｅｂサイトの公開	佐藤鋭一・中岡礼奈・和田恵治
1985 年頃～ 2010 年頃のインドラジャスタン州における土地利用変化	氷見山幸夫・五十嵐勇輔
中国東部平原地域における 1980 年代以降の土地利用変化	氷見山幸夫・大野翼 中井優太郎
書評　「ドキュメント御嶽山大噴火」山と渓谷社編、237 p　2014 年発行	武田泉

宮部金吾博士の大雪山高山植物園構想

── 大正14年、便せん7枚にペン書き ──

俵浩三さん 90余年ぶりに偶然発見

北海道大学黎明期に植物研究の草分けとなった宮部金吾博士が書き上げた大雪山の「高山植物園新設設計書」が北海道自然保護協会元会長、俵浩三さんによって 90 余年ぶりに発見された。便せん７枚にペンで縦書きされた直筆で、一時は不要な書類として扱われる不運にあったが俵さんによって破棄は免れ、現在は北大植物園内にある「宮部金吾記念館」が貴重な資料として保管している。発見の経緯から大雪山の高山植物園構想について俵さんに特別寄稿をいただいた。

俵（たわら）　浩三（ひろみ）

1930 年、東京出身。千葉大学園芸学部卒業。1953 ～ 1983 年の間、厚生省国立公園部、北海道林務部、北海道生活環境部に勤め、1983 ～ 2001 年、専修大学北海道短期大学教授（造園学）。1984 ～ 2008 年、（社）北海道自然保護協会理事、1994 ～ 2004 年、同会長。著書に「牧野植物図鑑の謎」「緑の文化史ー自然と人間のかかわりを考える」「北海道の自然保護ーその歴史と思想」「北海道・緑の環境史」など。

新発見の宮部金吾「大雪山・高山植物園新設設計書」と、その後の自然保護政策

1 札幌農学校２期生の三羽烏

宮部金吾（1860 ～ 1951）は、内村鑑三（1861 ～ 1930・教育者・宗教家）、新渡戸稲造 （1862 ～ 1933・教育者・国際連盟事務次長）とともに、札幌農学校２期卒業の英才トリオといわれる一人で、明治中期から昭和初年まで札幌農学校教授～北海道大学教授として、北海道の近代植物学を生み、育てた、著名な植物学者である。

宮部金吾 「北大百年の百人」（北海タイムス社刊）から

2 貴重な資料と偶然の巡り合い

いまから 30 年ほど前、私は専修大学北海道短期大学（2013 年閉校）に勤め、造園林学科で造園学を担当していた。同じ学科で林学担当の渡辺啓吾先生は、北大農学部名誉教授・今田敬一先生の娘婿だったが、今田先生が亡くなられた後のある日、「北大の今田名誉教授室を空ける必要が生じたので、片付けを手伝って欲しい」といわれ、同道して手伝った。それは、名誉教授室に残されていた物品や書籍を、①北大の備品や図書、②今田家の私物、③不用な資料など（希望者に頒布）、④廃棄処分する物、に仕分けする作業だった。

今田先生は森林美学の大家なので、私としては作業に興味があったが、③の不用な資料の中に今田先生の論文別刷りも混じっていたので、数編の別刷りをいただいた。また無記名の封筒があったので、何気なく中を確かめると、数枚の便箋に書かれた「高山植物園新設設計書」が入っていた。今田先生はこのような仕事にも関与されていたのだと思いながら、私がいただいた。

家に帰ってから眺めると、どうも今田先生の筆跡ではないらしい。ひょっとすると宮部金吾先生の筆跡かも知れない、「伝記」を参照すればヒントが得られるだろうと思ったが、当時は「伝記」を所持していなかったので、いずれ調べてみようと思いながら、本の間に挟んで仕舞いこんだ。ところがその当時は多忙をきわめ、次々と新しい仕事に取り組んだので、いつしか忘れ去られてしまった。

現在の私は高齢化したので、少しずつ身辺整理をしているが、最近、押入れに山積みとなった蔵書の下の方に挟まって、「高山植物園新設設計書」が出てきた。もしこれが宮部先生の自筆原稿であれば大変な貴重品だから、私が私蔵（死蔵）すべきでなく、北大植物園内の「宮部金吾記念館」に収納すべきと思い、私は宮部金吾博士記念出版会『宮部金吾』（岩波書店、1953）などを読んでみた。

すると4で後記するように、これは宮部先生が書いたと判断できる合理的な根拠があるため、**北大植物園の宮部金吾記念館に筆跡鑑定を依頼した。その結果、宮部金吾自筆のものと判断され、今後は同記念館の資料として保存・活用されることになった。**

私としては、まったく偶然の機会に文化財的な価値のある資料と巡り合え、その命を永らえさせることができたことを嬉しく思っている。しかし同時に、約30年もの間、忘れ去ってしまったことを深く反省している。

3 「高山植物園新設設計書」内容の要点

この設計書は、通常の便箋7枚に達筆のペン字で書かれたもので、かなり古色を帯びているが（写真1）、その要点は次のようなもので、高山植物園の「新設設計書」というよりも、むしろ「新設の必要性」を強調した内容となっている。

（写真1） 発見された「高山植物園新設設計書」

① 所在地・地域・建物

・所在地は「石狩国上川郡　大雪山及び層雲別」である。

・地域は「山頂高山帯」で「赤石川より東北、白雲岳、小泉岳（俗称）、赤岳、烏帽子岳を含む一帯」となっている（当時は地形図が未整備で、山名も不確定だったので区域が判然としないが、現在の旭岳も含む“大雪山頂一帯”の広大な地域が想定されたと思われる）。それに加えて「黒岳山麓の層雲別（石狩川岸）」に２千坪の植物園。

・建物は「山頂に石室、山麓に高山植物実験所」となっている。

② 高山植物園設立理由書

・高山植物の研究は、分類学的研究はもちろん重要であるが、近年は実験的研究が進んでいる。それはフランスの植物学者・ボンニューによって開拓されたもので、同じ植物をパリの平地と、モンブラン、ピレネーの高山帯に植栽して、変化を研究（例えばタンポポを高山帯に植えると、全体が小型化するが、地下部は相対的に長大・肥大化）、1887 年以降、数回の論文を発表している。

・その研究結果に刺激され、近年は各国で高山植物研究への関心が高まり、フランス、ドイツ、オーストリア、スイス、アメリカが競って研究を行い、高山植物の特異な形態の成因や生理、遺伝、さらに気象や紫外線など平地と異なる環境条件との関係などの究明が進みつつあり、とくにスイスではその研究がアルプ寒地農業の振興に寄与している。

・これらの研究が進展する理由は、各国の大学などが山岳地帯に高山植物園と実験施設を設け、実地に即した実験や観察を可能としているからにほかならない。

・日本でも、東京大学はすでに日光に高山植物園を設け、東北大学は八甲田山に、京都大学は伯耆大山に、高山植物園を企図している。

・とくに北海道は寒地農業の振興にも関係が深いので、高山植物研究が重要である。前記の大雪山地域は、交通の便が改善されつつあるばかりでなく、広大な環境は岩礫、砂礫、草原、湿地、池塘など変化に富み、高山植物の種類と生態が日本一といえるほど豊富・多様なので、研究の最適地である。そのため大雪山調査会は、山頂一帯を天然記念物として永く保存すべきと建議している。

・したがって**前記地域一帯は、天然記念物として現状をそのまま保存するばかりでなく、更に進んで高山植物の研究に資するため、高山植物園、研究施設を設けるべきである。**

4 「高山植物園新設設計書」は、いつ、どうして執筆されたのか

私はこの資料を再発見したのを機会に、前記した『宮部金吾』と、５で紹介する小泉秀雄『大雪山・登山法及登山案内』（大雪山調査会、1926）を熟読してみた。

その結果、『宮部金吾』の p.237 ～ 240 には大正 14（1925）年７月、北海道山岳会と大雪山調査会の共催により大雪山・層雲峡で「夏期大学」が開催され、そこに講師として出席した宮部先生が「高山植物と高山植物園」の講義を行い、翌日は層雲峡～黒岳～大雪山頂一帯を歩き、山頂でも「お花畑」の実地講義を行ったことが記述されている。

また『大雪山・登山法及登山案内』の口絵第８図（写真２）には「雲ノ平石室に於ける大雪山

夏期大学一行中の登山者」という集合写真が掲載され、「中央、金剛杖を握られるは同会講師・宮部金吾先生」との説明があり、宮部先生が大正 14(1925)年に大雪山へ登ったことが確認できた。

（写真２）『大雪山・登山法及登山案内』口絵第８図

さらに同書の巻末付録には、小泉秀雄が原稿を書き、大雪山調査会の名前で公表した「寒地（高山）植物保護区域設定請願書」と「寒地（高山）植物園設置請願書」があり、その設置目論見書には、「植物園の設計及び寒地植物の培養栽植の方法は理学博士宮部金吾氏に委嘱、指導を乞うものとする」との記述がある。

以上のことから「高山植物園新設設計書」は、大正 14 年の「夏期大学」に際して、宮部先生が執筆した資料であることが明らかとなった。ただし、ここで小さな疑問が生じた。それは『宮部金吾』には「大正 14 年７月」とあるのに、前記した黒岳山頂の集合写真の説明では「大正 14 年８月」と、夏期大学の開催月が食い違うのである。

これを確認するには、夏期大学を主催した北海道山岳会の機関誌「ヌプリ」を参照する必要がある。そのため東川町が所蔵する「ヌプリ第３号」（1926）を調べたら、「８月」が正しく、『宮部金吾』の「７月」は誤りであることが分かった。

さらに「ヌプリ第３号」の夏期大学関連記事のひとつに、受講生の松崎勉による「夏期大学日誌」が掲載され、８月 17 日の部分に次のように記されていた。「宮部博士は“高山植物園設置の目的”と題し、諸外国の高山植物の実況ならびに日本の最近に於ける傾向（東北大学の八甲田山植物園設置計画の如き）を説術したる後、研究所設置に便益ある塩谷温泉が本道一の高山である大雪山の山麓にあることから、最も好適地であることを称揚し、大雪山調査会の高山植物園設置の計画に非常の賛意を表した。」

この日誌により、３で前記した「高山植物園新設設計書」の内容は、夏期大学の講義内容と一致していることがいっそう明白となった。

5 北海道山岳会と大雪山調査会

ここで大雪山の夏期大学を共催した、北海道山岳会と大雪山調査会について紹介しよう。

５－（１）北海道山岳会

大正 10(1921)年から 12(1923)年まで在任した宮尾舜治・北海道庁長官は、学術的な調査を尊重しながら、合理的な行政を推進したことで有名な後藤新平（医師で内務省衛生局長、内務大臣、外務大臣、東京市長など歴任）から信頼される、有能な行政官だった。

当時の北海道農業は地力減退などで低迷していた。宮尾長官は自らの欧米視察の経験から北欧の有畜農業に着目し、道庁職員を欧州に派遣して調査させるとともに、デンマークから模範農家を招いて実地経営に当たらせ、また連作障害を避けるため輪作の一助として甜菜栽培を奨励するなど、旧来の北海道農業を抜本的に改善することに努めた。さらに宮尾長官は農業試験場・工業試験場の整備充実や、耐寒建築の奨励などにも力を入れた。

その宮尾長官は山が好きだったので、多くの青年男女に「登山の機会を与え、よく天然自然に親しんで心身を鍛錬し、以て将来健全有為の人」となることを期待しながら、**「北海道の山岳と自然を研究するとともに、登山者および一般旅行者の便宜を図ること」を目的とする、官製の北海道山岳会を大正 12(1923)年に設立した。**

宮尾長官は自ら総裁を務めると同時に、南鷹次郎・北大農学部長に副総裁を委嘱し、佐藤昌介・北大総長を相談役に迎え、宮部金吾、新島善直（林学)、八田三郎（動物学)、松村松年（昆虫学)、田中館秀三（地質学）などにも相談役や評議員を委嘱、多くの北大関係者から好意的な協力が得られる体制を築いた。実際の運営を担う幹事役には、当時はまだ観光課が存在しなかったので、道庁の道路課長、林務課長、建築課長などが当たる他、北大教員などの名前も見られた。

北海道山岳会がとくに重視したのは大雪山だった。先ず初年度は大雪山の旭岳と黒岳で登山路改修や石室の建設を行い、翌年これを完成させた。また支庁ごとに支部を設け、一般の人を対象に、例えば恵庭岳（本部)、樽前山（本部)、後方羊蹄山（後志)、有珠山（室蘭)、十勝岳（上川)、旭岳（上川)、然別湖（十勝)、雄阿寒岳（釧路）などで登山・ハイキングを楽しむ行事を実施、さらに毎年、場所を変えながら夏期大学または林間学校を開催、冬季はスキー大会を実施するなど、活発に活動した。

ところが大正 12 年秋に関東大震災が発生し甚大な被害を被ったため、政府は急いで「帝都復興院」を新設し、後藤新平を総裁とした。すると後藤総裁は信頼していた宮尾舜治が帝都復興院副総裁となってくれるよう要請したため、北海道山岳会の生みの親、宮尾長官は惜しまれつつ北海道を去ってしまった。

宮尾長官の後任長官は、北海道山岳会に消極的だったらしい。北海道山岳会の機関誌「ヌプリ第３号」(1926）の「役員月旦」という欄には、次のように記されている。「(常任幹事の）遠山さんは恰も家が左前になってから所帯を引き受けた相続人のようなものだ。補助金が一萬円などという山岳会の黄金時代は昔のこと。今では地方費の緊縮とやらで三百円に減らされているが、それでもこの相続人はよく貧苦に耐えて、貧乏所帯をやり繰っている。」

このようにして北海道山岳会は資金が先細りとなり、各幹事は寄付金集めに奔走せざるを得なくなるなど、山岳会の活動が鈍化し、昭和初年には影が薄くなってしまった。

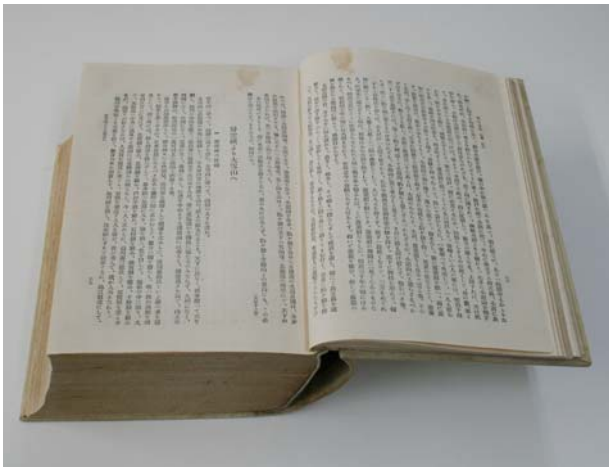
５－（２）大雪山調査会

大正中期まで、登山対象地としての大雪山は未知の世界だった。その大雪山を最初に世間へ知らせたのは、明治 44(1911)年から大正９(1920)年まで上川中学校（現旭川東高校）の博物（地学・植物）の教師だった小泉秀雄である。当時はまだ５万分１「地形図」がなく、不正確な 20 万分１概略図があるだけで、多くの山は山名が未確定だった。したがって小泉は旭川に在職中、たいへんな苦労を重ねながら、ほとんど人跡未踏の大雪山地域を７回にわたり広範に踏査し、火山地形や高山植物の種類や分布を研究、その結果を日本山岳会の機関誌「山岳」に、「大雪山登山記」(1917)、「北海道中央高地の地学的研究」(1918）として発表した。(「山岳」(1918）は大雪山だけの特別号で東川町の所蔵文献にある)

この報告文は登山愛好者に注目された。例えば著名な登山家・大島亮吉は大正９(1920)年、小泉の足跡を追うように松山温泉（天人峡）～トムラウシ山～石狩岳～層雲峡を歩き、「石狩岳よ

り石狩川に沿うて」をまとめた。（大島『山―研究と随想』（1930）に所収、東川町の所蔵文献にある）

また名文の旅行記を多く残した大町桂月は大正 10（1921）年、小泉の足跡に触発されて大雪山に登り、「富士山に登って山岳の高さを語れ、大雪山に登って、山岳の大さを語れ」「大雪山は実に天上の神苑なり」と称えた。（大町「層雲峡より大雪山へ」として大正 12 年の中央公論に発表、『桂月全集　別巻』（写真 3）『層雲峡　大町桂月記念号』所収、東川町の所蔵文献にある）



（写真３）『桂月全集　別巻』の『層雲峡から大雪山へ』

こうしたことにより、大雪山が次第に知られるようになるとともに、塩谷温泉、層雲別など不確定に呼ばれていた地名が「層雲峡」として定着した。

ところで大町桂月の登山計画に関与した地元の関係者、塩谷忠と荒井初一は、当時ほとんど未開だった層雲峡を、桂月の名文で知名度向上につなげたいと、ある策略を考えた。それは桂月が松山温泉（天人峡）から旭岳を往復する予定だったものを、無理やり層雲峡～黒岳～旭岳～松山温泉のルートに変更させてしまったのだという。

当時、このルートは登山路がまだ一部しかなく、危険と苦労が多かったが、結果的には塩谷と荒井に大きな恩恵をもたらした。なぜなら塩谷は大正４（1915）年以来、石狩川岸に小さな温泉宿を営んだ塩谷水次郎（塩谷温泉といわれた）の養子で、自らは新聞記者として身を立てていたが、層雲峡の知名度が上がるのは大歓迎。また荒井は旭川の商工会議所会頭を勤めるなど、財力のある実業家で、塩谷温泉を買収して大きな温泉宿（層雲閣グランドホテルの前身）を経営していたからである。

こうして大雪山と層雲峡の知名度アップが一歩踏み出したのを機会に、大雪山の自然をさらに詳しく調べ、登山者などを呼び込んで地域を活性化したいと考えた塩谷と荒井は、大正 13（1924）年に大雪山調査会の設立を決意し、小泉秀雄に協力を求めた。

小泉は大正９（1920）年に旭川を離れ、長野県松本市で女子師範学校の教員となっていたが、荒井の費用負担により、夏休みを利用して大雪山を調査できるのは、願ってもないことである。小泉は大正 13 年と 14 年の夏に大雪山を精力的に調査し、新しい情報を加えて『大雪山・登山法及登山案内』（大雪山調査会、1926）にまとめた。小泉は松本時代に日本アルプスや八ヶ岳、富士山などにも登って調査したので、本書には本州の山と大雪山を比較する視点も含まれ、大雪山の総合的案内書としては空前絶後の名著というべき存在となり、昭和 20 年代前半まで実用的価値を失わなかった。（東川町の所蔵文献にある）

大正 13（1924）年に設立された大雪山調査会は、荒井が会長として財政面を支え、塩谷がジャーナリストとして企画や運用面などの実務を担当、小泉が自然科学的調査を進め、この３者が中心となって大雪山の夏期大学を共催するなど、多くの業績を残した。しかし昭和３（1928）年に荒井が死亡すると資金面が細くなり、昭和初年には活動が停滞するようになってしまった。

ところで東川町が編纂した最新刊、『大雪山　神々の遊ぶ庭を読む』（新評論、2015）は、清水敏一・西原義弘が執筆したものであるが、**「旭岳の名付け親・小泉秀雄カムイミンタラを行く」「大雪山の生き字引き・塩谷忠の人生をたどる」**という章もあり、荒井と塩谷がどのような策略をめぐらせて大町桂月の登山ルートを変更させることに成功したのか？　変更した層雲峡～黒岳ルートの未整備部分でどんな苦労を強いられたのか？　など「秘話」に類する数々の事実が、興味深く語られている。

島崎藤村の「夜明け前」という小説は、幕末から明治維新を時代背景として「木曽山中の夜明け前」を語った名作であるが、『大雪山　神々の遊ぶ庭を読む』は、まだ世間に知られていない大雪山を時代背景としながらが、「大雪山中の夜明け前」を語った快作である。（東川町の所蔵文献には、その他に清水敏一『大雪山の父・小泉秀雄』（2004）、同『大雪山わが山小泉秀雄』（1982）、同『大町桂月の大雪山』（2010）など多くの関連図書がある）

6　大雪山の天然記念物・特別保護地区指定への道

６－（１）高山植物園計画のゆくえ

前記の３で例示された東京大学と東北大学の高山植物園の現状は、いずれも大学の研究施設で、前者は「東大植物園・日光分園」、後者は「東北大植物園・八甲田山分園」となっている。北海道大学の場合に当てはめると「北大植物園・大雪山分園」という位置づけとなるだろう。ところが北大植物園が存在する札幌は亜寒帯に属し、園内には岩山（ロックガーデン）に高山植物を栽培・研究する整備も進められている。それなのに同じ亜寒帯の層雲峡に「大雪山分園」を整備しても、その整備効果は高いといえなくなってしまう。それが理由かどうかは知らないが、層雲峡の高山植物園は実現されることがなかった。

６－（２）　北海道の天然記念物の特性

宮部金吾と大雪山調査会が大雪山の天然保護区域を要望したころ、国や北海道の行政では、どのような自然保護対策を考えていたのだろうか。北海道の開拓は、国有未開地を開拓者に無償払下げ処分することで進展したので、原始林が急速に失われた。そのため有志による自然保護意識の芽生えも早かった。

以下の６－(2)（3）（4）の項目は、俵浩三『北海道の自然保護』（1979）と俵浩三『北海道・緑の環境史』（2008）（ともに東川町の所蔵文献にある）からの要点紹介である。

天然記念物と国立公園が国レベルで論議されるようになったのは、明治 44(1911)年の帝国議会においてであるが、北海道では国よりも早く自然保護思想が芽生えていた。例えば浅羽靖（北海学園の創設者）は、明治 35(1902)年に「北海道旅行倶楽部」という自然保護団体を設立、北海道の「古蹟勝優の地を探討調査」し、これを世に知らせると同時に保存方法を考える運動を開始した。浅羽はやがて政治家となったので、恐らくその影響もあり、北海道庁は国に先行して大正２(1913)年に「原生天然保存林」を制度化した。

天然記念物は、大正８(1919)年の史跡名勝天然記念物保存法（昭和 25 年に文化財保護法）で

制度化された。その指定は大正 10(1921)年から始まったが、本州・四国・九州では、○○の大イチョウ、××の大ケヤキなど巨樹老木の単木指定が圧倒的に多いのに対し、**北海道では巨樹老木の指定は一件もなく**、後方羊蹄山の高山植物帯、野幌原始林、円山原始林、藻岩原始林など、**すべて群落指定であることが大きな特徴**である。大雪山でも天然記念物を想定して、中井猛之進「北海道石狩国大雪山植物調査報告書」(1930) が公表されたが、実際の指定は戦後まで遅れた。

６－（３）石狩川上流保護と国立公園の意識

明治 44（1911）年の帝国議会では「富士山を中心として国設大公園設置に関する建議案」や「日光山を大日本帝国公園と為すの請願」などが審議されたが、前出の浅羽靖は国会議員となっており、きわめて重要な役割を果たした。すなわち浅羽は「国設大公園の設置に賛成であるが、これは富士山に留まらず、琵琶湖、六甲山、箱根、伊豆、日光、軽井沢など、**北海道では石狩川上流を含め、全国各地の景勝地を選んで国設公園とすべきではないか**」と政府に提案した。その結果「富士山を中心として」という字句が削除され、（全国を対象とする）「国設大公園設置に関する建議」として採択された。

これが日本の国立公園の出発点であるが、天然記念物は「点」で小面積が多いのに対し、国立公園は「面」で大面積が多く、多額な予算を必要とし、権利制限も困難を伴うため、国の行政としては天然記念物が先行し、国立公園は遅れをとった。

ところで浅羽靖が「石狩川上流」すなわち大雪山に言及したのは、太田龍太郎・愛別村長（現上川町も愛別村に含まれていた）からの働きかけがあったからである。

明治 43(1910)年、村長に就任した太田は着任するとすぐ、将来の鉄道建設の可能性を探るため、石狩川上流（現在の層雲峡付近）に探検的な踏査を行った。すると川岸には柱状節理の巨岩が立ち並び、「幽玄神秘」な景観は「天下無双と断言せざるを得ず」というほど優れているので、その様子を「**霊山碧水・石狩川源探検**」と題する紀行文として新聞に発表した。するとそんな景勝地があるなら土地を払い下げてほしいという人が続出した。そのため太田村長は、石狩川上流一帯を「**保存禁伐林として断然個人の有に帰せしめず、徐々国家の事業として経営あらん事を切望措く能はず**」という趣旨の陳情書（「石狩川上流霊域保護国立公園経営の件」）を鉄道院総裁あて提出した。太田は帝国議会の動きをよく承知しており、浅羽は太田の要望を聞いていたのである。

この件に関しては太田村長の孫に当る笹川良江さんが、『「大雪山国立公園」生みの親・太田龍太郎の生涯』(2004)（東川町の所蔵文献にある）として詳しく解説しているので参照していただきたい。

６－（４）国立公園の本質論争―保護か開発か

天然記念物行政は、史跡名勝天然記念物保存法の成立（1919）と同時に、国立公園に一歩先んじて**内務省官房地理課**で開始された。ここでは学識経験者（徳川頼倫・貴族院議員、三好学、白井光太郎、武田久吉など）からなる史跡名勝天然記念物調査会が候補地の選定を進めたが、国立公園も大面積の天然保護地域として天然記念物制度にとり入れるべきと考え、積極的な発言を始めた。造園学者・上原敬二も同じ考えだった。

一方、遅れをとった国立公園に関しては、国民の保健休養という観点から都市公園を所管していた**内務省衛生局保健課**が、国立公園も公園行政の一環として扱いたいと大正９(1920)年、造園学者・田村剛に委嘱して研究を始めた。田村は国立公園の保健休養的役割を重視したが、田村の恩師である本多静六林学博士も保健休養を重視していた。

要するに、地理課では国立公園を、厳正に自然保護する地域であり、観光的利用は目的ではないと考えたのに対し、保健課では国立公園を、自然保護と同時に、国民の保健休養の場として観光的に利用する地域と考えた。そのため大正中期から昭和初期にかけ、国立公園とは何かの本質論争が活発に繰り広げられ、同時に国立公園行政は「地理課」と「保健課」のどちらで所管するべきか、激しい“綱引き”が行われた。

しかし国立公園候補地として浮上してくる地元の要望としては、厳しく自然を保護するよりも、道路や宿舎が整備され、地域が活性化する方向を望んでおり、また優れた景勝地に外国人を招致し、国際観光を振興させようという機運も高まり、**結局は衛生局保健課（後の厚生省・環境庁・環境省）が国立公園行政を所管することになった。**日本の国立公園は自然保護に弱いといわれる一因は、出発時点の所管官庁の性格にある。

（国立公園に関連する東川町の所蔵図書には、前記した俵浩三の２著の他、保護開発論争を詳しく分析した村串仁三郎『国立公園成立史の研究・開発と自然保護の確執を中心に』（2005）、田中正大『日本の自然公園・自然保護と風景保護』（1981）、加藤峰夫『国立公園の法と制度』（2008）などがある）

６－（５）天然保護区域と特別保護地区の指定は昭和 46 年

国立公園は昭和６(1931)年の国立公園法（昭和 32 年に自然公園法）で制度化された。大雪山国立公園は昭和９(1934)年に指定されたが、当時は天然保護区域に相当する特別保護地区という制度がまだ存在していなかった。

昭和初期からの日本は戦時体制が強まり、やがて日中戦争から太平洋戦争へと戦火が拡大し、本格的な自然保護関係行政は“開店休業”の状態に陥ってしまった。

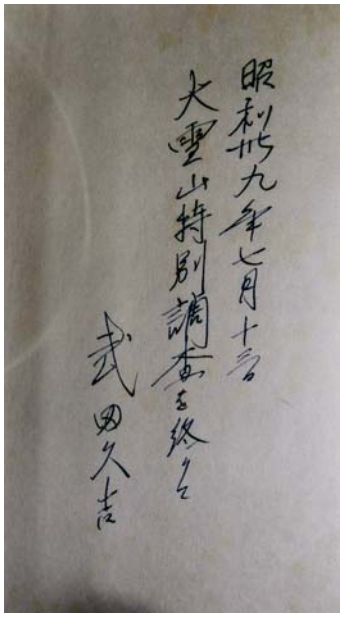
戦後復興に目処がついた昭和 24(1949) 年、国立公園法が改正され、自然環境を厳しく保護する「特別保護地区」制度が新設された。また翌 25(1950)年に史跡名勝天然記念物保存法が文化財保護法に生まれ変わった。それを契機に、戦前からの懸案である大雪山の特別保護地区指定や天然記念物指定も関係者の間で強く意識されるようになった。

ところが残念ながら、昭和 29(1954)年の洞爺丸台風により、石狩川源流など大雪山心臓部の原生林が壊滅する、莫大な風倒木被害が発生してしまった。（東川町の所蔵文献には、『北海道の森林風害記録』（北方林業会）、『風災 1400 萬石』（上川営林署）、『風倒・　風倒木処理終了記念』（上川営林署）などの参考資料がある）

そのため自然保護地域設定などは風倒木処理が完了するまで棚上げされ、その論議ができるようになったのは昭和 40 年前後である。昭和 39 年には、日本山岳会の創立メンバーである重鎮の植物学者・武田久吉先生（当時 81 歳）が団長となり、健脚ぶりを発揮しながら石狩川源流～沼ノ原山～忠別岳～白雲岳～黒岳などを踏査する「大雪山特別調査」（文化庁）が実施されたが、私も道庁職員として随行する機会を得た。写真４は、その時に武田久吉『原色日本高山植物

図鑑』（保育社、1959）の表紙裏に頂いたサインである。（東川町の所蔵文献には「大雪山・特別調査報告書」（北海道教育委員会）がある）

その他に厚生省国立公園部、林野庁なども実地調査を重ねた結果、**昭和46(1971)年、大雪山・トムラウシ山・十勝岳・石狩岳・ニペソツ山などの山頂部一帯を包含する約3万6千haが環境庁（環境省）の国立公園特別保護地区に、ほぼ同じ範囲が文化庁の天然保護区域に指定された。なお後者は昭和52年に特別天然保護区域に格上げされた。**



（写真4） 武田久吉先生のサイン

ただし、6－（2）で前記した後方羊蹄山の天然記念物の場合は山頂部だけでなく、山麓～中腹～山頂に至る垂直分布の植生変化が理解できる範囲が含まれているのに対し、大雪山の場合は原生林が洞爺丸台風で壊滅したため、中腹部以下が含まれていないのが残念である。数十年～百年後には原生林が蘇ってほしいものである。

また層雲峡の植物園計画については、大学の研究施設としての「北大植物園・大雪山分園」は困難だとしても、一般人を対象とする小規模の「高山植物見本園」の整備は、関係者の努力によって実現してほしいものである。

（注釈）

①勇駒別の地名変更

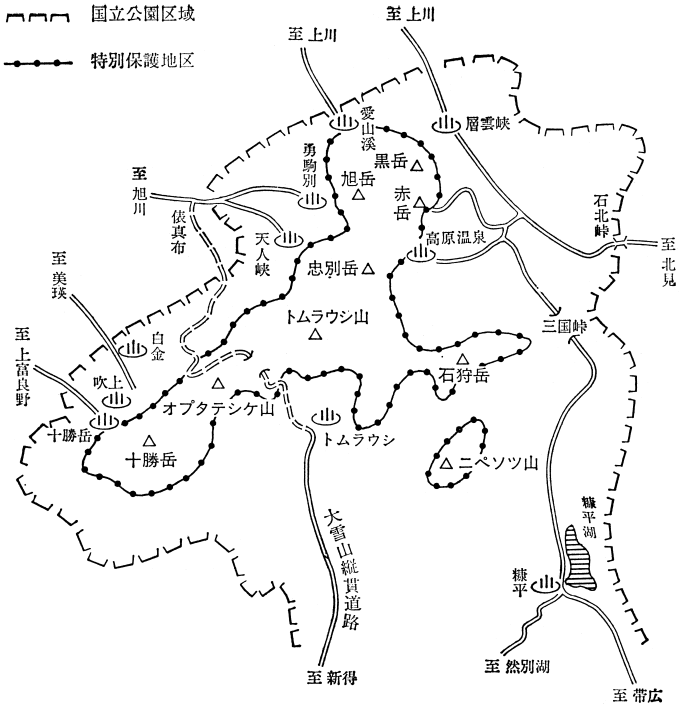
勇駒別温泉は、1982年に旭岳温泉と地名変更された。

②大雪山縦貫道路の建設中止

大雪山縦貫道路の未開削部分（トムラウシ温泉～俵真布）は1973年、自然保護世論の高まりにより、道路計画が撤回された。

③大雪山縦貫道路計画の自然保護問題

計画撤回の経緯を知りたい方は、東川町所蔵文献の俵『北海道の自然保護』p 276～281、あるいは寺島一男「大雪縦貫道」（あさひかわ新聞・25回連載）を参照していただきたい。



（参考図）大雪山国立公園・特別保護地区概略図
（俵『北海道の自然保護』（1979）から転写）

一の弟子・舘脇操と大雪山　宮部博士の歴史的資料発見に寄せて

大雪山房主宰　清 水 敏 一

このたび宮部金吾の「高山植物園新設設計書」が発見されたことを知った。俵浩三先生が約100年の時を経て発見されたのである。ワープロもない時代のこと、当然直筆である。執筆者の氏名も日付の表記もないが、筆跡から宮部金吾と判明したそうである。一読したがきわめて興味深い内容であった。文書は高山植物園構想の計画書、趣意書のようなものであるが、内容もさることながら表現がおもしろい。

まず文語体であること、カタカナ表記であること、難解漢字を多用していることであるが、これらは当時の公文書スタイルであったのである。また面積は坪、山の高さはメートル、つまり尺貫法とメートル法が混在していること、欧米のことを論ずるときは西暦年である。「巴里」(パリ)、「瑞西」（スイス）なども、戦後世代には読みにくいだろう。「ピレ子ー」（子は十二支の「ネ」）も変わった表現である。同じ例は旭川の『川村カ子トアイヌ記念館』であろう。

宮部は達筆であるが、独自のくせ字もある。返り点でも打ちたいような漢文的表現、語彙の漢字も送り仮名無しもあれば、逆に過剰もある。氏名も日付もないので草稿であろうが、だとすれば活字になって公表されたものがあるかも知れない、という思いもしなくはない。今回は宮部の直筆であることがはっきりしたからいいようなものの、もし弟子が代筆したとすれば、代筆者は誰か、真の筆者は誰かも検証しなければならなくなってくる。

今では宮部は歴史的人物である。万延元年（1860年）生まれなので、幕末、明治、大正、昭和も敗戦後まで生きたことになる。エルムの杜の頭脳群像『北大百年の百人』（北海タイムス社・1976年）によると、松浦武四郎と宮部の父が懇意にしていたので、武四郎は好奇心旺盛な宮部を「養子にくれ」と望んだというが、こうなればもはや伝説的エピソードである。また宮部は北大出身者として初の文化勲章を受章、札幌名誉市民第１号である。このような大人物が私と20年近くも時を同じくしたとは、信じられないくらいフシギな気がする。

さて本題の舘脇操に戻そう。舘脇は宮部の一の弟子というべき存在であろう。彼は『寒帯林』創刊号に書いている。同誌は旭川営林会(局)の機関誌であり、1949年12月創刊である。舘脇は「『大雪山の植物』に寄せる」という一文を寄稿した。舘脇著『大雪山の植物』は同年９月、㈶林友会旭川支部から発行したので、そのことにふれて書いたのである。冒頭に宮部が登場する。

1925年（大正14年)、北海道庁主催（すなわち北海道山岳会）で夏期大学が開催され、宮部は講師として「高山植物園と高山植物」を講ずるために層雲峡に入った。それに随行したのが舘脇である。彼にとっては初めての入峡であり、初めての大雪山であった。登山道はできたとはいえ、上川からはバスもなくトラックもなく、宮部は馬で、彼は徒歩でつき従ったという。層雲別（清川）から先はまだかなりの森林で、層雲峡から先は道らしい道もなかった。

小函に行くためには層雲閣前の一本橋をわたらなければならないが、このときほどヒヤヒヤしたことはなかったと語る。彼はこれまでにも宮部に従ってずいぶん旅行しているが、この一本橋には恩師の体をおもんばかって、肝を冷やしたようだ。層雲閣に宿泊ののち、大雪山黒岳に登り石室に２泊し、雲の平から北海沢のあたりを調査している。舘脇の心配にもかかわらず、66歳の宮部は思いのほか元気であった。

小泉秀雄著『大雪山　登山法及登山案内』に、桂月岳を背にして黒岳石室前で撮った１枚の集合写真がある。総勢 35 人、中央金剛杖の宮部金吾と、白服の大雪山調査会理事・塩谷忠しか記名していないが、当然この中には舘脇もいる。宮部の右後ろに付き添い、背広姿の大柄な男である。そのほか河野常吉（講師）、犬飼哲夫、坂本直行、著者・小泉も参加しているので写っているはずだ。ご来迎の時刻まえには宮部に起こされ、固い眼をこすったと舘脇は述懐する。このときに登った宮部のほか、犬飼、舘脇、坂本も、前記『北大百年の百人』は取りあげている。

舘脇はその後、千島、満蒙方面の調査に力を入れたので、大雪山からは足が遠のいてしまった。その前後に大雪山は小泉秀雄をはじめ、兄・小泉源一（京大）、原田泰（北大）、中井猛之進（東大）、秋山茂雄（北大）、木村有香（東北大）、武田久吉、本田正次（東大）、北村四郎（京大）など、一流の植物学者が相次いで入山、調査が進められていった。こういう例は白馬岳、富士山、日光くらいではなかったかと彼はいう。

敗戦翌年の 1946 年、舘脇は久しぶりに大雪山へ、46 歳。そのまえに発疹チブスを発症、予後の回復を計って入山、黒岳石室を中心に小泉岳から噴火口壁を歩き、さらに旭岳から姿見の池に下り、裾合平をたどって中岳を経て石室に帰る。５日ばかりの山歩きに健康にも自信を得て層雲峡に下山した。1947 年にはニセイカウシュッペ、黒岳、北鎮、愛山渓から沼ノ平、当麻乗越を経て姿見の池を探る。1948 年は黒岳から高根ヶ原、トムラウシに登り松山温泉に下山している。

以上、駆け足で３年間にわたる大雪山登山調査の跡をたどったが、その成果が『大雪山の植物』となって結実したのである。本書の装幀は今田敬一（『北大百年の百人』に記載）、林学の専門家であり、自然保護運動の先導者であった。また美術に造詣が深く、この方面の活動も顕著、そのようなことから舘脇は今田に装幀を依頼したのであろう。今田は後年『北海道美術史』（北海道立美術館友の会、1970 年）を著す。布装箱入の格調高い本である。

『寒帯林』1950 年６月号に舘脇は「大雪盆地」を寄稿している。大雪盆地とは今はなき士幌線の終着駅「十勝三股」の一帯である。1949 年の大雪山調査行７月 26 日から 28 日の記録であるが、26 日は快晴でユニイシカリの肩から大雪盆地（三股高原）の森林の大観、360 度山々の大展望を満喫する。27 日、石狩川への下りには、大正年間にこのあたりを歩いた大島亮吉を回想する。28 日はニセイチャロマップの河岸林を調査、雨が降り出し濡れた丸木橋では滑落、ケガはなかったが全身ずぶ濡れという一幕もあった。

舘脇はまた同年８月号の『寒帯林』に「高山植物園と高山植物館」を寄稿した。場所は旭川市常磐公園である。準備から開館、三笠宮ご来館、館内の見取り図、陳列展示品、植栽された高山植物の品種など、こと細かく記述。最後に鮫島（惇一郎）君らの影の大活躍には感激ものと、感謝の意を表している。

続いて９月号に「座談会―道博の高山植物館を語る」が載った。出席者は司会を含めて 13 人、もちろん舘脇の名はない。出席者の言を伝えてこの稿を終えたい。「舘脇さんは実によくやって下さいました。人目につかない所で荒らさないよう採られたことは勿論ですが、一本の無駄もないよう花の咲いたのを山から下ろしたり、花のすんだのを元の場所にかえしたり、学生さんをつかってやっておられましたが、こうした思いやりには頭が下がります」。

ご協力いただいた方たち

東川町がふるさとの山、大雪山に関する本を集め、目録作りを進めていることに多くの方から賛同とお力添えをいただきました。貴重な本、研究書の情報、あるいは原稿をお寄せいただき、また、書籍、資料の寄贈もいただきました。お名前を書き残し、お礼とします。

安細和彦さん、石川球太さん、岩舘匡宏さん、上田茂春さん、梅沢俊さん、大須賀羊一さん、大塚友記憲さん、神田健三さん、小泉雅彦さん、後藤昌美さん、堺井勇希さん、佐々木茂夫さん、佐藤清吉さん、佐藤文彦さん、清水敏一さん、渋谷正己さん、嶋田健さん、菅野由志子さん、宗万忠さん、宗万脩史さん、大門章さん、高津豊さん、高澤光雄さん、武田泉さん、俵浩三さん、戸川久美さん、二橋愛次郎さん、早川禎治さん、播磨秀幸さん、前田光彦さん、渡辺康之さん
日本山書の会、北海道教育大学附属図書館旭川館、北方現代社

大雪山から育まれる文献書誌集

～豊かな自然・さまざまな生命・歴史文化の記録～

編集・発行／写真文化首都「写真の町」東川町
〒 071-1492 北海道上川郡東川町東町 1 丁目 16 番 1 号
TEL 0166-82-2111
http://town.higashikawa.hokkaido.jp

企画・制作／株式会社 総合企画

発　行　日／平成 28 年 3 月

表紙写真　旭岳の麓に９月中旬から美しい紅葉が広がる。天人峡温泉から歩いて約３時間の第一公園からの眺め。

（撮影：大塚友記憲　YUKINORI OTSUKA photography）